神明遺跡

（第１次・第２次調査）

土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第５集

１９９８年

土浦市教育委員会

土浦市遺跡調査会

神 明 遺 跡

（第１次・第２次調査）

土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第５集

１ ９ ９ ８ 年

土浦市教育委員会

土浦市遺跡調査会

遺跡遠景（北から）

3 号住居炉址検出状況

序

土浦市は現在、第５次総合計画の一つとして、総合運動公園を常名地区に建設することを計画しています。これは、現在ある川口運動公園の機能を拡充・移転することで、より一層のスポーツ行政の振興を図る目的によるものであります。

移転先となる常名地区は、市指定史跡の常名天神山古墳や市指定文化財の金山寺五輪塔など、貴重な文化財が少なくない地域です。建設予定地内には、埋蔵文化財の遺跡が４か所含まれています。運動公園の建設に際しては、記録による保存処置を講じる必要があります。

そのため、土浦市では平成５年度から埋蔵文化財の発掘調査を継続して行っています。この結果、平成９年度は、縄文時代の家のあとなどの貴重な文化財が発掘されました。この報告書が郷土の歴史の解明に役立ち、今後の文化財行政の発展につながることを祈念するものであります。

最後になりますが、調査に際して御協力をいただいた関係諸氏、諸機関に厚く御礼申し上げます。

土浦市教育委員会
教育長　尾見彰一

例　言

1、当報告書は、土浦市常名地内に建設を予定している土浦市総合運動公園建設事業に伴ない、実施された埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2、当報告書は、土浦市大字常名2774番地ほかに所在する、神明遺跡(県遺跡番号 5332、市遺跡番号C－57)の第1次及び第2次調査に関するもので、調査面積は各々3062㎡と3916㎡である。

3、発掘調査は、土浦市都市計画部新運動公園課(現 公園緑地課新運動公園建設室)から委託を受けた、土浦市遺跡調査会が実施した。調査担当は橋場君男があたり、調査員 本田信之と鶴町明子がこれを補った。

4、発掘調査は、平成9年7月8日から平成9年9月18日まで行なった。整理作業は、平成9年10月から平成10年3月まで行なった。

5、本書の編集は、橋場君男が行った。遺構についての執筆は、本田信之、鶴町明子、橋場君男が、遺物についての執筆は、石器を窪田恵一、縄文土器を福田礼子、その他の遺物を橋場が担当した。写真撮影は、遺構を本田、鶴町、橋場が、遺物を橋場が行なった。

6、当調査については、以下の方々や機関に、御協力と御厚意を頂きました。記して感謝申し上げます。(敬称略、50音順)

海老沢 稔、株式会社国土測量、小玉秀成、財団法人茨城県教育財団、清水　薫、仙波　亨、土浦市都市計画部新運動公園課、土浦市文化財保護審議会、根本達夫、萩野谷 悟

7、当調査の出土遺物や記録類は、土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管している。

凡　例

1、遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真ともに一致する。

2、挿図図版中の縮尺は、遺物は、基本的に1/3または1/6、小型のものは原寸で表現した。遺構は、基本的に1/60、遺構内の付属施設と全体図は掲載されたスケールによる。

3、挿図中の遺構の表現方法は、以下に従う。

1）方位はすべて北を示し、数値は海抜高度を示す。

2）遺構の推定方向は、破線で示す。

3）焼土・被熱赤化範囲　硬化面　土器・土製品 ●　石製品 ▲　骨粉 △

4）略称　竪穴住居：ＳＩ　土坑：ＳＫ　溝：ＳＤ　古墳：ＴＭ　撹乱：Ｋ
ピット：Ｐ

4、挿図中の遺物の表現方法は、以下に従う。

1）回転復元実測を行なった遺物は、中心線を一点鎖線とする。

2）実測図上の矢印は、ナデやケズリなどの調整方向を示す。

3）法量欄　Ａ：口径　Ｂ：底径　Ｃ：器高
〔推定値〕……回転復元などによって、推定して得られた数値
（現存値）……現状で遺存する部分のみの数値

4）土器　繊維土器　須恵器：断面黒色　黒色処理　炭化物付着

5）陶磁器　灰釉　鉄釉　錆釉　青磁

6）石器・石製品　研磨面　素材時の剝離面　敲打痕

5、遺構の番号のうち欠番となっているものは、発掘・整理中に検討を加えた結果、遺構ではないと判断して削除したものである。

6、遺構の覆土・遺物の色調判定は、『新版　標準土色帖』（編　小山政忠・竹原秀雄　1990）を用いた。

7、挿図４では、２万５千分の１地形図「常陸藤沢」を用いた。

平成９年度土浦市遺跡調査会組織

会　　長	須田直之	土浦市文化財保護審議会長
副会長	尾見彰一	土浦市教育委員会教育長
理　　事	大塚　博	土浦市文化財保護審議会委員
	五頭英明	土浦市企画調整課長
	出地隆治	土浦市区画整理課長
	坂入　勇	土浦市建築指導課長
	石神進一	土浦市都市計画課長
	細田俊雄	土浦市耕地課長
	内海崎保生	土浦市土木課長
監　　事	中川茂男	土浦市教育委員会教育次長
	小野政夫	土浦市監査事務局長
幹事長	宮本　昭	土浦市教育委員会文化課長
幹　　事	矢口俊則	上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館副館長
	萩島　優	土浦市教育委員会文化課課長補佐
	小貫俊男	土浦市教育委員会文化課主査兼文化財係長
	榎　陽介	上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館主幹
	塩谷　修	上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館係長
	石川　功	上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館主幹
	黒澤春彦	上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館主幹
	中澤達也	土浦市立博物館主幹
	関口　満	上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館主事
	橋場君男	上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館主事
	宮本礼子	土浦市教育委員会文化課文化財係主事

調 査 者 名 簿（敬称略50音順）

調査担当　　橋場君男（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）

調査員　　窪田恵一　黒田友紀　鶴町明子　福田礼子　本田信之

調査補助員　野原大輔（茨城大学）　山内初子（奈良大学）

事務担当　　鈴木ひと美

事務局　　土浦市教育委員会文化課

発掘参加者（10日以上）

赤根茂也　新　清　石浜敏子　市村光子　大久保敦子　岡田さだ子　岡田次男　小野　豊
鏡原美和子　菊田眞代　坂　みよ　佐藤英夫　島田初男　関野喜久代　高野敏江　田畑保子
土屋和馬　戸崎生子　戸崎由三郎　富島　繁　中野富美子　沼尻幸子　沼尻久子　沼尻文子
平井幸子　藤崎雅世　松浦澄子　松浦博子　丸岡公子　宮本　操　矢口なか　梁田淑子

整理参加者（10日以上）

天谷瑛子　新井栄子　石浜敏子　石山春美　大久保由紀子　大坪美知子　大野美津子　川田光子
小松崎廣子　富田シズエ　長嶺道子　浜田久美子　槇田整子　松川さち子

目　次

序
例言
凡例
土浦市遺跡調査会組織
調査者名簿
目次

第１章　調査経過 …… 1
第２章　環境 …… 2
第３章　遺構と遺物
　第１節　第１次調査区の遺構と遺物 …… 9～53
　第２節　第２次調査区の遺構と遺物 …… 54～69
　第３節　遺構外出土遺物 …… 69～81
第４章　結語 …… 82
報告書抄録 …… 83
参考文献
写真図版

挿　図　目　次

第１図　調査区全体図　3
第２図　第１次調査区全体図　4
第３図　第２次調査区全体図　5
第４図　周辺の遺跡　7
第５図　基本層序　8
第６図　１号住居址検出状況　10
第７図　１号住居址遺物出土状況　11
第８図　１号住居址出土遺物①　12
第９図　１号住居址出土遺物②　14
第10図　１号住居址出土遺物③　15
第29図　２号溝遺物出土状況　41
第30図　３号溝検出状況・出土遺物　42
第31図　４号溝検出状況・出土遺物　44
第32図　５号溝検出状況・出土遺物　45
第33図　６号溝検出状況・出土遺物　47
第34図　７号溝検出状況・出土遺物　48
第35図　８号溝検出状況・出土遺物　49
第36図　１号掘立柱建物址検出状況　51
第37図　９号溝検出状況　53
第38図　10号・11号土坑検出状況　55

第11図　2号住居址検出状況　16
第12図　3号住居址検出状況　19
第13図　3号住居址炉址検出状況　20
第14図　3号住居址出土遺物　21
第15図　4号住居址検出状況　22
第16図　1号・2号土坑検出状況　24
第17図　3号土坑検出状況　25
第18図　3号土坑出土遺物①　27
第19図　3号土坑出土遺物②　28
第20図　4号・5号土坑検出状況　29
第21図　7号土坑出土遺物　30
第22図　6号・7号土坑検出状況　31
第23図　8号・9号土坑検出状況　33
第24図　1号溝検出状況　35
第25図　1号溝遺物出土状況　37
第26図　1号溝出土遺物　38
第27図　2号溝出土遺物　39
第28図　2号溝検出状況　40
第39図　12号・13号土坑検出状況　57
第40図　15号土坑出土遺物　58
第41図　14号・15号土坑検出状況　59
第42図　10号溝検出状況　60
第43図　10号溝遺物出土状況　61
第44図　10号溝出土遺物　62
第45図　11号溝出土遺物　63
第46図　11号溝検出状況　64
第47図　13号溝検出状況　65
第48図　2号墳検出状況　67
第49図　2号墳出土遺物　69
第50図　第1次調査遺構外出土遺物①　71
第51図　第1次調査遺構外出土遺物②　72
第52図　第1次調査遺構外出土遺物③　73
第53図　第1次調査遺構外出土遺物④　75
第54図　第2次調査遺構外出土遺物①　78
第55図　第2次調査遺構外出土遺物②　79
第56図　第2次調査遺構外出土遺物③　80

写　真　目　次

ＰＬ１　空撮・調査風景
ＰＬ２　1号・2号住居址
ＰＬ３　3号・4号住居址
ＰＬ４　1号～5号土坑
ＰＬ５　7号～9号土坑、1号掘立柱建物址
ＰＬ６　1号～4号溝
ＰＬ７　10号～14号土坑
ＰＬ８　10・11・13号溝、2号墳
ＰＬ９　1号住居址出土遺物①
ＰＬ10　1号住居址出土遺物②
ＰＬ11　3号住居址出土遺物・石器
ＰＬ12　3号土坑出土遺物
ＰＬ13　土坑・溝・古墳出土遺物
ＰＬ14　1・2・10号溝出土遺物
ＰＬ15　第1次調査区出土遺物①
ＰＬ16　第1次調査区出土遺物②
ＰＬ17　第2次調査区出土遺物
ＰＬ18　遺構外出土陶磁器

第１章　調査経過

平成２年３月、『土浦市総合運動公園基本計画報告書』が発表された。これにより土浦市のスポーツ施設の課題の解決と川口運動公園の機能更新を目的として、土浦市西端の常名地内に新しい運動公園を建設するビジョンが提示された。この建設予定地内には、昭和55～57年度の分布調査で見つかった弁才天遺跡・神明遺跡・北西原遺跡・山川古墳群の四つの周知の遺跡が含まれている。これらの分布と遺構密度を把握するために、平成３年３月に土浦市遺跡調査会によって確認調査が行われた。

この確認調査によって、常名地区の台地の90％以上にわたって埋蔵文化財が包摂される可能性が、極めて高いことが予想されたために、発掘調査区は台地全体を対象に設定されることとなった。

平成５年度から、常名地区の発掘調査は開始され、毎年継続した調査を行なっている。本年度の調査に至る経緯と発掘の経過を以下に記す。

平成９年４月18日　土浦市都市計画部新運動公園課から土浦市教育委員会文化課にあて、埋蔵文化財発掘調査についての依頼がある。

５月中旬　本年度の調査区について打合せを行い、字檜木地内を神明遺跡として調査することを協議する。また、もし遺構密度が薄い場合には調査区を拡大する可能性もあることを協議する。

６月４日　文化課が新運動公園課にあて、埋蔵文化財の発掘調査について回答を行い、土浦市遺跡調査会を調査機関として紹介する。また新運動公園課が、文化課に発掘調査承諾書を提出する。文化課が文化庁・県教育庁あてに、埋蔵文化財発掘調査報告を提出する。

６月10日　発掘調査委託契約を締結する。

６月中旬　表土除去、現地作業員雇用の説明会を行う。

７月８日　発掘調査開始。約１週間で精査及び全体図作成。遺構の密度が薄いため、第２次調査区を設定し、本年度調査区を拡充することを新運動公園課と協議する。

７月15日　遺構の検出を開始する。（１・２号溝）

７月24日　１・２・３号住居址の検出に着手する。

８月９日　５・７・８号土坑の記録が終了（第１次調査区の遺構検出終了）。

８月19日　第２次調査区の精査開始。全体図作成とグリッド設定。遺構の検出に入る。

９月２日　13号溝、10～14号土坑を検出する。以後、確認調査を並行して行う。

９月６日　２号墳を検出・記録する。以後、空撮向けの精査を行う。

９月18日　セスナ機による航空撮影。調査終了。

９月19日　資材撤収。

発掘調査は、以下の方法で行った。まず、調査区内に４ｍ間隔の方眼軸を設定し、縦軸を算用数字、横軸をアルファベットで表記する。この方眼軸が、遺構の位置を示す基準となり、国土座標上の調査区の範囲をも明示する。軸は、前年（平成８年度）の北西原遺跡第５次調査の延長線上にあり、呼称を準拠している。

そして、表土をバックホーによって約40cm除去した後に、人力でジョレンによる表面精査を行った。

この際、所在が確認された遺構や表面採取された遺物は、グリット線上の位置により把握した。全面の精査と遺構の把握を済ませてから、各個別の遺構の検出に入った。遺構の掘り下げにあたっては、移植ゴテを用い、土の堆積状況を知るために１又は２方向の畦を残した。出土した重要遺物はその出土位置を記録するために、現位置に留めた。遺構の底面まで掘り下げてからは、畦を取り除き、遺物出土状況・検出状況を撮影・記録した。(橋場君男)

第２章　環境

土浦市は、県南地区のほぼ中央に位置する人口約13万人の市である。市の東側は霞ヶ浦を望み、市街地中央を桜川が西から東へ流れている。桜川低地(古鬼怒川起源の沖積地)の南北は、洪積台地の筑波・稲敷台地と新治台地に挟まれる。市の北側には天の川・南側には花室川が流れる。

神明遺跡は、桜川左岸の標高約26～28ｍの新治台地上に位置する。遺跡の周辺は、桜川低地からＴ字状にのびる谷に東と北を囲まれる。遺跡の範囲は、縁辺部を中心に台地のほぼ中央に至る。

新治台地の地層は、下総層群を基盤としている。層序は、下層から藪層、上泉層、上岩橋層、木下層、常総層、新期火山灰層(いわゆる関東ローム層)と続く。いずれも第Ⅳ期更新世(洪積世)の堆積層である。このうち、常総層は上下二層に分層され、下層は砂・砂礫を、上層は粘土・シルトを主な堆積物とする層である。また、台地斜面の露頭には木下層が確認されることがある。木下層は、砂及び泥混じりの砂から構成される堆積層である。谷戸部分の地質は、後背湿地性堆積物が主体を占める。新期火山灰層（いわゆる関東ローム層）は、富士･箱根起源の火山灰が風化したものである。(通商産業省工業技術院地質調査所　1988)今回の調査では、ローム層中の堆積状況を探るために深さ約２～３ｍの縦型トレンチを掘り、断面観察を行なった。層位の観察所見を第５図に記す。

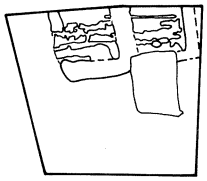
遺跡のある常名地区は、台地南麓をはしる東西道沿いに旧家が密集する。新興の宅地は台地上に多い。第１次調査区南辺の道は、道標によるといわゆる筑波道(藤沢街道)である。

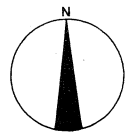
昭和55（1980）年度から同57（1982）年度に行われた分布調査によると、神明遺跡は縄文時代中期(加曽利Ｅ式期)と古墳時代前期にかけての遺跡である。古墳時代前期の遺物には、東海地方系の特徴をもつＳ字状口縁の甕の破片が表採されている。(茂木　1984)

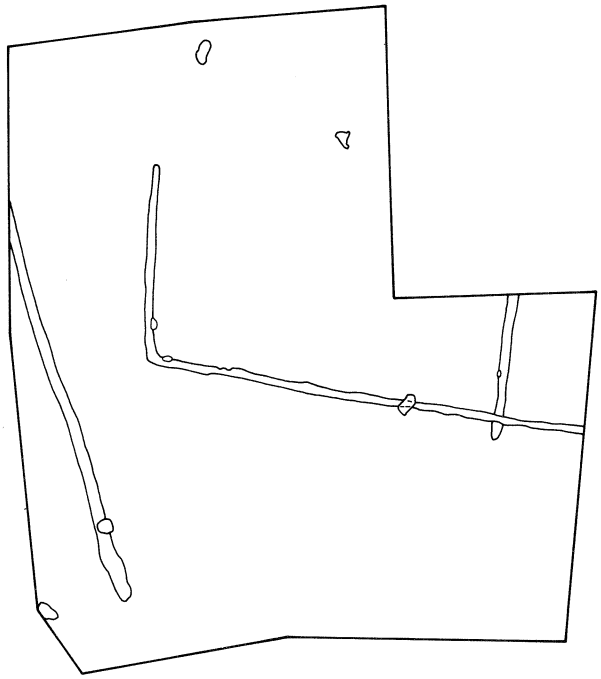
常名地区の指定文化財は３件ある。市指定史跡常名天神山古墳、市指定文化財石造五輪塔、同石造宝篋印塔である。このうち常名天神山古墳は、４世紀末から５世紀前半にかけての前方後円墳で、台地上の山川古墳群との関連性が指摘されている。石造五輪塔は花崗岩製で、総高約205㎝である。金山寺境内に所在し、室町時代中期のものと推定されている。石造宝篋印塔は花崗岩製で、総高約137㎝である。天神山古墳墳頂に在り、安土桃山時代頃の作と推定される。(土浦市文化財保護審議会　1978)

付近の発掘調査例は、平成元（1989）年に土浦市遺跡調査会（担当黒澤春彦、中澤達也）によって、常名地区の八幡下遺跡が調査された。台地斜面にある古墳時代後期の竪穴住居址８軒と土坑１基、奈良・平安時代の竪穴住居址８軒と土坑２基が調査された。(黒澤　1991)

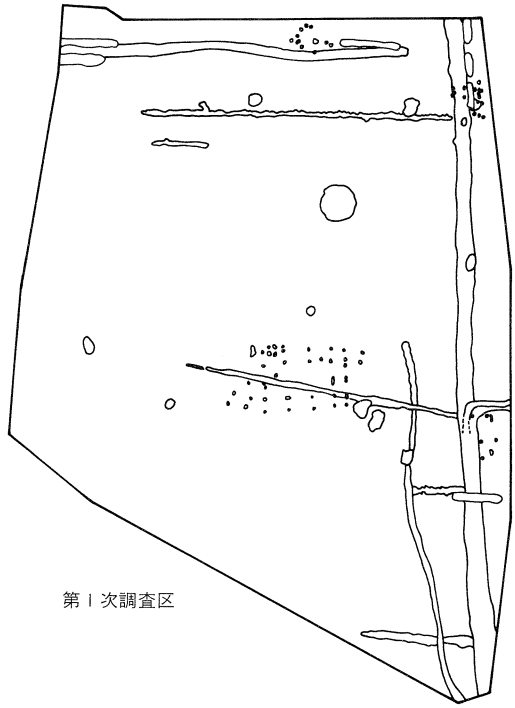
神明遺跡以外の周辺の遺跡を、第４図に示す。(橋場君男)



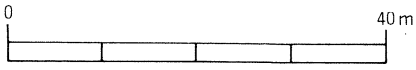




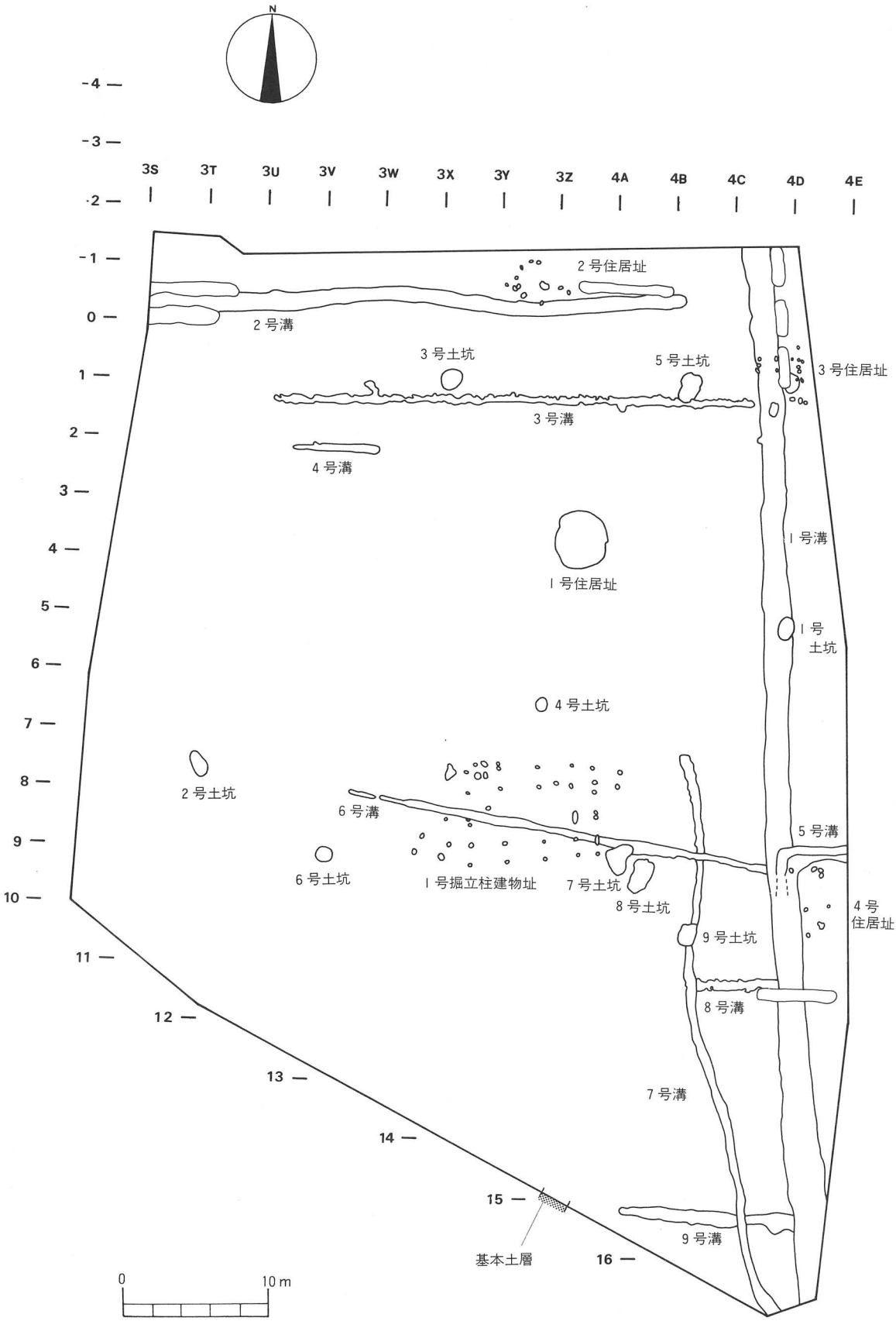
第 2 次調査区



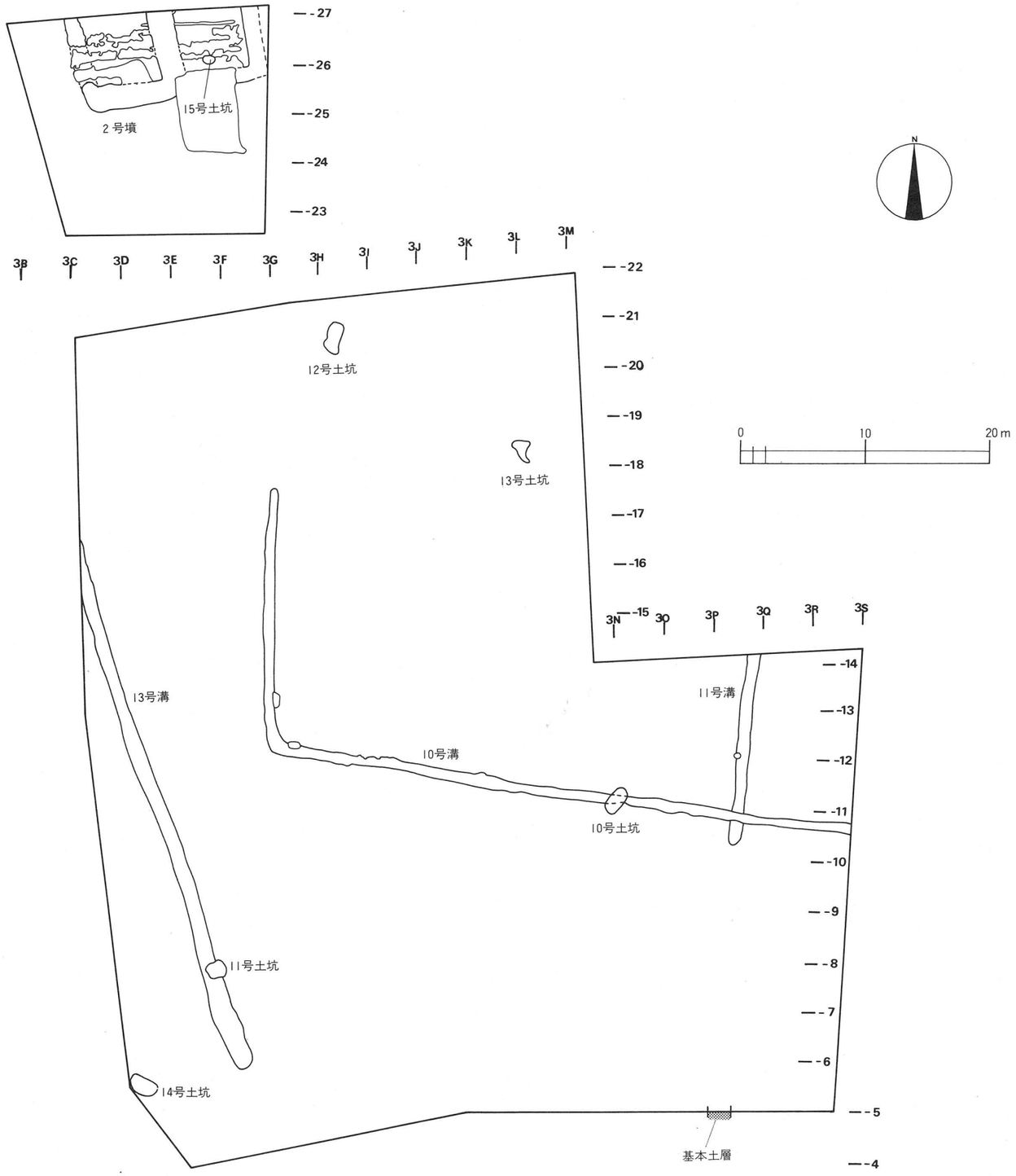
第 1 次調査区



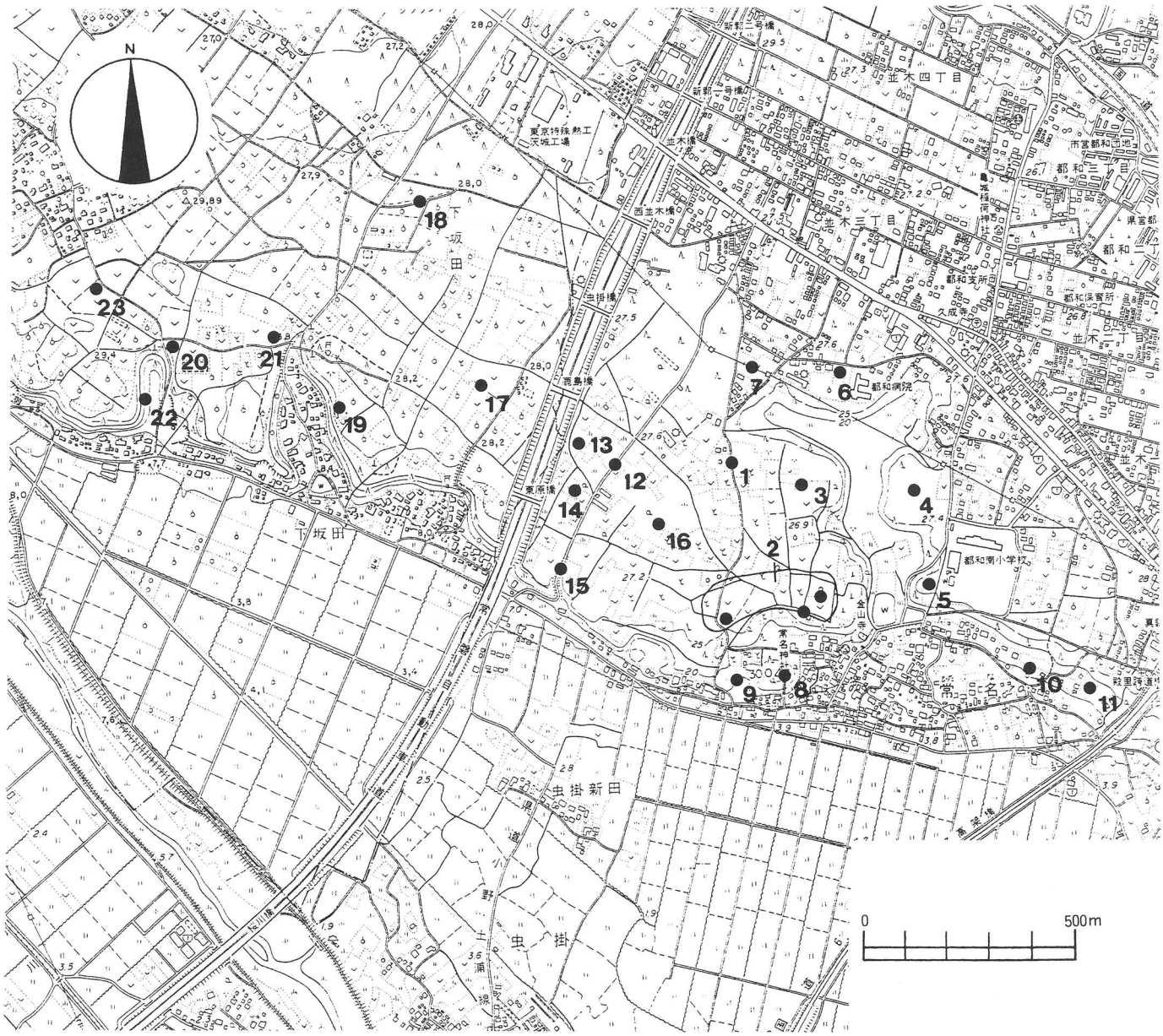
第 1 図　調査区全体図



第2図　第1次調査区全体図



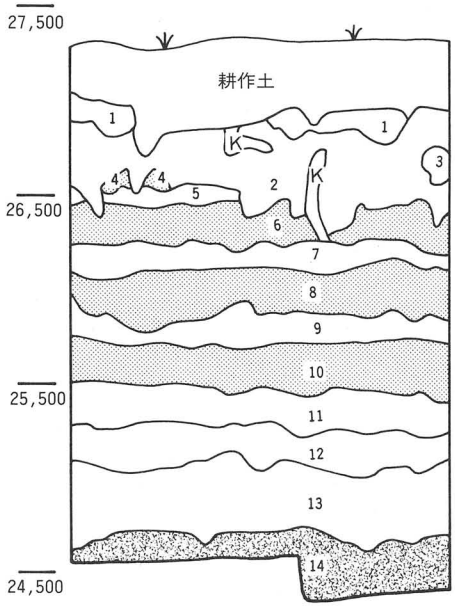
第 3 図　第 2 次調査区全体図



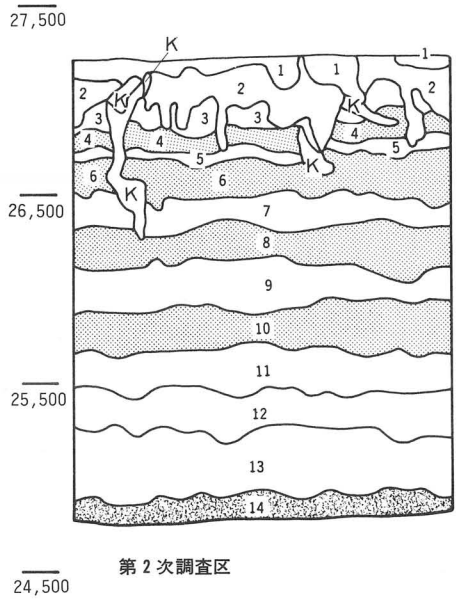
第 4 図　周辺の遺跡

周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	北西原遺跡	縄文中、古墳前	13	中畑遺跡	縄文前
2	山川古墳群	古墳、奈良・平安	14	小坂の上遺跡	縄文中
3	神明遺跡	縄文中、古墳前	15	坂の上遺跡	縄文前
4	弁才天遺跡	古墳、奈良・平安	16	羽黒後遺跡	縄文前
5	天神脇遺跡	縄文、古墳、平安	17	下坂田鹿島前貝塚	縄文
6	西谷津遺跡	古墳前・後	18	坂田稲荷山古墳群	古墳
7	西谷津西遺跡	縄文前、古墳前	19	下坂田香取神社前遺跡	縄文、弥生、古墳
8	常名天神山古墳	古墳	20	下坂田出シ山遺跡	弥生、古墳、平安
9	瓢簞塚（挑戦塚）古墳跡（湮滅）	古墳	21	下坂田貝塚	縄文、弥生
10	八幡坂下遺跡	古墳	22	坂田古墳群	古墳
11	八幡下遺跡	古墳、奈良・平安	23	武者塚古墳	古墳
12	アラク遺跡	縄文前			



第１次調査区



第２次調査区

神明遺跡　基本層序

1　褐色　7.5YR4/4　褐色土とローム粒子が斑状に混在する。〔ローム漸移層〕

2　褐色　7.5YR4/6　１層との層理面付近に白色粒子（径～0.2㎜）が多く認められ、鎌掛け時に砂質感が強い。ＵＧの可能性が高い。〔軟質ローム層〕

3　明褐色　7.5YR5/6　赤色スコリア（径～0.2㎜）を多く、青色スコリア（径～0.2㎜）・黒色粒子（径～0.2㎜）を僅かに含む。〔硬質ローム層〕

4　褐色　7.5YR4/6　黒色粒子（径～0.2㎜）・白色粒子（径～0.2㎜）・炭化物粒子（径～0.3㎜）を僅かに含む。立川ローム第１黒色帯に相当すると思われる。炭化粒少　〔硬質ローム層〕

5　明褐色　7.5YR5/8　青色スコリア（径～0.2㎜）・赤色スコリア（径～0.2㎜）・白色粒子（径～0.3㎜）を含む。姶良丹沢パミス＝ＡＴ降灰相当層と思われる。炭化粒微　〔硬質ローム層〕

6　褐色　7.5YR4/4　青色スコリア（径～0.2㎜）・黒色スコリア（径～0.2㎜）を多く含む。立川ローム第２黒色帯に相当すると思われる。〔硬質ローム層〕

7　褐色　7.5YR4/6　赤色スコリア（径～0.3㎜）を多く、黒色粒子（径～0.2㎜）・白色粒子（径～0.3㎜）を僅かに含む。８層との層理面が立川ローム層と武蔵野ローム層の境界と思われる。炭化粒微　〔硬質ローム層〕

8　褐色　7.5YR4/4　青色スコリア（径～0.2㎜）を多く、白色粒子（径～0.3㎜）を僅かに含む。武蔵野ローム層の第１黒色帯と思われる。〔硬質ローム層〕

9　褐色　7.5YR4/6　青色スコリア（径～0.5㎜）を多く、赤色スコリア（径～0.2㎜）を僅かに含む。８層より硬質で、ＢＣＶＡに相当すると思われる。〔硬質ローム層〕

10　褐色　7.5YR4/4　青色スコリア（径～0.2㎜）・赤色スコリア（径～0.2㎜）が９層より少ない。白色粒子（径～0.3㎜）・赤色スコリア（径～0.3㎜）が多く、軟質ロームではあるが２層よりは硬質で、武蔵野ローム第２黒色帯と思われる。HK－ＴＰ降灰層準と思われる。〔軟質ローム層〕

11　褐色　7.5YR4/4　白色粒子（径～0.2㎜）を僅かに、青色スコリア（径～0.2㎜）を多く含む。〔硬質ローム層〕

12　褐色　7.5YR4/4　青色スコリア（径～0.2㎜）を多量に含む。11層より軟質。〔硬質ローム層〕

13　明褐色　7.5YR5/8　白色粒子（径～0.5㎜）を多く、青色スコリア・赤色スコリア・黒色粒子を僅かに含む。９層よりも硬質、砂質感が強い。〔硬質ローム層〕

14　明黄褐色　10YR7/6　黒色粒子（径～0.3㎜）・赤褐色粒子（径～0.3㎜）が多く含まれる。〔常総粘土層〕

第５図　基本層序

第３章　遺構と遺物

第１節　第１次調査区の遺構と遺物

第１次調査区内では、竪穴住居址が４軒、土坑が９基、溝が９条、掘立柱建物址が１棟発見された。以下、遺構ごとに所見を加える。

１号住居址　〔第６～10図〕

位置　調査区中央　３Ｚ－３区を中心とする。

長軸方向　Ｎ－34°－Ｗ

規模と形状　長軸4.0ｍ、短径3.5ｍの楕円形を呈する。

壁面　壁高は、10～34cmで、外傾気味に立ち上がる。

床面　平坦かつ明瞭に確認でき、いわゆる貼り床を呈する。

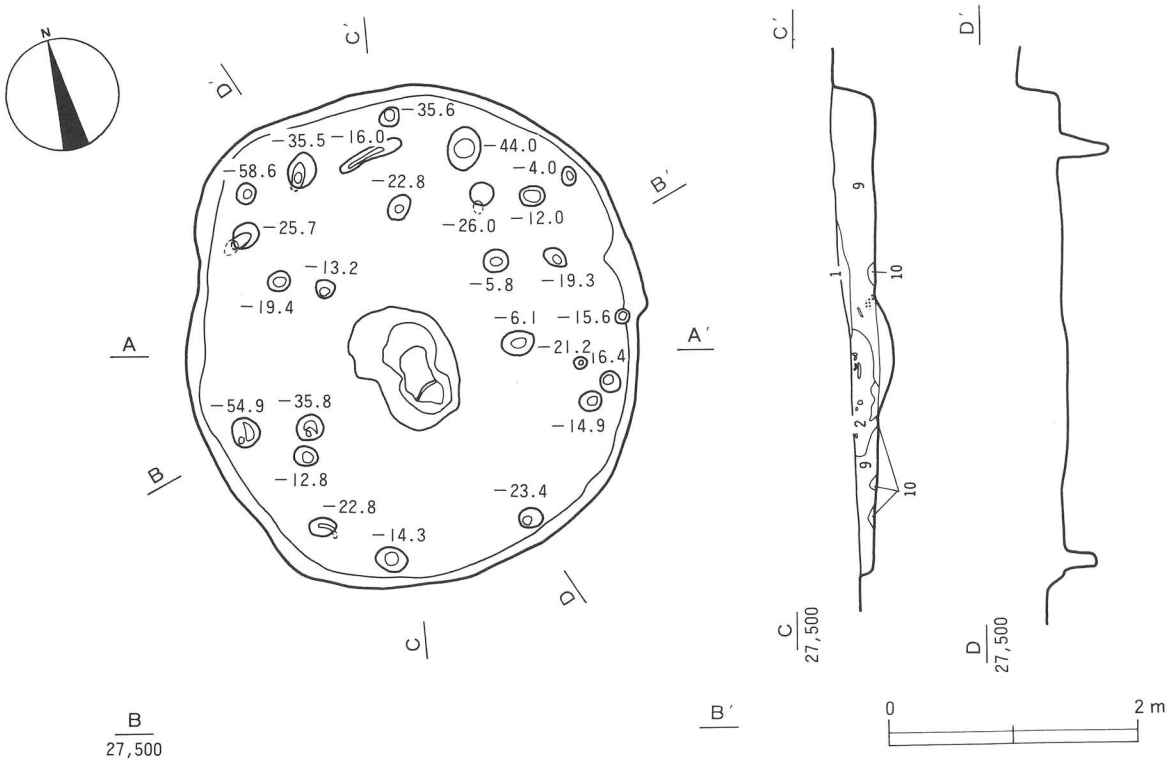
炉　中央よりやや南側に付設される。規模･形状は、長径103cm、短径64cmの不整楕円形で、約37cm掘り込んで構築した地床炉である。炉の上面は３ヶ所被熱して赤色硬化する。底面は焼けておらず、土器・礫などは残されていなかった。

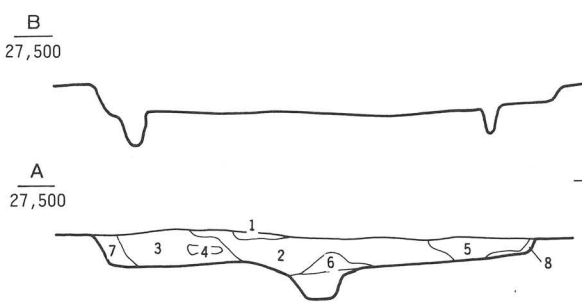
ピット　約25ケ所検出され、周回する傾向が強いことから、かなりのピットが柱穴と考えられる。形状は直径９～32cm、深さ７～59cmで円形・楕円形を呈している。

覆土　焼土・遺物の多寡から考えて、西側から始めに埋まり、次いで遺物・焼土を含んだ土で埋められたものと解される。

遺物出土状況　住居址中央を中心に、遺物がまとまって出土した。床面直上ではなく浮いた状態であるため、廃棄遺物であろう。

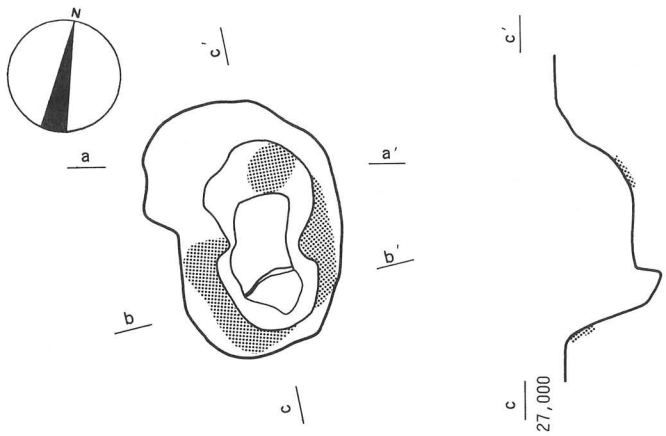
遺物　覆土中から出土している。土器は全て深鉢であった。１は推定径30.8cm、口縁部は内彎し口縁下に最大径を有する。口縁に沿い両側がなでられる微隆起線文が１条巡り、下半は単節ＲＬが施文される。２は径23.5cmの波状縁で４単位の把手を有する。把手部で一度くびれ、この直下が最大径となる。把手下は舌状突起となり、把手間は口縁を凹ませ微隆起線文により囲まれる無文の楕円形区画となる。舌状突起部と区画下は０段多条ＬＲ施文。内外面に炭化物が付着していた。３は微隆起線文による区画文で無文帯は口縁部に見られる。区画内は０段多条ＬＲが施文されていた。４は両側がなでられる微隆起線文が１条巡り、下半は単節ＲＬが施文されている。外面に炭化物が付着し、二次焼成による赤変が認められた。５は両側がなでられる微隆起線文が１条巡り、口縁部に幅の広い無文帯を作出している。下半は曲線的な微隆起線文で区画内は無文、他は単節ＲＬが施文されている。６～８は波状縁で口縁に沿い微隆起線文が１条巡る。６・８は単節ＲＬ、７は０段多条ＲＬが施文されていた。９は平縁で口縁に沿い貼付ではなく、なでにより作成した微隆起線文が１条巡り、下半は０段多条ＲＬである。10は波状縁で口縁に沿い微隆起線文が１条巡る。口縁部無文帯には幅の狭い舌状突起を付している。下半は単節ＬＲ施文後、微隆起線文沿いに半截竹管状工具による下方からの楕円形刺突を加えている。外面には炭化物が付着していた。11～15は平縁で口縁下に幅が広く浅い沈線が１条巡る。下半は11・12・15が０段多条ＲＬ、13は無節Ｌｒ、14は無節Ｒℓであった。13は外面に炭化物が付着し、15は内面の一部が沈線状に凹んでいた。16は波状縁で口縁に沿い沈線が１条巡り、下端に

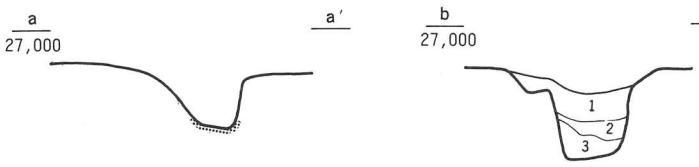




1号住居址

1　7.5YR4/4　褐色　ローム中少、ローム粒中、黒色土粒中
2　7.5YR3/4　暗褐色　焼土小少、ローム粒少
3　7.5YR4/6　褐色　ローム粒中、黒色土粒少
4　7.5YR4/6　褐色　焼土小少、焼土粒中、炭化物・粒中
5　7.5YR4/4　褐色　焼土粒微
6　7.5YR4/6　褐色　焼土大少、焼土小中、締り強
7　7.5YR4/6　褐色　ローム粒中
8　7.5YR5/6　明褐色　ローム粒中、締り強
9　7.5YR4/6　褐色　焼土小少、ローム大・粒少、ローム中中、黒色土粒少
10　7.5YR5/6　明褐色　ローム粒多



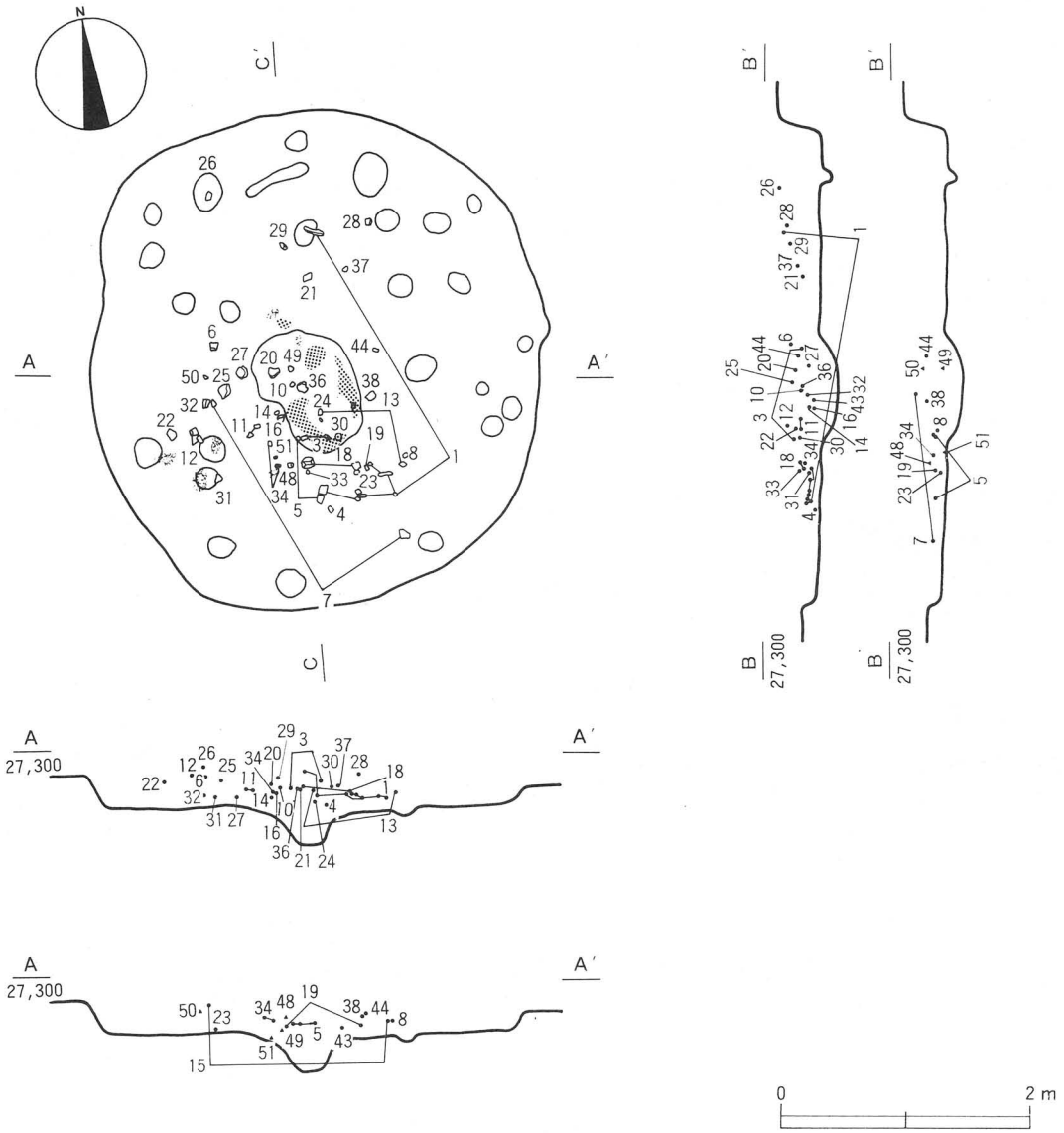


1号住居址　炉

1　2.5YR4/8　赤褐色　焼土粒多、黒色土粒微
2　5YR　3/4　暗赤褐色　焼土中少、焼土粒多
3　5YR　2/4　極暗赤褐色　ローム大少

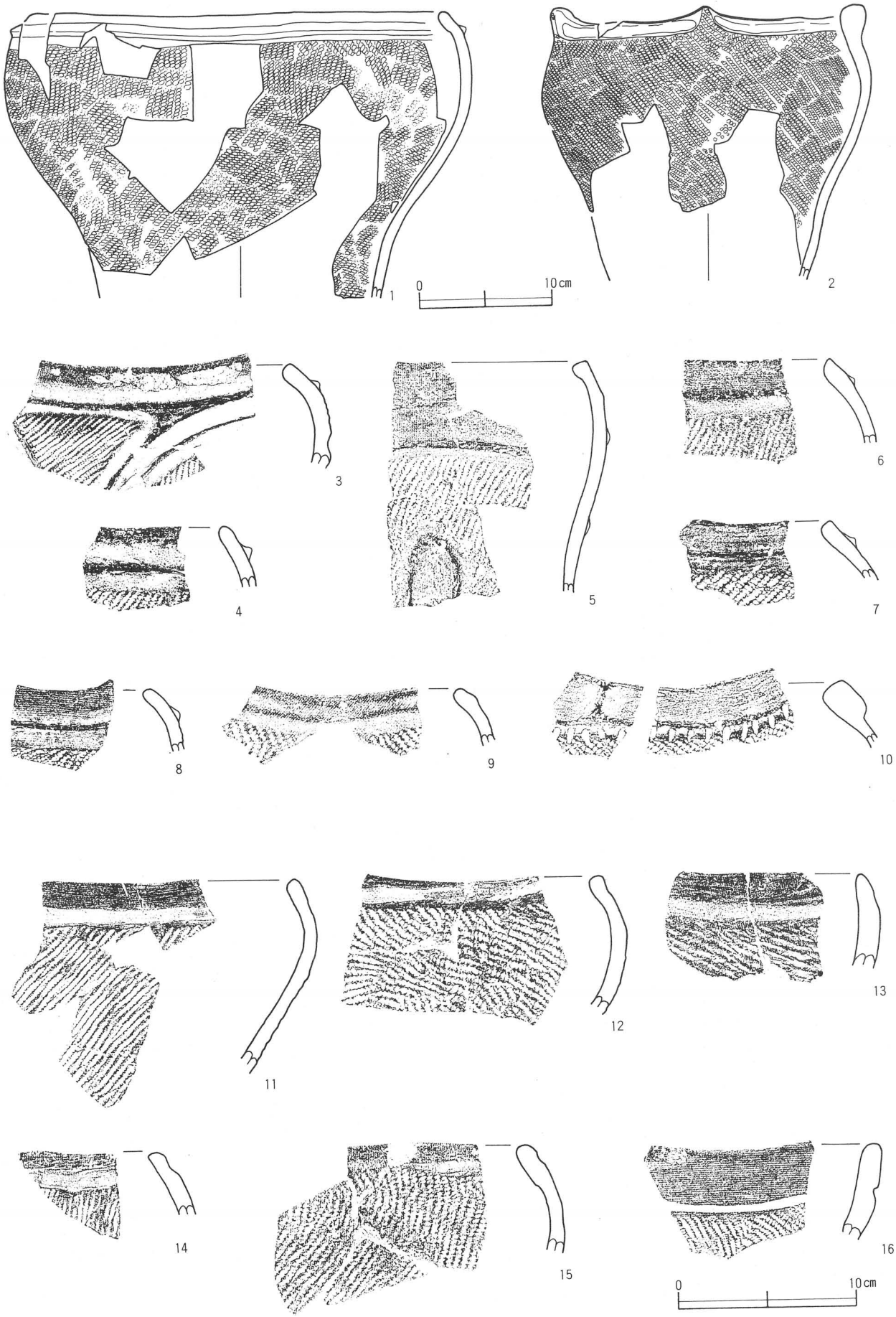
0　1m

第6図　1号住居址検出状況



第７図　１号住居址遺物出土状況

曲線的な沈線文が見られた。０段多条ＲＬ。17～24は胴部片である。17は数条の沈線文が垂下し、沈線間は単節ＲＬと無文帯が交互に施文されている。断面に炭化物が付着していた。18は微隆起線文による区画文で、区画内は全て０段多条ＬＲで充塡される。幅の広い隆起上に円形の盲孔が１孔穿たれていた。19・20は微隆起線文による曲線文で、区画内は共に単節ＲＬ。19は玉抱き文となろう。どちらも外面に炭化物が付着していた。21は曲線的な沈線文で区画内は０段多条ＲＬ、無文部は良好に磨かれていた。16と同一個体と思われる。22は３条１単位の条線文が垂下し、下半は無文となる。上半は単節ＲＬが施文される。23は単節ＲＬを地文とし、後に半截竹管状工具を条線状に連ねて垂下させている。24は０段多条ＲＬ。17・18が加曽利ＥⅢ式となる他は加曽利ＥⅣ式に相当しよう。25～37は底部である。25は推定径7.4cmで上半に単節ＲＬが施文され、底面と底部直上は良好に磨かれる。26は推定径7.6cmで上半単節ＬＲ、下半と底面は良好に磨かれる。断面に炭化物が付着していた。27は径5.2cm、底部下半縄文か。判然とせず。底面やや凸レンズ状を呈し、磨かれていた。28～37は無文である。28は推定径6.2cm、外面縦磨きされ輪積痕が良好に観察された。底面に炭化物が付着している。29は推定径6.6cm、外面は縦磨き、内面横磨きされる。30は推定径6.6cm、31は推定径5.8cmでともに底面



第8図　1号住居址出土遺物①

磨き良好、底部直上は横磨きされる。32は径6.2cm、底面・内面磨き良好。33は推定径4.6cm、底面と底部直上が磨かれ、割れ口に炭化物が付着していた。34は推定径5.6cm、やや上げ底状を呈し、底面・内外面ともに磨かれる。35は推定径4.8cm、底面は良好に磨かれていた。36は径5.8cm、37は推定径6.2cmで、ともに底面凸レンズ状を呈する。36は外面横磨きされ、底面に炭化物が付着していた。37は断面に炭化物が見られた。38～47は土製品で全て土錘である。完形品が多く、口縁部片を利用するものもあった(44)。42は本来左右対称となる形をしていたものが、欠損後も使用され不整形になったと思われる。

48～50は石器、51は石製品である。48・49は磨石類、48は両面の大半が研磨面で、部分的に集中的な敲打により凹みが生じている。49は全体が滑らかな研磨面で覆われている。折損面は一方向からの加撃によりネガティブバルブが生じ、この中央付近は節理面の影響を受け段差となっている。全体は被熱により赤化し、一部火バネによる剥落が認められる。50は縦長の石匙である。両面に残る素材剥離面（トーン部分）から見ると、幅6cm以上の横長剥片を素材としていることが観察される。両面に押圧剥離による調整加工を施している。両側縁の一部に抉り加工を施している。図示していないが他に6点の閃緑岩製剥片が出土している。うち2点は打点からの縦割れを生じたものが接合した。51は垂飾品である。一端に両側からの穿孔を施しているが、端部を折損している。全体を滑らかに研磨している。

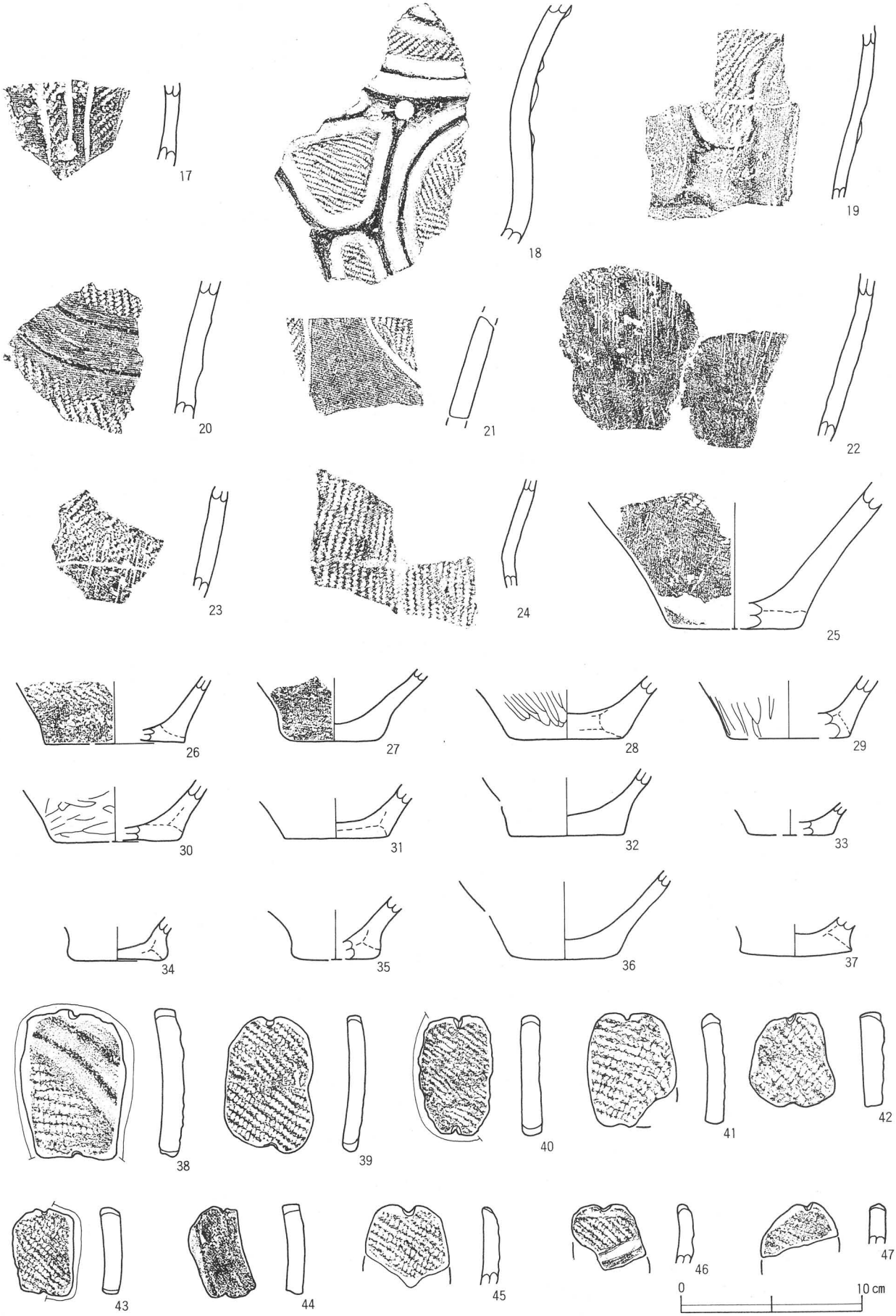
1号住居址出土土製品観察表

No.	名称	残存	大きさ（cm）	重量(g)	整形	文様・その他	時期
38	土錘	完形	8.2×5.8	82.6	一部磨り	微隆起線文、0段多条RL、切り目1対、方形	加曽利EⅣ式
39	土錘	完形	7.4×4.9	42.0	全周磨り	0段多条RL、切り目1対	不明
40	土錘	完形	6.5×4.1	36.3	一部磨り	無節Lr、切り目1対、外面炭化物	不明
41	土錘	一部欠	6.2×4.9	(35.0)	全周磨り	0段多条RL、切り目1ケ	不明
42	土錘	完形	5.1×4.6	38.0	全周磨り	0段多条RL、切り目1対	不明
43	土錘	完形	4.8×3.4	23.9	一部磨り	単節RL、切り目1対、方形	不明
44	土錘	完形	5.0×3.0	20.5	全周磨り	口縁部、微隆起線文、切り目1対、外面炭化物	加曽利EⅣ式
45	土錘	2/3	(4.5)×(4.6)	(19.8)	全周磨り	丁寧な磨り、0段多条RL、切り目1ケ	不明
46	土錘	2/3	(3.5)×(4.1)	(14.0)	全周磨り	丁寧な磨り、0段多条RL、沈線文、切り目1ケ	加曽利EⅣ式
47	土錘	1/3	(2.9)×(4.2)	(10.7)	全周磨り	丁寧な磨り、単節RL、切り目1ケ	不明

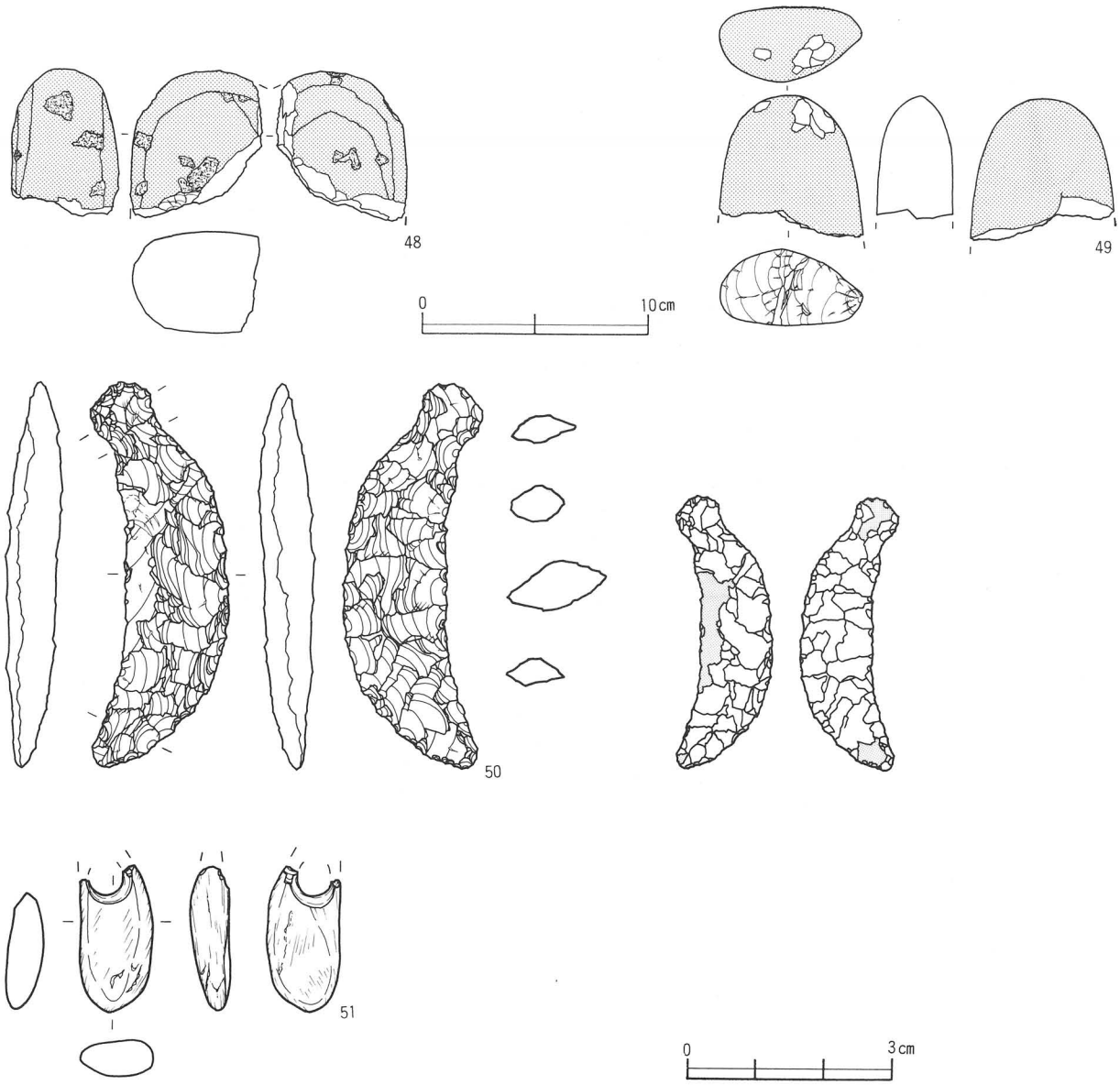
1号住居址出土石器・石製品観察表

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備　　考
48	磨石類	(6.44)	(5.66)	(4.52)	(213.0)	輝石安山岩	側縁部全体に敲打痕。両面にも集中的な敲打による凹みあり。
49	磨石類	(5.9)	(6.13)	(3.23)	(154.0)	輝石安山岩	全面を使用。端部に剥落痕。
50	石　匙	5.56	1.54	0.72	6.3	黒曜石	「ノ」の字状。つまみ部の厚さ0.5cm。漆黒の黒曜石。
51	垂　飾	(2.09)	(1.09)	0.54	(1.8)	蛇紋岩	両側から穿孔。孔部で折損。

所見　本址は、縄文時代中期後半の竪穴住居址である。住居廃絶後、余り時間をおかずにくぼんだ状態であったところへ焼土や土器を廃棄したものと考えられる。



第 9 図　1 号住居址出土遺物②



第10図　1号住居址出土遺物③

2号住居址　〔第11図〕

位置　調査区北端中央　3Y－（－1）・(－2)、3Z－（－1）区

長軸方向　不明

重複関係　2号溝と切り合うが、溝中の出土遺物と比較すると本址の方が古い。

規模と形状　掘り込みが浅いため、ピットと炉のみの検出である。

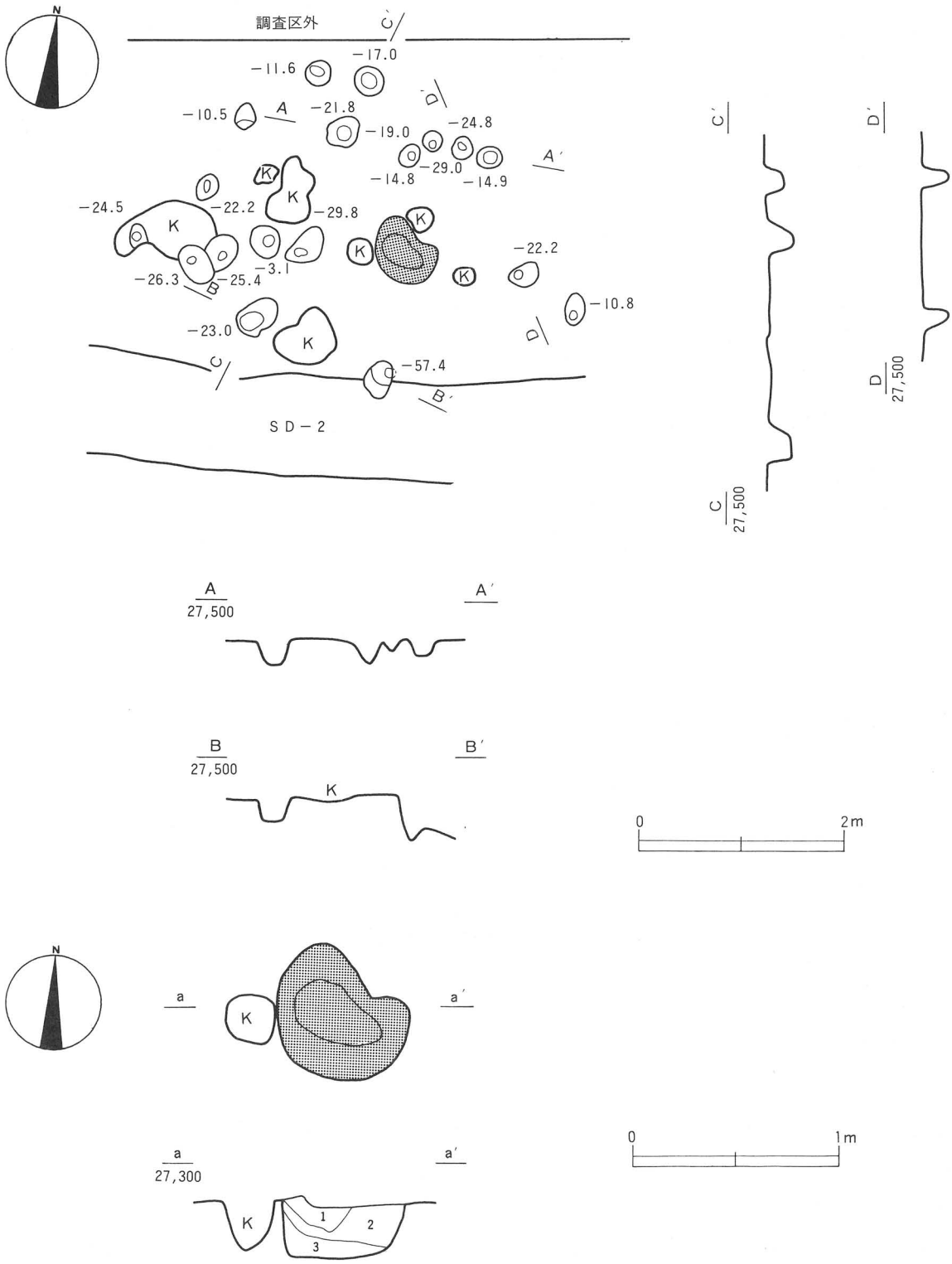
壁面・床面　確認されなかった。

炉　中央北寄りに検出され、平面形は長径64cm、短径50cmの楕円形を呈し、床面を約26cm掘り窪めた地床炉である。炉床は焼けていないが、焼土を含むことから判断した。

ピット　作物痕もあるが、炉址を周回する傾向が見られることから柱穴を多数含むと思われる。

遺物　図化していないが、閃緑岩製の台石が1点出土している。風化が著しい。また、縄文土器小片も炉址覆土中から出土した。

所見　本址は、掘り込みが浅い縄文時代の竪穴住居址と考えられる。床面・壁は確認されなかったが、炉と柱穴は検出された。



2号住居址　炉

1　5YR4/8　赤褐色　焼土中・小中、焼土粒多

2　5YR3/4　暗赤褐色　焼土小・粒少、ローム小少、締り強

3　5YR3/3　暗赤褐色　焼土大・中少、ローム粒少、粘性強、締り強

第11図　2号住居址検出状況

3号住居址　〔第12～14図〕

位置　調査区北東　４Ｃ－０区を中心に確認できる。

長軸方向　不明

重複関係　１号溝と本址では、出土遺物から判断して本址の方が古い。

規模と形状　掘り込みが浅かったため、ピットと炉のみ検出した。

壁面・床面　確認されなかった。

炉　長径138cm、短径44cmの楕円形で、床面を約36cm程掘り込んで構築された地床炉である。炉床面には、被熱して赤色硬化した焼土層が堆積する。

ピット　直径92～14cm、深さ31～11cmで、形状は円形・楕円形を呈する。１号溝内のものは、溝に伴う落ち込みかもしれない。それ以外のピットは、本址に伴う可能性は否定できない。

覆土　５～７層の焼土は、炉として機能していた時の堆積層と考えられる。その上の３・４層は機能喪失以降の堆積土で、８～10cm程の厚さをもつ。礫を多量に含む２層と最下層の間には、ある程度の時間差を想定できるかもしれない。

遺物出土状況　炉址の覆土中～上層（２層）にかけて、多量の礫と土器が出土した。礫は、集め得た分で1409点あり、21.538kgを計る（別表参照）。最も多い種類は流紋岩（48.6%）で、砂岩（20.8%）・チャートがそれに次ぐ。礫は被熱赤化したものと赤化してないものの二者がある。層位の確認のために帯状に残したが、本来は炉址全体を覆うように分布していた。

遺物　ピット間内側の覆土中位より出土している。16・17を除き全て深鉢である。１は推定径24.4cmで口縁部は内彎し、口縁下に最大径を有する。口縁部は沈線が１条巡り、下半は０段多条ＲＬを地文とする。口縁部沈線よりほぼ等間隔で沈線文が垂下し、沈線間に磨消は見られない。胎土に雲母を多量に混入するが、風化せず黒色を残していた。２～４は波状縁で口縁に沿い２は隆帯文、３・４は微隆起線文が巡っている。２・３は両側がなでられており４は沈線状に凹んでいる。２・４は下半０段多条ＲＬ、３は単節ＲＬで、２は内外面に炭化物が付着していた。５は波状縁、６は平縁でともに口縁に沿った沈線が１条巡る。５は０段多条ＲＬ、６は無節Ｌｒである。７は平縁で口唇部下より０段多条ＲＬが施文される。８はゆるやかな波状縁で口縁に沿い稜部までを無文帯とし、下半に縄文を施文している。異節か。９～17は胴部片である。９は沈線文が数条垂下し単節ＲＬと無文帯を交互に施文している。10は両側がなでられる幅広の隆帯文が１条巡り、この上下方は０段多条ＲＬが施文されていた。11・12は両側がなでられる微隆起線文で、11は曲線文、単節ＲＬが施文され断面に炭化物が付着していた。12は０段多条ＲＬ。13は曲線的な沈線文で単節ＲＬ施文。14・15は垂下沈線文で単節ＲＬ施文、磨消が見られる。16・17は壺もしくは鉢形土器。16は上端に沈線が１条巡り、下半は垂下条線文。17は微隆起線文による曲線文。１・９・10が加曽利ＥⅢ式となる他は加曽利ＥⅣ式に相当しよう。18・19は無文底部である。18は推定径6.0cm。19は径5.6cmで底面はやや凸レンズ状を呈している。外面は縦磨き、底面も磨かれていた。20～24は土製品である。20～22は土錘で22は横長を呈している。23・24は土製円盤で24は楕円形を呈していた。

25は磨石類で礫集中域より出土した。全面を研磨に使用、裏面に面取り状の使用痕が生じている。被熱による赤化が認められた。図示はしなかったが他に流紋岩製の剝片が２点出土している。

3号住居址出土土製品観察表

No.	名称	残存	大きさ (cm)	重量(g)	整形	文様・その他	時期
20	土錘	完形	6.7×5.0	21.5	一部磨り	2条の曲線的隆帯文、切り目1対、方形	加曽利EⅣ式
21	土錘	2/3	(4.1)×(3.6)	(15.9)	全周磨り	単節RL、切り目1ケ	不明
22	土錘	完形	5.1×5.8	40.0	一部磨り	曲線的微隆起線文、0段多条RL、切り目1ケ、横長	加曽利EⅣ式
23	土製円盤	完形	5.2×4.9	34.3	全周磨り	単節LR	不明
24	土製円盤	一部欠	(4.1)×3.7	(15.2)	一部磨り	0段多条RL、楕円形	不明

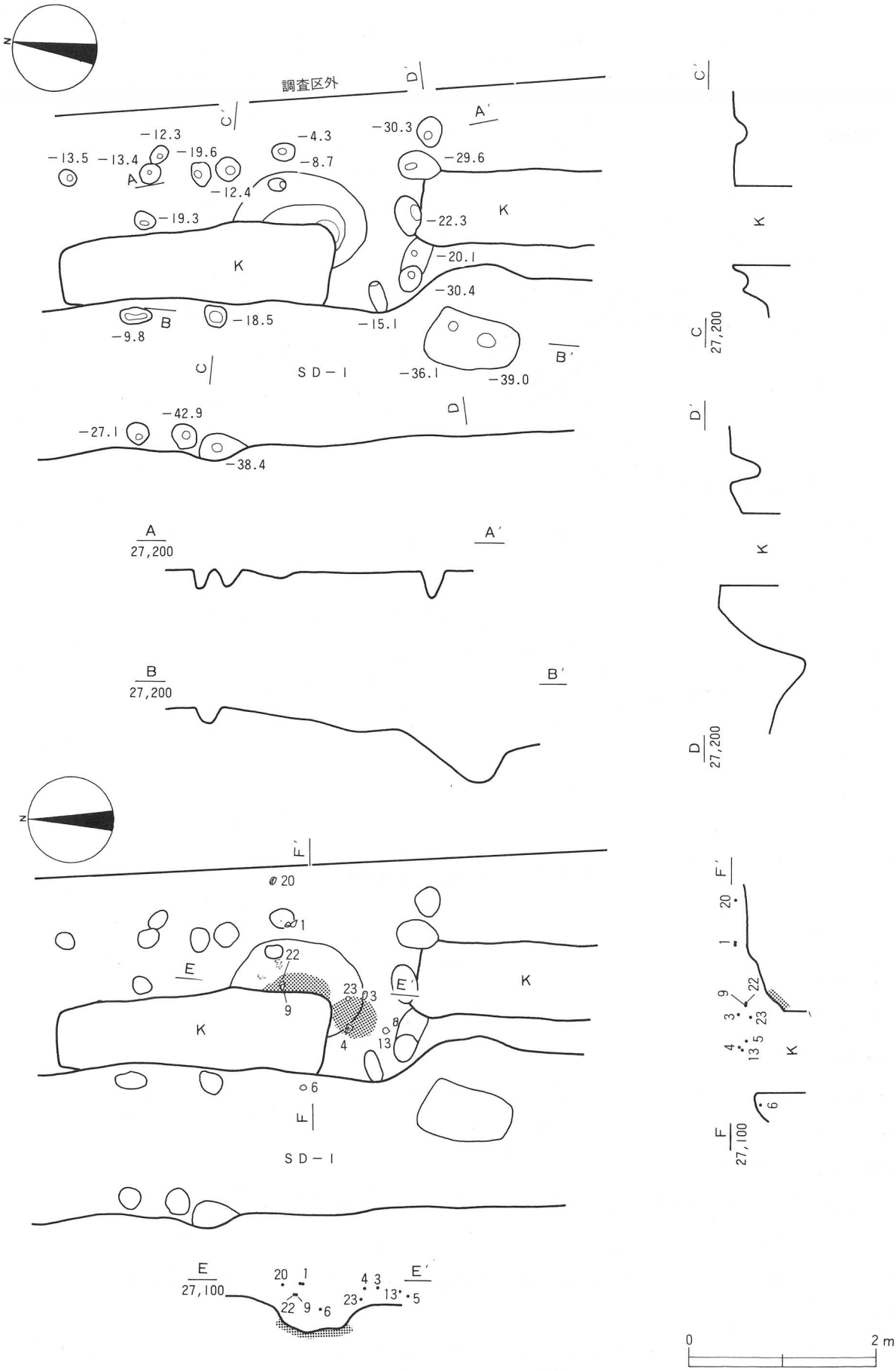
3号住居址出土石器観察表

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備　　考
25	磨石類	5.68	4.68	2.78	87.0	角閃石安山岩	全面研磨。被熱によりやや赤化。裏面使用により面取り状。

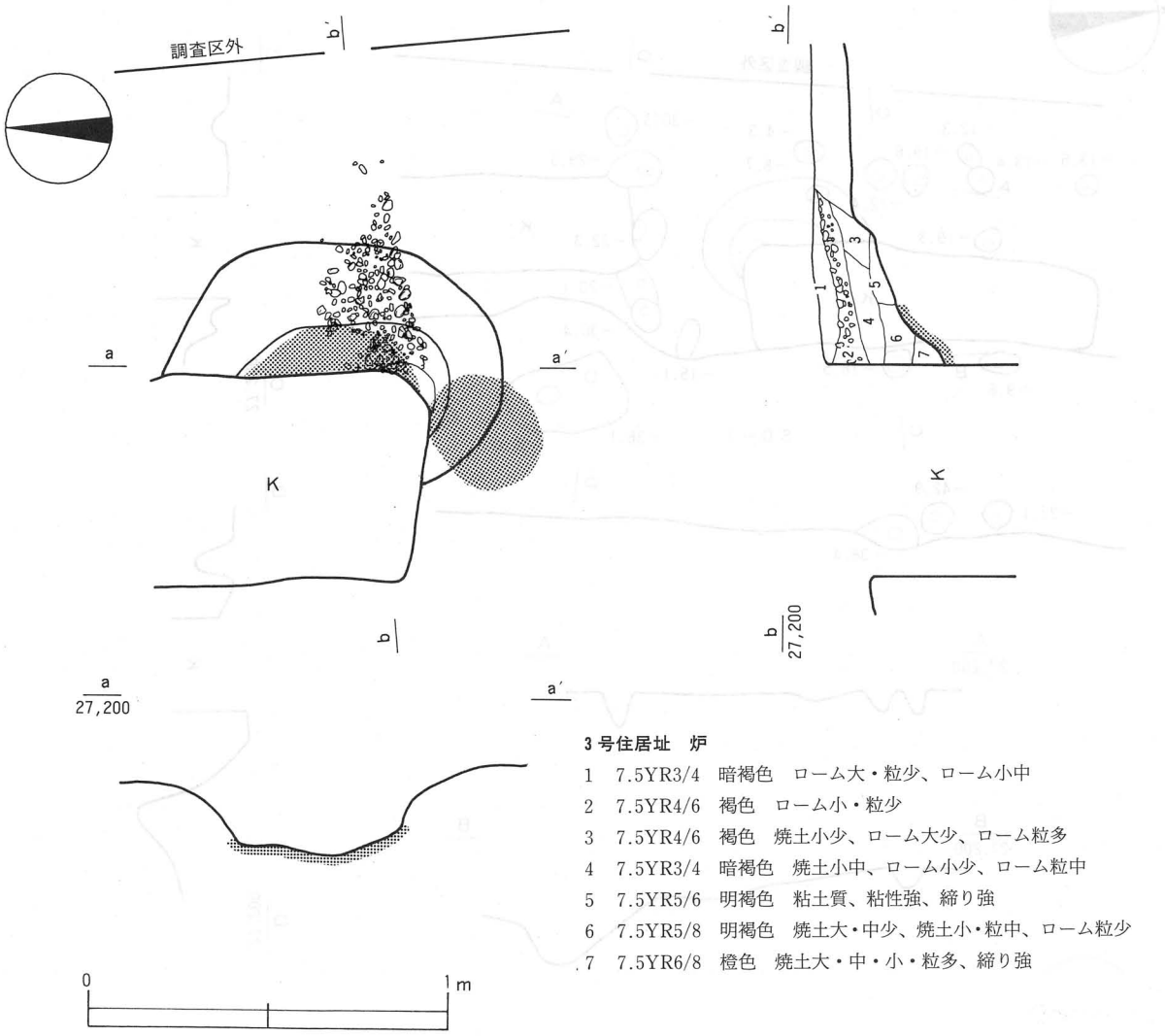
所見　本址は、縄文時代中期後半の遺構で、炉とピットが見られることから掘り込みの浅い竪穴住居址と解した。炉上の礫群は、住居址の廃絶に伴い、炉に対しても何らかの処理行為が行われたものと解釈される。

3号住居址炉　出土礫石材構成表（合計　1409点　21.538kg）

砂岩		頁岩		チャート		ホルンフェルス		安山岩		流紋岩		石英		閃緑岩	
点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
293	4750	22	152	267	4316	2	52	135	2986	685	9123	4	156	1	3



第12図　3号住居址検出状況



3号住居址　炉

1　7.5YR3/4　暗褐色　ローム大・粒少、ローム小中
2　7.5YR4/6　褐色　ローム小・粒少
3　7.5YR4/6　褐色　焼土小少、ローム大少、ローム粒多
4　7.5YR3/4　暗褐色　焼土小中、ローム小少、ローム粒中
5　7.5YR5/6　明褐色　粘土質、粘性強、締り強
6　7.5YR5/8　明褐色　焼土大・中少、焼土小・粒中、ローム粒少
7　7.5YR6/8　橙色　焼土大・中・小・粒多、締り強

第13図　3号住居址炉検出状況

4号住居址　〔第15図〕

位置　調査区域中央部東端　4D－9・10区を中心に確認できる。

長軸方向　不明

重複関係　本址は、1号溝に掘り込まれていたので、本址の方が古い。

規模と形状　掘り込みが浅かったため、柱穴、炉のみ検出した。

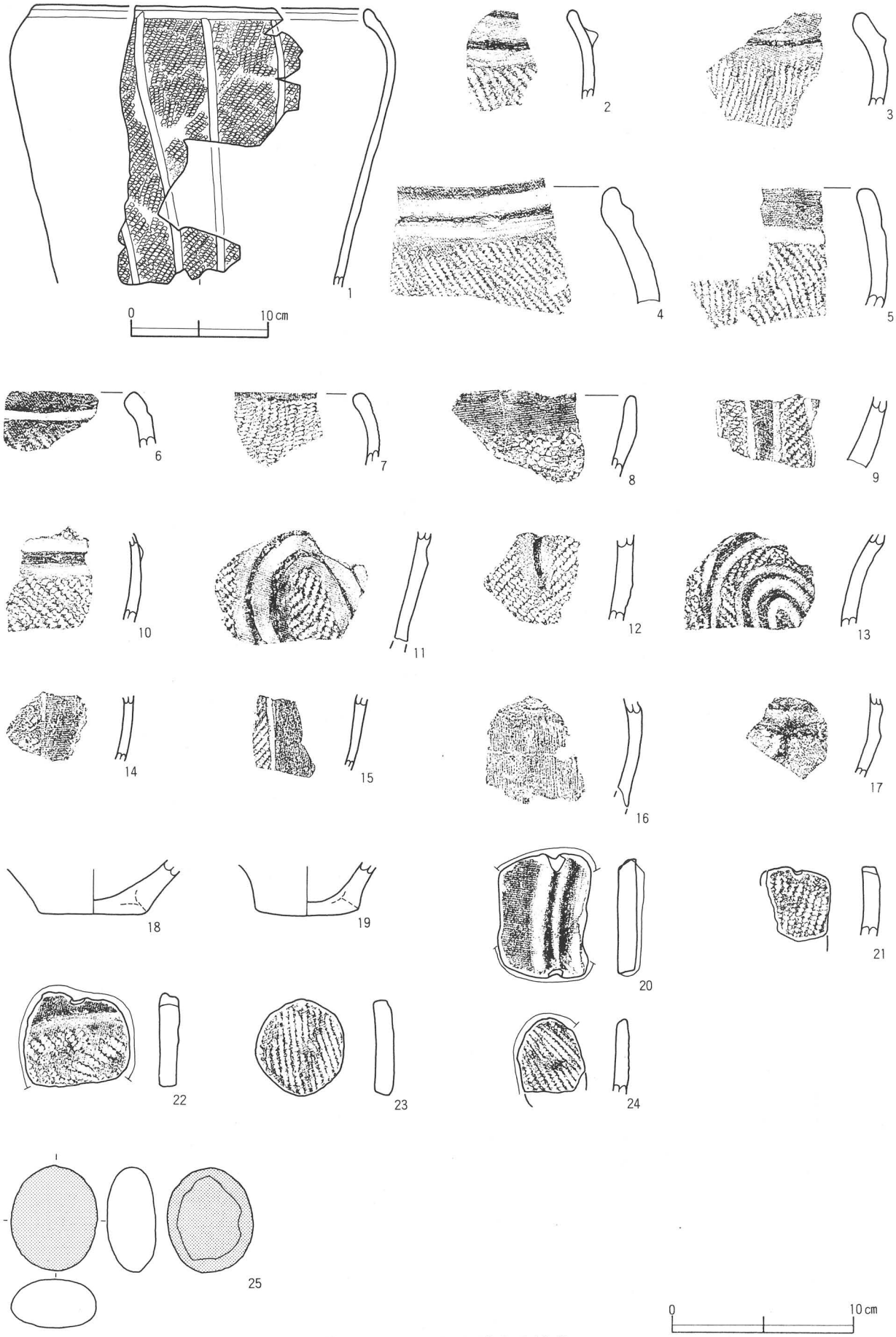
壁面・床面　確認されなかった。

炉　長径32cm、短径26cmの楕円形で、床面を36cm掘り込んで構築された地床炉である。焼土を含むことから炉址と判断した。

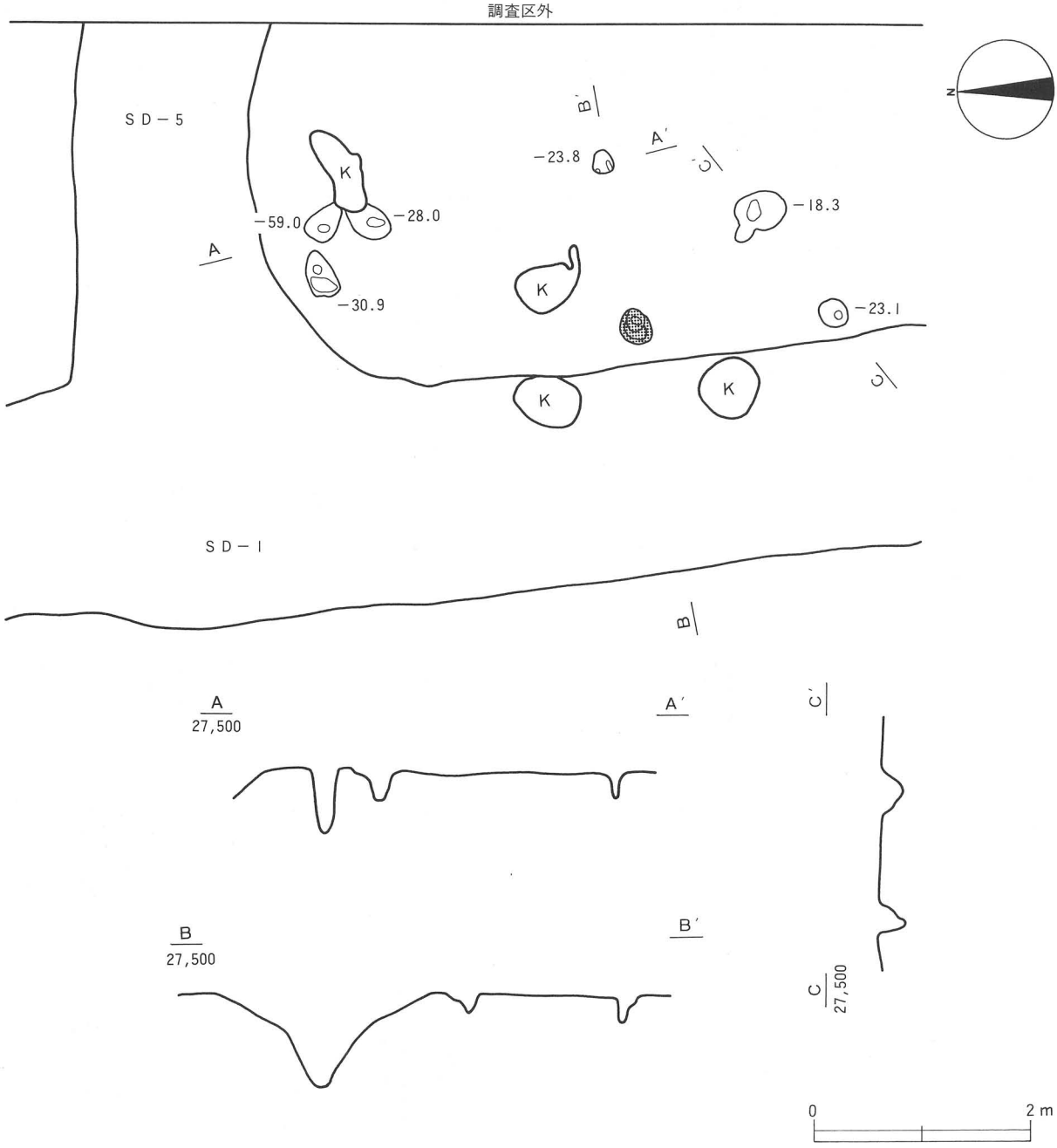
ピット　直径56～22cm、深さ63～15cmの円形、楕円形、不整楕円形を呈し、柱穴の可能性がある。

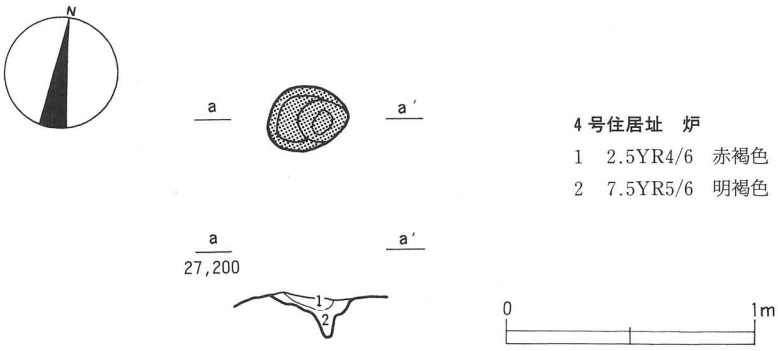
遺物　発見されなかった。

所見　本址は、炉とピットの存在から掘り込みが浅い竪穴住居址と判断した。正確な時期は不明であるが、2・3号住居址と傾向を同じくすることから縄文時代の可能性がある。



第14図　3号住居址出土遺物





4号住居址　炉

1　2.5YR4/6　赤褐色　焼土大多、ローム中中、ローム粒少

2　7.5YR5/6　明褐色　焼土粒少、炭化物中

第15図　4号住居址検出状況

1号土坑　〔第16図〕

位置　調査区東側で、1号溝の東壁沿いに確認できる。　4D－5区

長軸方向　N－23°－E

重複関係　確認面の状態では重複関係は見られなかったが、土層断面から1号溝を本跡が掘り込んでいると判断されるため、本跡の方が新しい。

規模と形状　長径166cm、短径106cm、深さ6～54cmの楕円形である。

壁面　東側においてはほぼ垂直に立ち上がるが、西壁は1号溝と切り合い関係にあり、僅かに立ち上がるだけである。

底面　楕円形を呈し、平坦である。

遺物　小型の馬が土坑の底面に、横位に埋葬されていた。肋骨は見られなかったが、全身に近い部位の骨が発見された。副葬品はない。

所見　本跡は馬の埋葬土壙墓である。骨の遺存状況が良好であったため、時期的には遡及し得ても100～200年前程度であろう。

2号土坑　〔第16図〕

位置　調査区西側　3S・3T－7区

長軸方向　N－28°－E

規模と形状　長径1.8m、短径1.0mの長方形を呈し、深さ47～56cmである。

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　ほぼ長方形状を呈し、平坦である。

覆土　下層はローム含度が高く、人為的埋土の可能性がある。上層で焼土粒が散見されるが本跡に伴うものではない。

遺物　出土していない。

所見　本跡の正確な時代や、具体的な機能については不明である。

3号土坑　〔第17～19図〕

位置　調査区北側中央　3X－0・1区を中心とする。

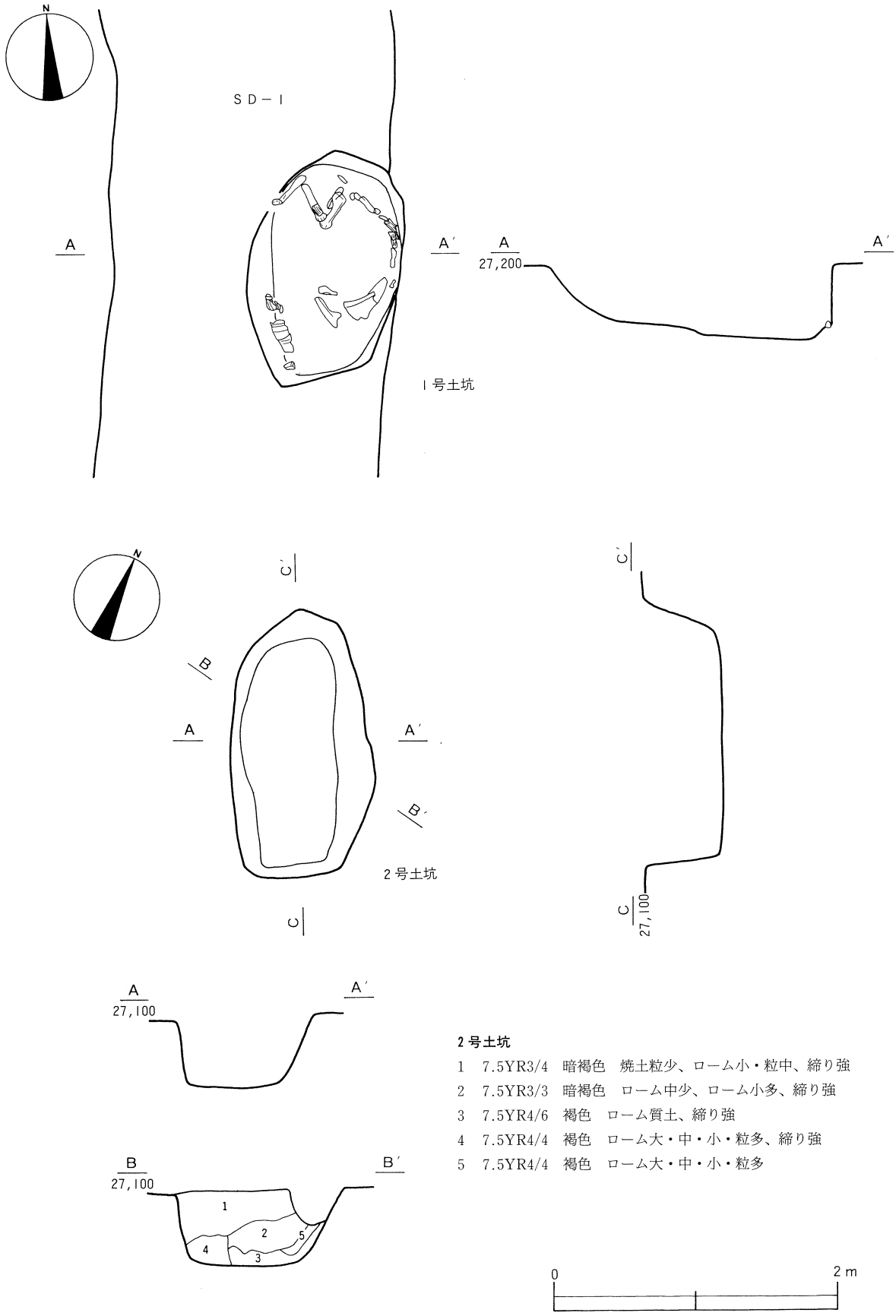
規模と形状　平面形は径1.4mの円形を呈し、深さ120～129cmの円筒形の土坑である。

壁面　やや斜位に向いて直立する。

底面　円形を呈し、平坦である。

覆土　4層に分層され、遺物の含まれる2～4層までは一気に埋め戻されたものと思われる。特に遺物の集中する3層では炭化物の量が多い。

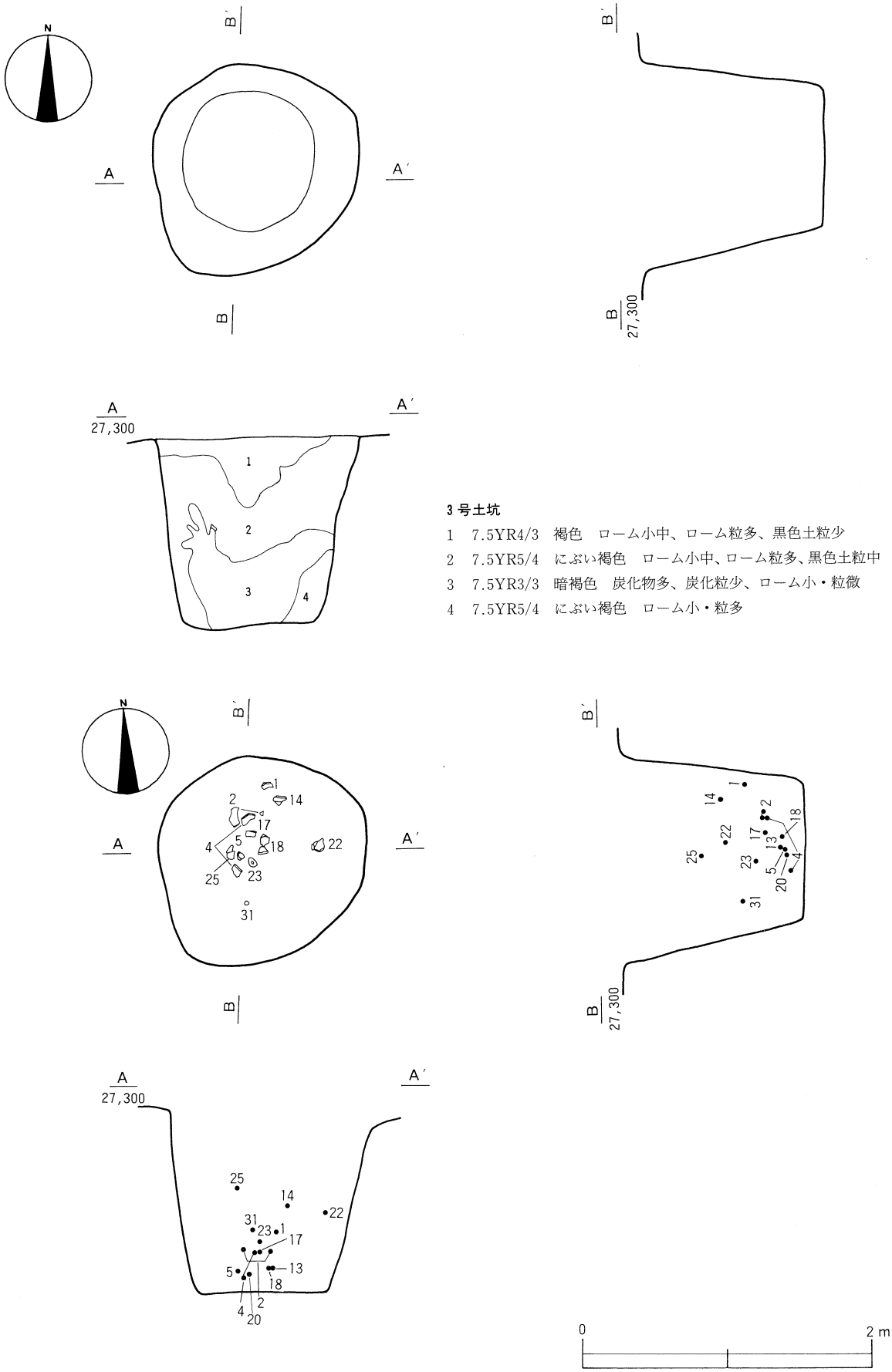
遺物　覆土中～下位より多数出土している。土器は18を除き全て深鉢である。1は推定径18.8cmで口縁部下に両側がなでられる微隆起線文が1条巡り、下半は0段多条RL。外面に炭化物が付着していた。2は推定径20.6cmの波状縁で、口縁に沿って両側がなでられる隆帯文が1条巡る。下半は単節RLで内面に炭化物が付着していた。3は推定径29.4cmで口縁下に幅広で浅い沈線が1条巡る。下半は0段多条LRで外面に炭化物が付着していた。4は推定径21.0cmで口縁下に左→右へと施文される沈



2号土坑

1　7.5YR3/4　暗褐色　焼土粒少、ローム小・粒中、締り強
2　7.5YR3/3　暗褐色　ローム中少、ローム小多、締り強
3　7.5YR4/6　褐色　ローム質土、締り強
4　7.5YR4/4　褐色　ローム大・中・小・粒多、締り強
5　7.5YR4/4　褐色　ローム大・中・小・粒多

第16図　1号・2号土坑検出状況



3 号土坑

1　7.5YR4/3　褐色　ローム小中、ローム粒多、黒色土粒少
2　7.5YR5/4　にぶい褐色　ローム小中、ローム粒多、黒色土粒中
3　7.5YR3/3　暗褐色　炭化物多、炭化粒少、ローム小・粒微
4　7.5YR5/4　にぶい褐色　ローム小・粒多

第17図　3 号土坑検出状況

線が１条巡る。下半は単節ＲＬである。５は推定径18.4cmで、口縁部は磨きにより稜が作られ、幅の狭い無文帯となる。下半は附加条２種無節Ｌｒ＋Ｌｒである。６・７は波状縁で、口縁に沿う微隆起線文が１条巡り、下半は曲線文となる。６は単節ＲＬ。７は原体不明の縄文で外面に炭化物が付着していた。８は波状縁で口縁に沿い両側がなでられる微隆起線文が１条巡り、下半は曲線文が描かれている。曲線文の両側に単節ＲＬが施文され、外面に炭化物が付着していた。９は波状縁で２条の沈線が水平に巡り、この間に円形刺突が連続して加えられる。沈線間は無文で、口縁部は単節ＬＲである。10・11は波状縁で、口縁に沿い沈線が１条巡る。11の沈線は幅が広い。下半はともに０段多条ＬＲである。12～19は胴部片である。12は屈曲部が隆帯状に高まりこの直上に沈線が１条巡っている。上下方は単節ＲＬである。13は垂下沈線文で０段多条ＲＬと無文帯が交互に施文されている。14は垂下する微隆起線文で文様間と隆起線沿いはなでられて無文となる。０段多条ＲＬ。15は両側がなでられる曲線的な微隆起線文で、無文帯を介さず０段多条ＲＬが施文されている。16･17は曲線的な沈線文で、０段多条ＲＬが施文されていた。18は壺もしくは鉢形土器である。器壁は薄く微隆起線文により曲線文が描かれている。内外面に炭化物が付着していた。12・13が加曽利ＥⅢ式となる他は加曽利ＥⅣ式に相当しよう。19～22は底部で、全て無文である。19は推定径7.2cmで底部直上は横なで、20は径4.8cmで底面やや上げ底気味、磨かれていた。21は推定径5.2cmで底面磨き、22は径6.2cmで底面が凸レンズ状である。23～32は土製品である。23は有孔円盤で全周丁寧に磨られている。穿孔は両側より行なわれ、内面の孔の方が径が大きい。孔径1.9cmで周縁の幅とほぼ同じである。25～29は土錘で、全て欠損している。28・29は方形である。30～32は土製円盤である。全て周縁を丁寧に磨っていた。

33は磨石類である。表裏両面に研磨痕が認められ平坦化している。流紋岩質軽石。

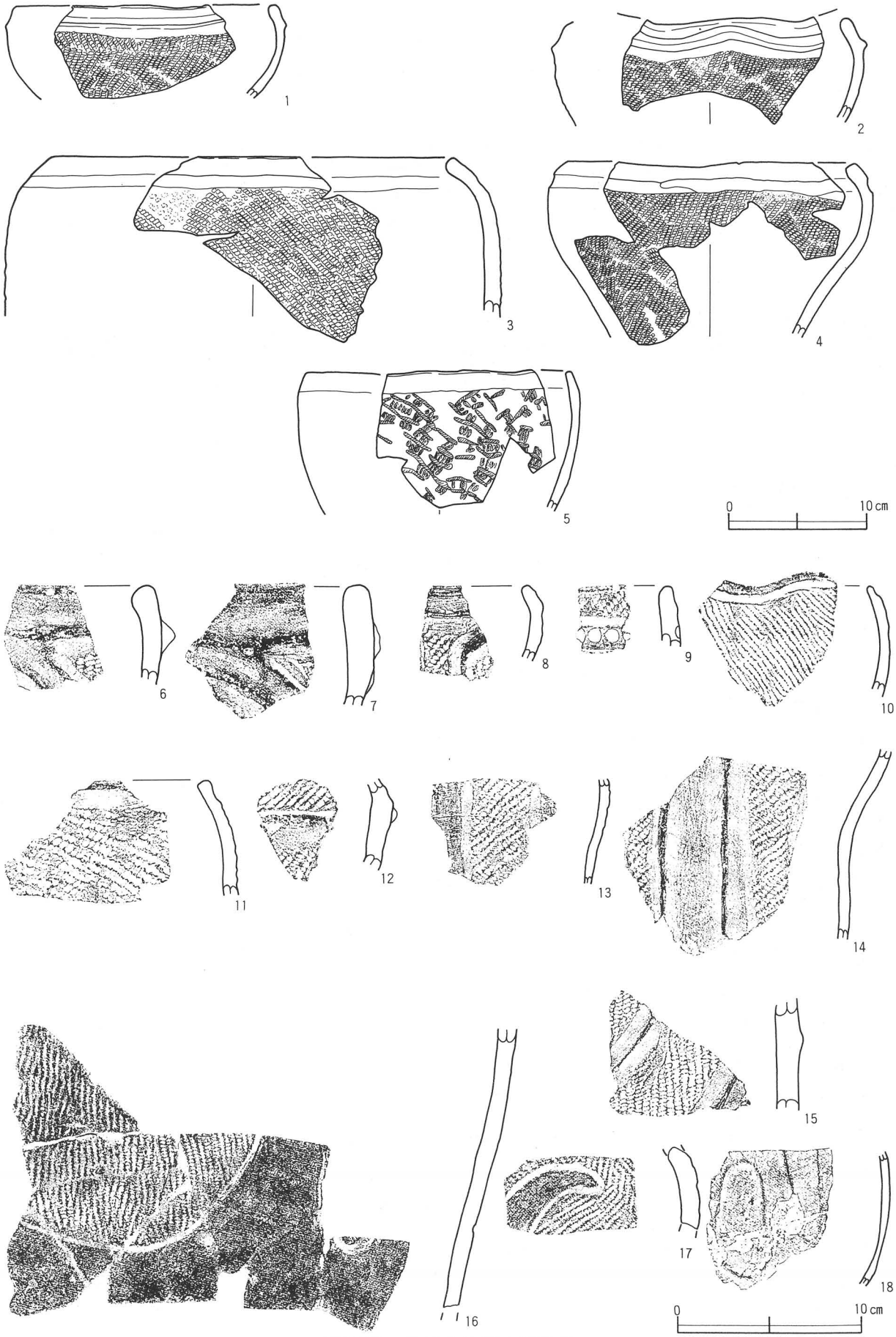
３号土坑出土土製品観察表

No.	名称	残存	大きさ（cm）	重量（g）	整形	文様・その他	時期
23	有孔円盤	完形	5.2×5.3	38.2	全周磨り	丁寧な磨り、沈線文、０段多条ＲＬ、両側より穿孔	中期後半
24	土錘	2/3	(5.6)×6.4	(49.5)	一部磨り	０段多条ＬＲ、切り目１ケ	不明
25	土錘	2/3	(5.1)×6.4	(43.0)	打ち欠き	０段多条ＲＬ、沈線文、切り目１ケ、内面炭化物	加曽利ＥⅣ式
26	土錘	1/2	(3.4)×(4.0)	(10.3)	一部磨り	０段多条ＬＲ、切り目１ケ	不明
27	土錘	一部	(2.2)×(2.3)	(3.5)	全周磨り	無文、切り目１ケ	不明
28	土錘	2/3	(3.7)×1.3	(14.9)	一部磨り	０段多条ＲＬ、切り目１ケ、方形	不明
29	土錘	一部	(3.1)×(2.8)	(5.5)	全周磨り	０段多条ＲＬ、切り目１ケ、方形	不明
30	土製円盤	完形	6.6×6.3	37.1	全周磨り	丁寧な磨り、単節ＲＬ、表面炭化物	不明
31	土製円盤	完形	4.5×4.2	20.5	全周磨り	丁寧な磨り（光沢）、単節ＬＲ、表面炭化物	不明
32	土製円盤	1/2	(2.9)×(4.0)	(7.9)	全周磨り	丁寧な磨り、単節ＲＬ	不明

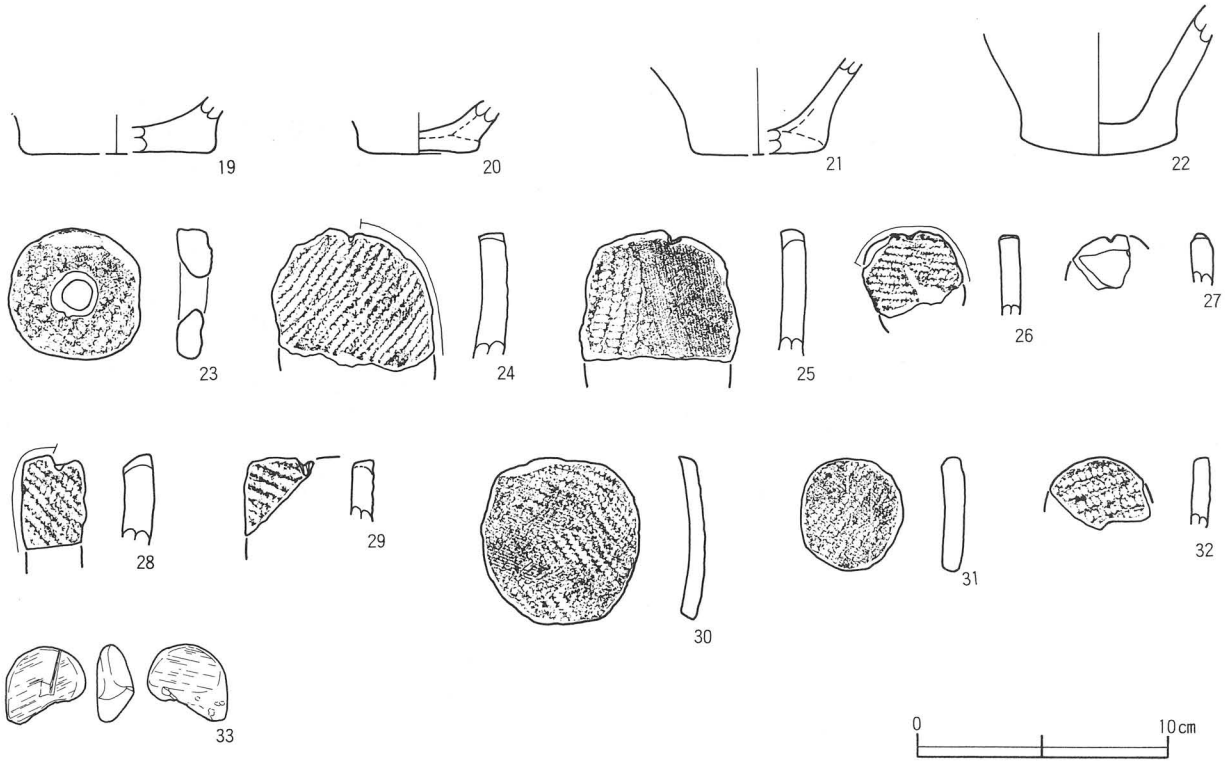
３号土坑出土石器観察表

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備　　考
33	磨石類	3.61	2.77	1.39	1.6	流紋岩質軽石	片側に断面「U」状の浅い溝。

所見　本跡は、縄文時代中期後半の土坑である。出土土器に１号住居址と接合したものがあり（16）、遺物の廃棄された時期を等しくする。



第18図　3号土坑出土遺物①



第19図　3号土坑出土遺物②

4号土坑　〔第20図〕

位置　3Ｖ－9区を中心とする。

規模と形状　径1.1ｍの円形を呈し、深さ32～34cmである。

壁面　西壁は外傾して立ち上がる。東壁は緩やかに外傾して立ち上がり、中位で段をなす。

底面　不整円形を呈し、平坦である。

覆土　上層を中心に焼土が散見するが、本跡に伴うものではない。

遺物　出土していない。

所見　本跡は遺構に伴う出土遺物がなく、時期・性格は不明である。

5号土坑　〔第20図〕

位置　4Ｂ－0・1区

長軸方向　Ｎ－7°－Ｅ

重複関係　南側を3号溝に浅く掘り込まれているので、本跡の方が古い。

規模と形状　長径2.0ｍ、短径1.4ｍの不整楕円形を呈し、深さ108～115cmである。

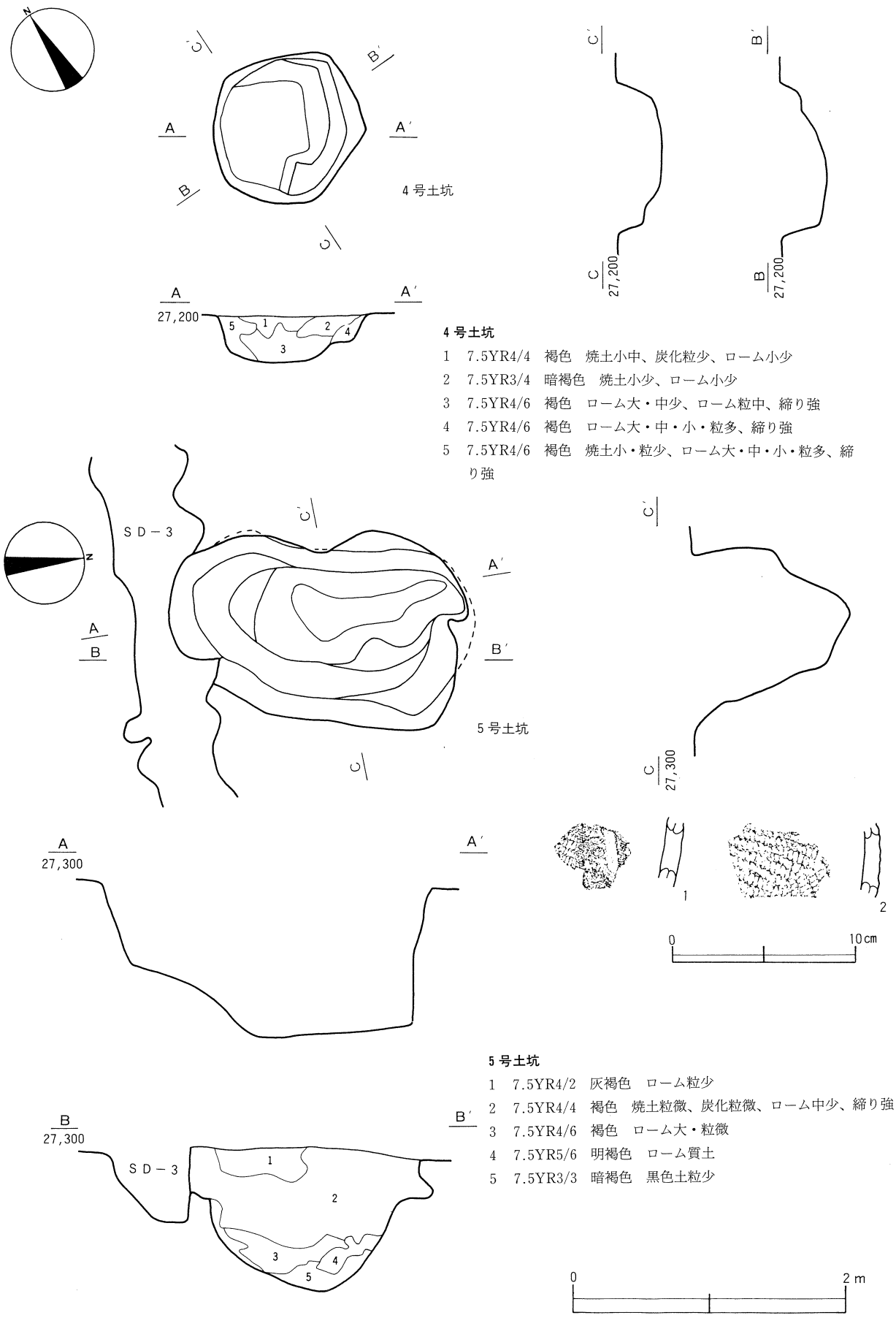
壁面　緩やかに外傾して立ち上がり、中位で段をなす個所もある。

底面　不定形を呈し、平坦である。

覆土　ローム質土の流れ込み（4層）もみられるが、基本的に自然堆積である。

遺物　覆土中から2点、縄文土器が出土している。1は地文0段多条ＬＲで沈線文が垂下し、沈線右側は無文である。断面に炭化物が付着していた。加曽利ＥⅢ式に相当しよう。2は0段多条ＲＬの羽状縄文である。

所見　本跡は縄文時代中期後半の土坑である。具体的な役割は不明である。



4号土坑

1　7.5YR4/4　褐色　焼土小中、炭化粒少、ローム小少
2　7.5YR3/4　暗褐色　焼土小少、ローム小少
3　7.5YR4/6　褐色　ローム大・中少、ローム粒中、締り強
4　7.5YR4/6　褐色　ローム大・中・小・粒多、締り強
5　7.5YR4/6　褐色　焼土小・粒少、ローム大・中・小・粒多、締り強

5号土坑

1　7.5YR4/2　灰褐色　ローム粒少
2　7.5YR4/4　褐色　焼土粒微、炭化粒微、ローム中少、締り強
3　7.5YR4/6　褐色　ローム大・粒微
4　7.5YR5/6　明褐色　ローム質土
5　7.5YR3/3　暗褐色　黒色土粒少

第20図　4号・5号土坑検出状況

6号土坑　〔第22図〕

位置　調査区域中央部　3Y－6区

長軸方向　N－38°－E

規模と形状　平面形は長径98cm、短径88cm、深さは56cmの楕円形を呈する。断面形は円筒形である。

壁面　やや外傾して立ち上がる。

底面　円形を呈し、平坦である。

覆土　褐色相を主体とし、自然堆積である。

遺物　出土していない。

所見　本跡の営まれた時代と役割は不明である。

7号土坑　〔第21・22図〕

位置　4A－9区を中心とする。8号土坑の西側。

長軸方向　N－28°－W

重複関係　北側部分を6号溝に掘り込まれているので、本跡の方が古い。

規模と形状　長径2.3m、短径1.5mの不整楕円形を呈し、深さ105～111cmである。

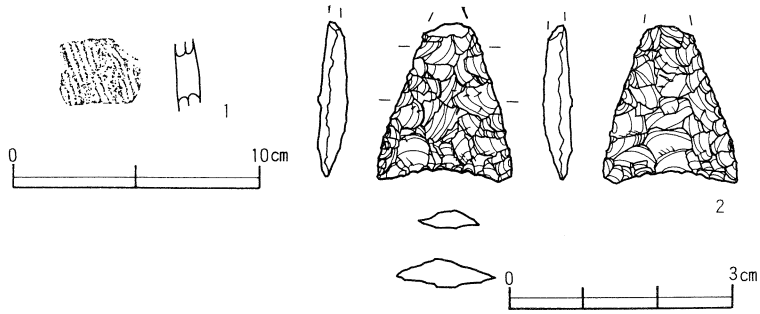
壁面　西壁は緩やかに外傾して立ち上がり、中位に段をなしている。東壁はやや垂直に立ち上がり、緩やかに内傾する。

底面　方形状を呈し、東側はえぐられている。

覆土　自然堆積である。

遺物　覆土中より無節Lrの縄文土器（1）と無茎石鏃（2）が各1点出土している。石鏃は流紋岩製で脚内側の抉り加工が浅く、先端部は折損している。

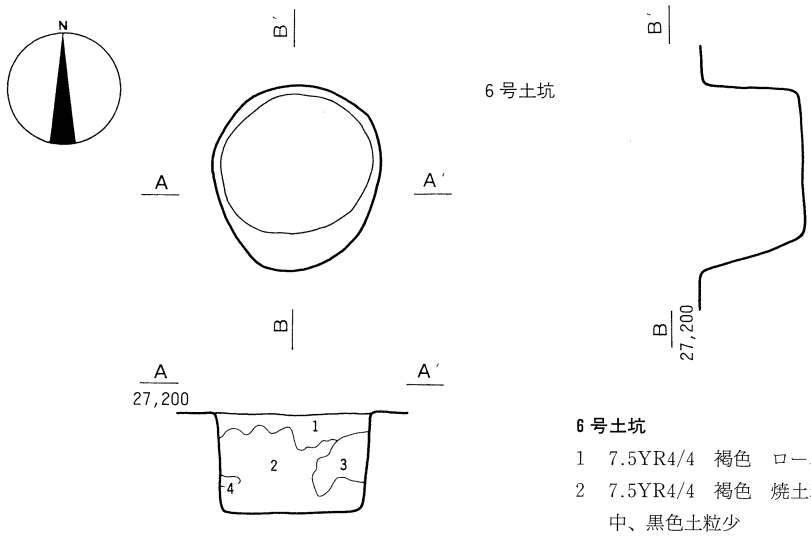
所見　本跡は、縄文時代の土坑である。性格は不明である。



第21図　7号土坑出土遺物

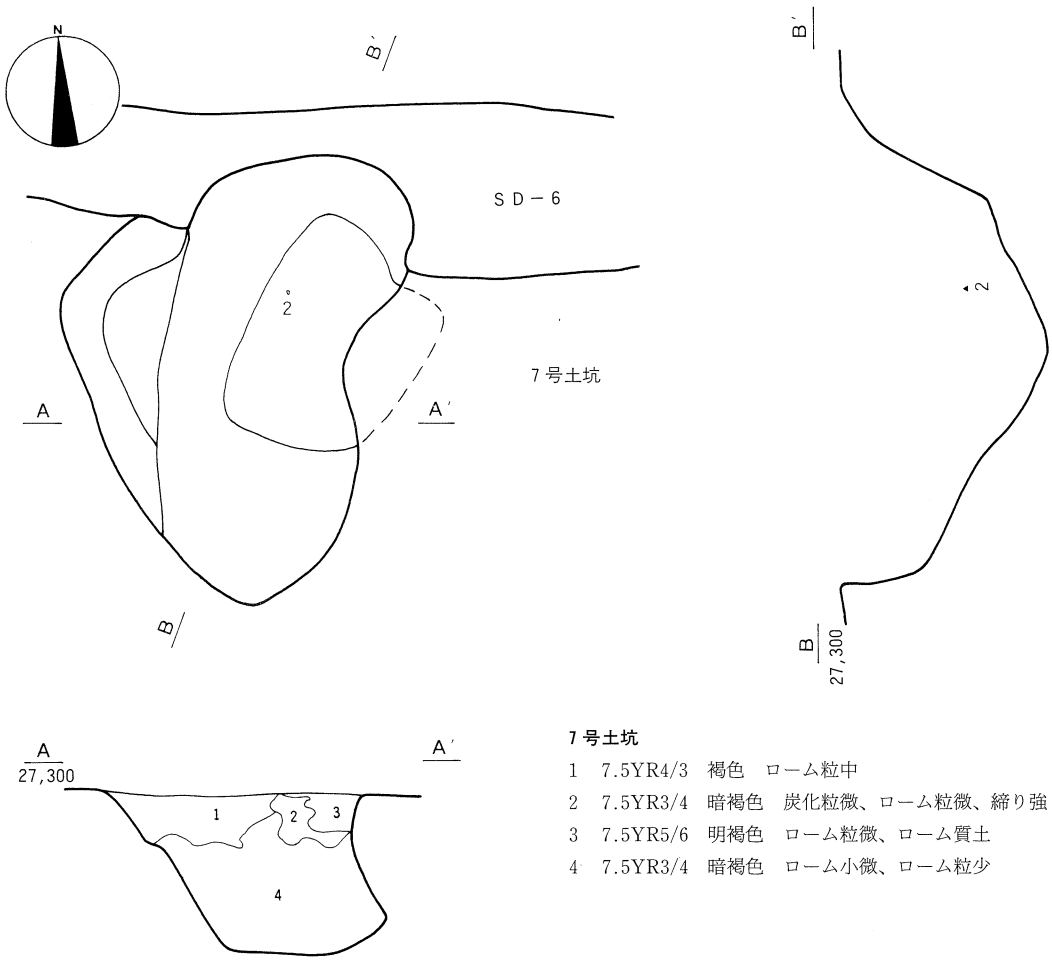
7号土坑出土石器観察表

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　材	備　　考
2	石　鏃	(2.12)	1.80	0.36	(1.0)	流紋岩	無茎。抉り込み浅い。



6号土坑

1　7.5YR4/4　褐色　ローム中・粒少、ローム小中
2　7.5YR4/4　褐色　焼土粒少、ローム大少、ローム中・小・粒中、黒色土粒少
3　7.5YR4/6　褐色　ローム大・粒中、ローム小少、黒色土粒中
4　7.5YR4/6　褐色　ローム粒多



7号土坑

1　7.5YR4/3　褐色　ローム粒中
2　7.5YR3/4　暗褐色　炭化粒微、ローム粒微、締り強
3　7.5YR5/6　明褐色　ローム粒微、ローム質土
4　7.5YR3/4　暗褐色　ローム小微、ローム粒少

第22図　6号・7号土坑検出状況

8号土坑　〔第23図〕

位置　7号土坑の東側。4A－9区

長軸方向　N－28°－W

規模と形状　長径2.3m、短径1.2mの不整楕円形を呈し、深さ44～46cmである。南側部分に径24～28cm、深さ42cmのほぼ円形のピットがある。

壁面　外傾して立ち上がっている。南西壁は中位に段をなしている。

底面　不定形を呈し、平坦である。

覆土　ピットの埋没に続き、3・5層のローム質土が堆積し、1・2層の褐色土が時間を経て堆積していったものと考えられる。

遺物　出土していない。

所見　本跡に伴う出土遺物がなく、時期・性格は不明である。

9号土坑　〔第23図〕

位置　調査区域東側の7号溝東壁沿いに確認できる。　4B－9区

長軸方向　N－38°－E

重複関係　確認面の状態では重複関係は見られなかったが、土層断面から7号溝を本跡が掘り込んでいる。

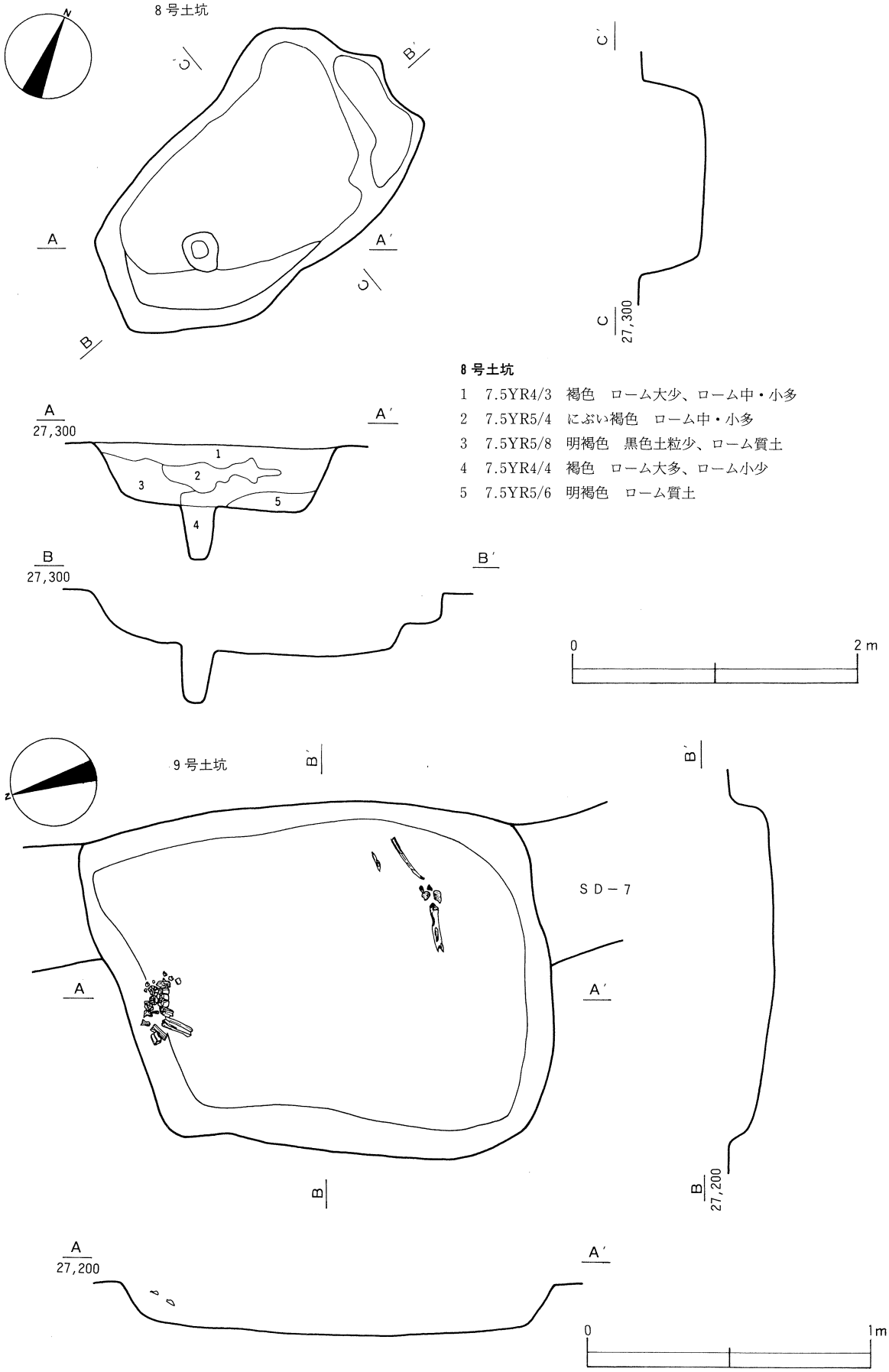
規模と形状　長径180cm、短径122cm、深さ18cmの不整楕円形を呈している。

壁面　外傾して緩やかに立ち上がる。

底面　不整長方形を呈し、平坦である。

遺物　馬と覚しき頭骨片、歯、四肢骨の一部が底面に散見された。

所見　骨の遺存状況が良好であるため、本跡は遡及しても、100～200年前の馬の埋葬墓壙と考える。



第23図　8号・9号土坑検出状況

１号溝　〔第24～26図〕

位置　調査区東端　４Ｃ－（－２）～12区、４Ｄ－４～16区

方向　４Ｄ－16区からほぼ北方向へ直線的に延びる。

重複関係　５号溝と１号溝の土層断面を比較観察したところ、まず５号溝がカギの手状に掘られ、その後に本跡が掘られたと考えられる。また本跡は、６・８・９号溝の東端と切り合う。中央部分では、１号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　全長約72ｍで、掘り方は上幅154～228cm、下幅9～85cm、深さ38～102cmである。断面観は、北側が逆台形・南側がＶ字形を呈する。溝の南側東壁沿いには、厚さ10～15cmの硬化面が途切れながらも存在する。

覆土　横位に累層する自然堆積で、下層に従い硬度が増す傾向がある。

遺物　土師器（古墳、奈良・平安）、陶器（中世）などが出土した。しかし、いずれも浮いた状態で出土しており、本跡に確実に伴うものではない。

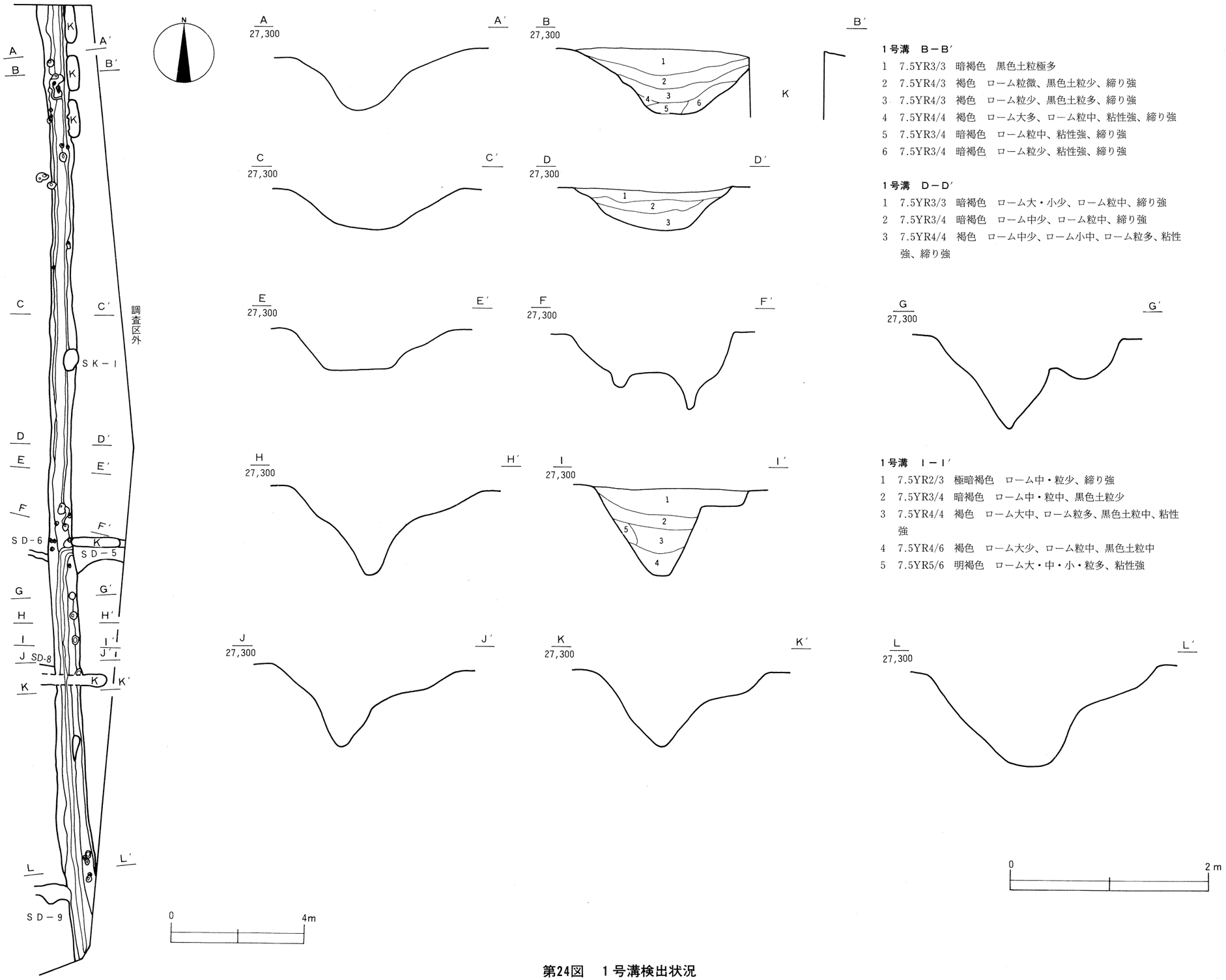
所見　本跡は６・８・９号溝の東端を吸収した形を示すが、６・８・９号溝自体は本跡の東側に延長していないため、本跡とこれらの溝が共存した可能性も考えられる。また本跡の絶対高は、北側で52cm、南側で102cmと比高差をもっている。硬化面については、溝の機能が低下・喪失してから道路的な用途として構築されたものと考える。本跡の正確な時期、具体的な役割については不明である。溝は、更に南北方向に延進するのものと思われる。

１号溝出土遺物観察表

No.	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師器 壺	A〔16.0〕 C（3.8）	覆土上層 ５％	普通	長石少量・ 石英微量	にぶい橙色	帯状粘土を貼り合わせた複合口縁。頸部寄りにハケメ。内面横位ヘラミガキ。	古墳時代
2	土師器 杯	A〔12.8〕 C（2.1）	覆土中 10％	普通	長石微量	にぶい黄橙色	内面・口縁外面はヨコナデ。体部はナデ。	古墳時代
3	土師器 杯	A〔15.8〕 C（3.1）	覆土中 10％	普通	長石・石英 微量	明赤褐色	口縁部ヨコナデ。内面ナデ。底部は指頭による調整か。	
4	土師器 甕	C（1.8）	覆土中 ５％	普通	石英少量・ 雲母微量	にぶい赤褐色	口唇部は斜め上方につまみ上げられ、Ｓ字状に屈曲する。ナデ調整。	奈良・平安時代
5	土製品 土玉	長さ 2.3 幅　2.6 孔径0.7	覆土上層 完形	普通	長石微量	にぶい黄橙色	全体に不均一なミガキ調整。被熱して、黒褐色化する個所あり。	重さ13.7ｇ
6	土師器 内黒高台付杯	C（1.3）	覆土中 ５％	普通	長石少量	内面黒色 外面黄褐色	内面黒色処理の上、ヘラミガキ。底面は回転ヘラ切り。	平安時代
7	陶器 甕	C（8.1）	覆土中層 ５％	良好	長石少量	胎土褐灰色 釉調浅黄色	外面に淡緑～灰色の釉が付着する胴部片。花弁状の押印文を施す。内面指頭痕。	常滑窯産 中世
8	陶器 こね鉢	C（3.6）	覆土上層 ５％	良好	長石少量	灰白色	内面に淡緑色の釉が付着。口唇部外面は微隆起する。	山茶碗窯系 中世

１号溝出土石器観察表

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(ｇ)	石材	備考
9	砥石	(11.89)	(4.07)	(2.66)	(178.0)	結晶片岩	表面・側面が凹んでいる。
10	砥石	(7.01)	(4.18)	(2.35)	(97.0)	凝灰岩	４面砥面。折損。裏面に刃傷。



1号溝　B－B′

1　7.5YR3/3　暗褐色　黒色土粒極多
2　7.5YR4/3　褐色　ローム粒微、黒色土粒少、締り強
3　7.5YR4/3　褐色　ローム粒少、黒色土粒多、締り強
4　7.5YR4/4　褐色　ローム大多、ローム粒中、粘性強、締り強
5　7.5YR3/4　暗褐色　ローム粒中、粘性強、締り強
6　7.5YR3/4　暗褐色　ローム粒少、粘性強、締り強

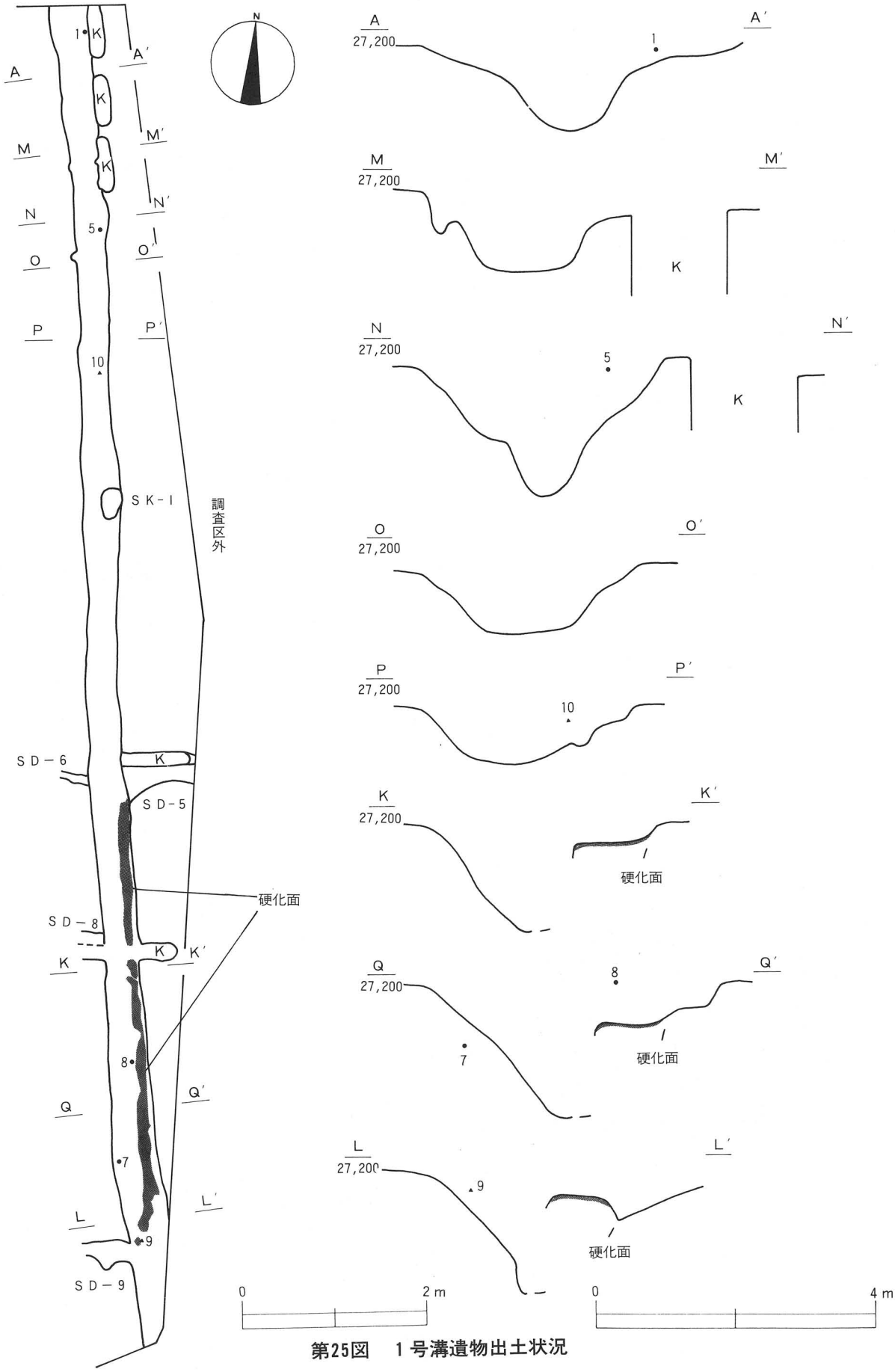
1号溝　D－D′

1　7.5YR3/3　暗褐色　ローム大・小少、ローム粒中、締り強
2　7.5YR3/4　暗褐色　ローム中少、ローム粒中、締り強
3　7.5YR4/4　褐色　ローム中少、ローム小中、ローム粒多、粘性強、締り強

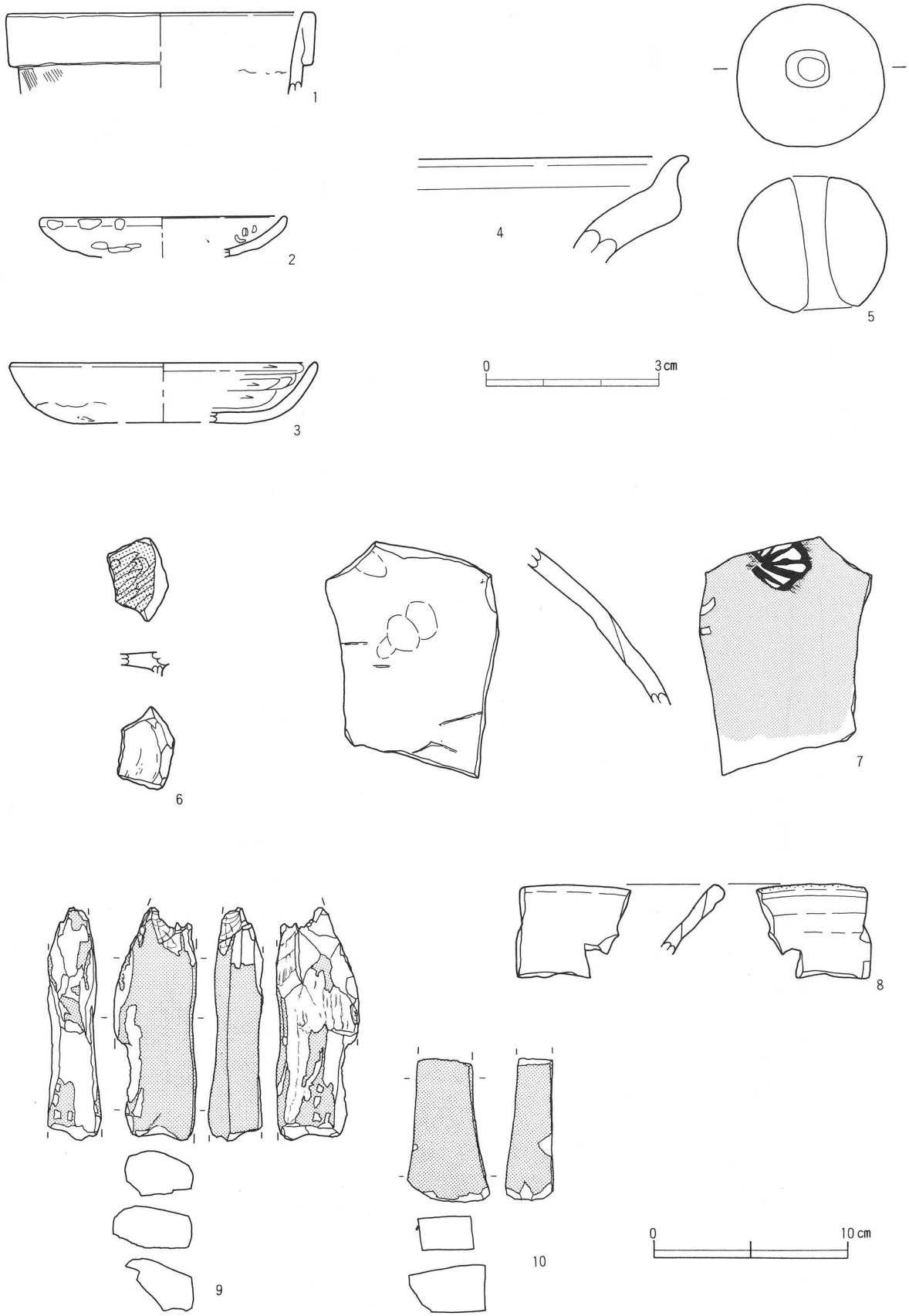
1号溝　I－I′

1　7.5YR2/3　極暗褐色　ローム中・粒少、締り強
2　7.5YR3/4　暗褐色　ローム中・粒中、黒色土粒少
3　7.5YR4/4　褐色　ローム大中、ローム粒多、黒色土粒中、粘性強
4　7.5YR4/6　褐色　ローム大少、ローム粒中、黒色土粒中
5　7.5YR5/6　明褐色　ローム大・中・小・粒多、粘性強

第24図　1号溝検出状況



第25図　1号溝遺物出土状況



第26図　1号溝出土遺物

2号溝　〔第27～29図〕

位置　調査区北端　3S～3Z・4A・4B－（－1）区

方向　3S－（－1）区から真東へ、ほぼ直線的に延びる。

重複関係　2号住居址と切れ合い関係にあるが、出土遺物を考慮すると明らかに本跡が新しい。

規模と形状　全長約37mで、掘り方は上幅90～118cm、下幅30～50cm、深さ41～69cmを計る。断面観は、逆台形である。

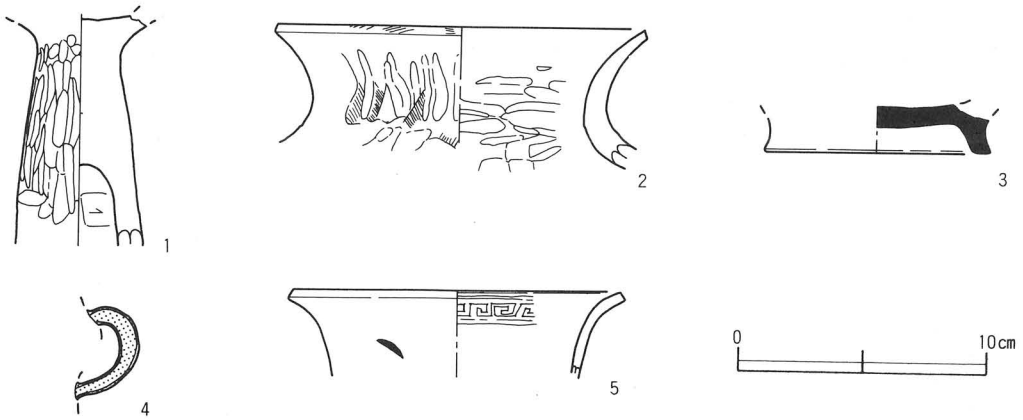
覆土　ロームの含度が高く、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物　土師器（古墳）、須恵器（奈良・平安）、磁器（中近世）などが出土した。いずれも時代が不均一な遺物群であり、本跡に確実に伴うものではない。

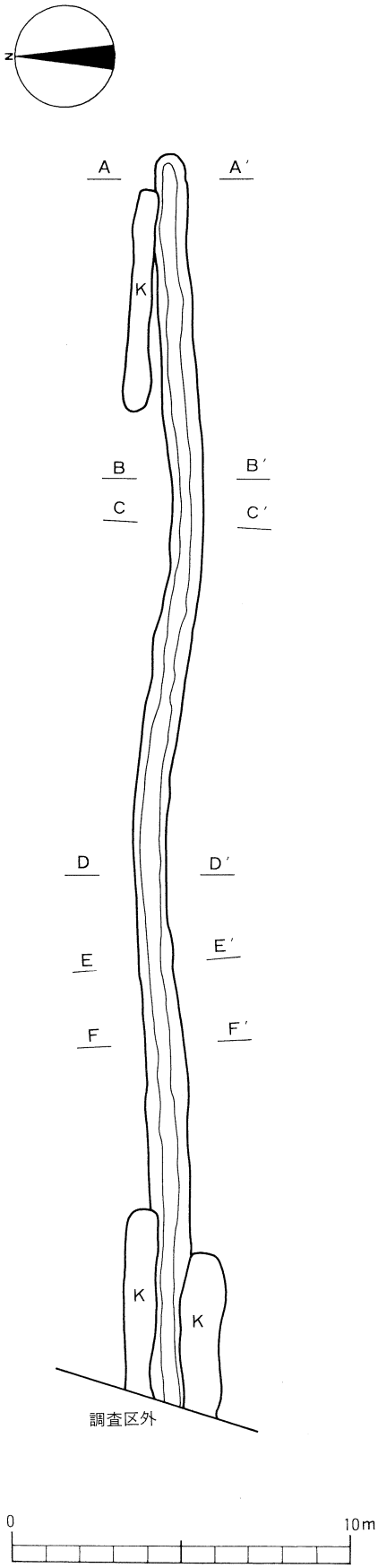
所見　本跡は底面幅も広く、台形状に掘り込まれており、しっかりした形の溝である。時期・性格は不明である。

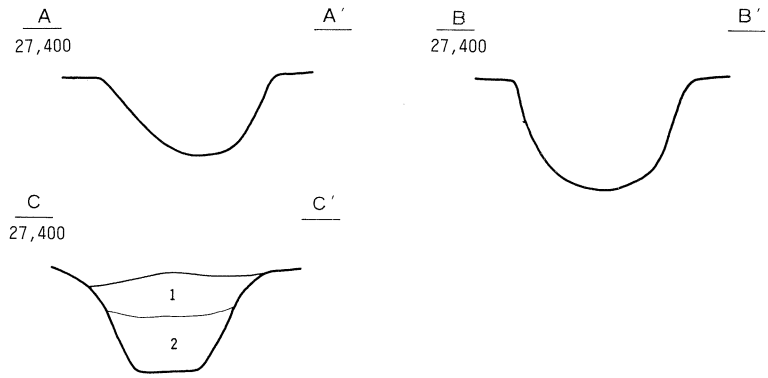
2号溝出土遺物観察表

No.	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師器 高杯	C (8.3)	覆土下層 60%	普通	長石・石英 粒微量	にぶい黄橙 色	体部へと徐々にすぼまる裾部片。外面縦位のヘラミガキ。内面ヘラナデ。	古墳時代
2	土師器 壺	A〔14.7〕 C (4.7)	覆土中 25%	良好	長石・石英 微量	にぶい橙色	緩やかに外反する口縁部片。外面ハケメの上ナデ。内面横位のヘラミガキ。	古墳時代
3	須恵器 高台付杯	B〔9.0〕 C (2.1)	覆土上層 50%	良好	石英少量	灰色 橙色	高台内底面は被熱し、赤色変成する。底部回転ヘラ切り。	奈良・平安時代
4	青磁 香炉 または壺	C (3.7)	覆土上層 90%	良好	精良	オリーブ灰 色 灰白色	耳部。外面の釉に0.5mm大の気泡が生じる。釉は厚い。	中近世
5	染付 碗	A〔13.0〕 C (3.4)	覆土上層 15%	良好	精良	明青白色 灰白色	外面に界線と文様(不明)。内面には雷文が口縁部に配される。ラッパ状に開く口縁部片。	肥前系 近世



第27図　2号溝出土遺物

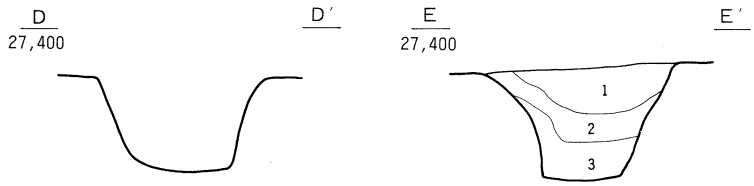




2号溝　C－C′

1　7.5YR4/4　褐色　ローム中少、ローム小中、ローム粒多

2　7.5YR3/4　暗褐色　ローム大・小少、ローム中・粒中、ローム
　ブロック少

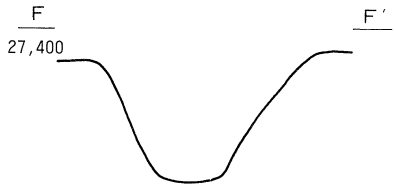


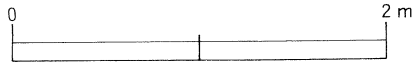
2号溝　E－E′

1　7.5YR4/6　褐色　ローム小少、ローム粒多、締り強

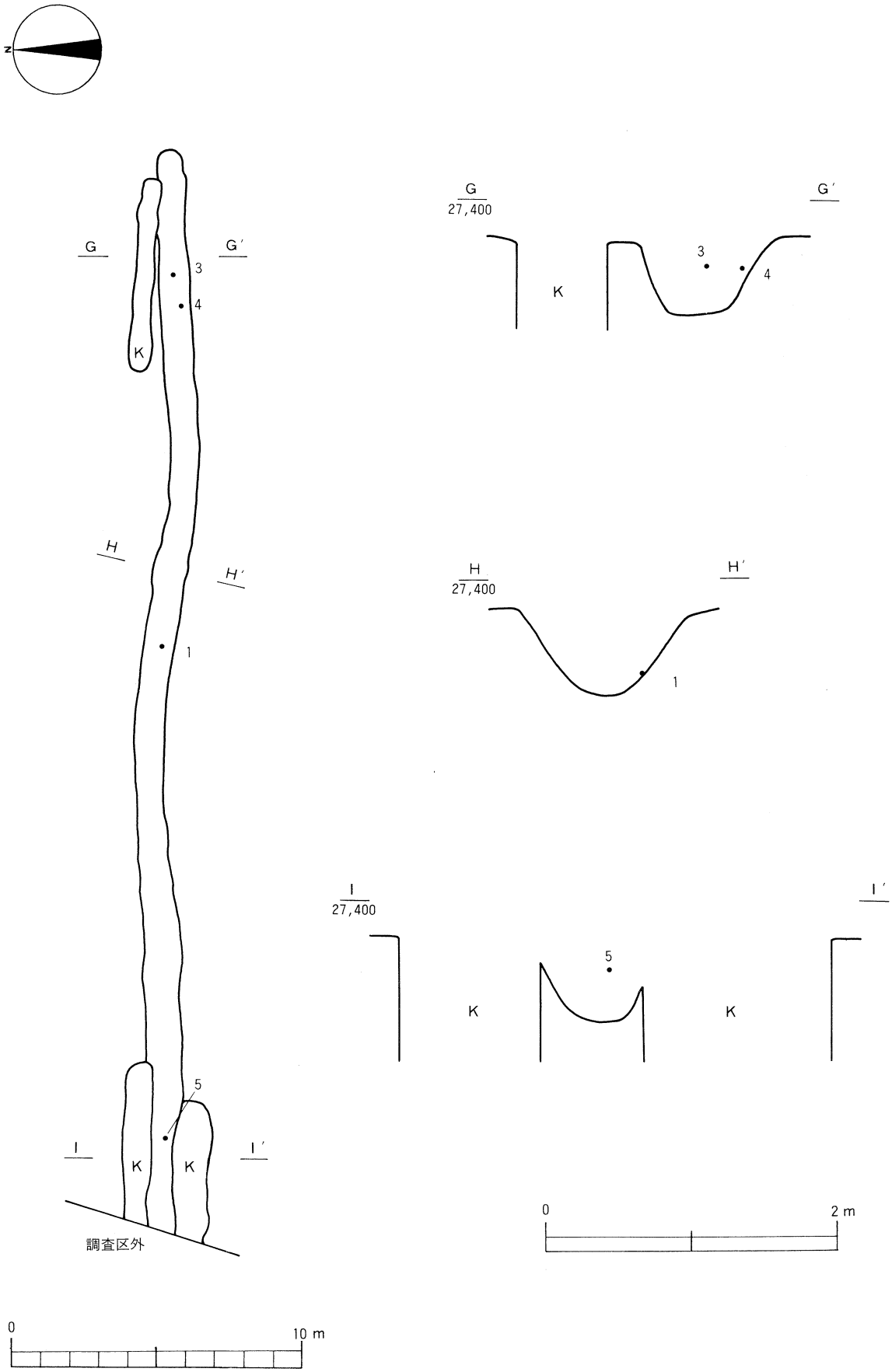
2　7.5YR3/3　暗褐色　ローム中少、ローム粒中、粘性強、締り強

3　7.5YR4/4　褐色　ローム大多、ローム粒少、黒色土粒少

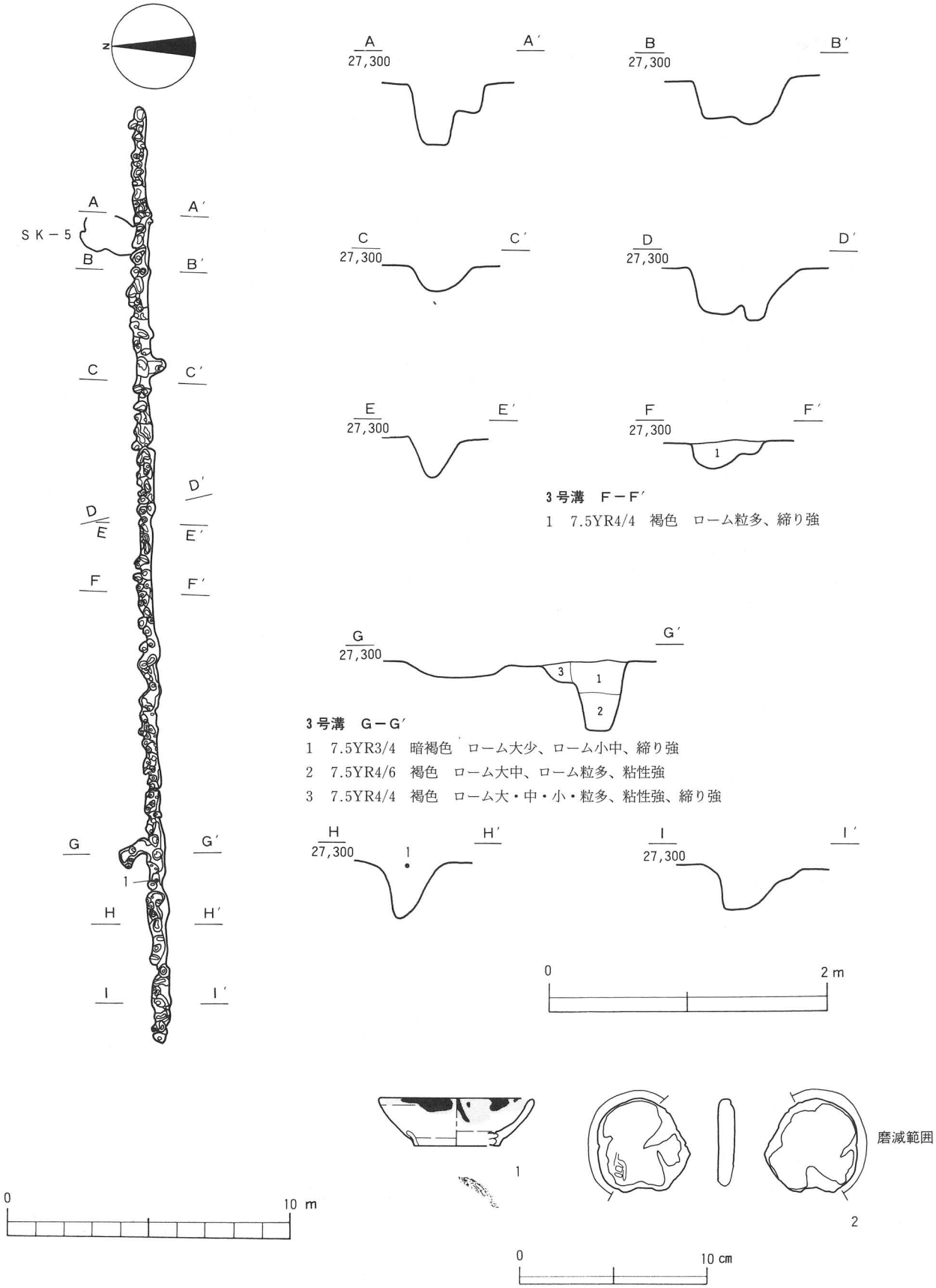




第28図　2号溝検出状況



第29図　2号溝遺物出土状況



第30図　3号溝検出状況・出土遺物

3号溝　〔第30図〕

位置　調査区北側　3U～3Z・4A～4C－1区

方向　3U－1区から真東方向へ、直線的に延びている。

重複関係　4B－1区で5号土坑を掘り込んでおり、本跡の方が新しい。

規模と形状　全長約33m。全体が攪乱されており、溝の形状はほとんど残っていない。

覆土　攪乱部・溝覆土ともにロームを多く含むことから、人為的な埋土であろう。

遺物　土師質土器小皿（1）、円形に磨られた土製品（2）が出土している。上層または覆土中からの出土のため、本跡に伴うものとは言えない。

所見　作物痕と覚しき攪乱が重複し、遺存状況が劣悪である。遺構の性格や時代は不明。

3号溝出土遺物観察表

No.	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師質 土器 小皿	A〔8.2〕 B〔4.6〕 C 2.5	覆土上層 15%	普通	赤色粒微量	にぶい橙色	緩やかに立ち上がる口縁部片。底部回転糸切り痕。内外面ナデ。口縁部に黒色物（油烟？）が多量に付着する。	灯明皿として利用
2	土製品	最大幅5.0 厚さ 0.9	覆土中	普通	長石・雲母・赤色粒・石英微量	褐灰色 にぶい褐色	両面に数ケ所削痕あり。側面が円周状に磨滅する。	土師質土器の転用か

4号溝　〔第31図〕

位置　2・3号溝と並列する。3U・3V－2区

方向　3U－2区から真東へ直線的に延びている。

規模と形状　全長約6mで、掘り方断面は上幅52～62cm、下幅20～25cm、深さ4～14cmで浅い箱掘形である。東端に長径20～34cm、短径14～22cm、深さ28～38cmの楕円形の落ち込みが2ヶ所ある。

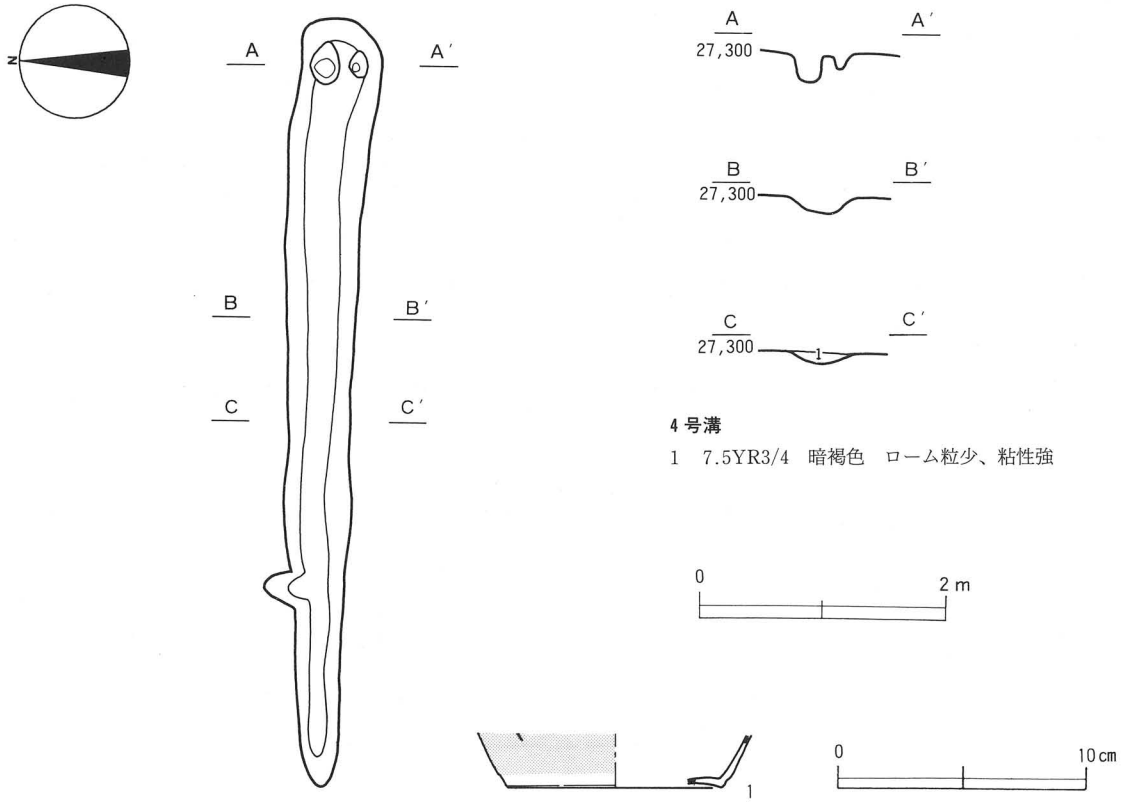
覆土　1層のみの単一層で、自然堆積と思われる。

遺物　覆土中から近現代と覚しき磁器片（1）が出土した。

所見　時期的には近現代以降の遺構と考えられるが、性格は不明である。

4号溝出土遺物観察表

No.	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	磁器 瓶類？	B〔4.3〕 C 2.1	覆土中 10%	良好	精良	灰白色 にぶい黄色	底面は内側に突出し、体部は外傾して立ち上がる。内面と底部寄り側面は無釉。	近現代か



第31図　4号溝検出状況・出土遺物

5号溝　〔第32図〕

位置　4D－8・9区を中心とする。

方向　4D－8区東壁から西へ延び、4D－9区で南へL字状に曲がり1号溝に含まれる。

重複関係　土層断面の観察からまず本跡が掘られ、その後1号溝に掘り込まれたと考えられる。

規模と形状　掘り方の上幅は攪乱のため不明。下幅24cm、深さ31～33cmで断面観はU字形である。

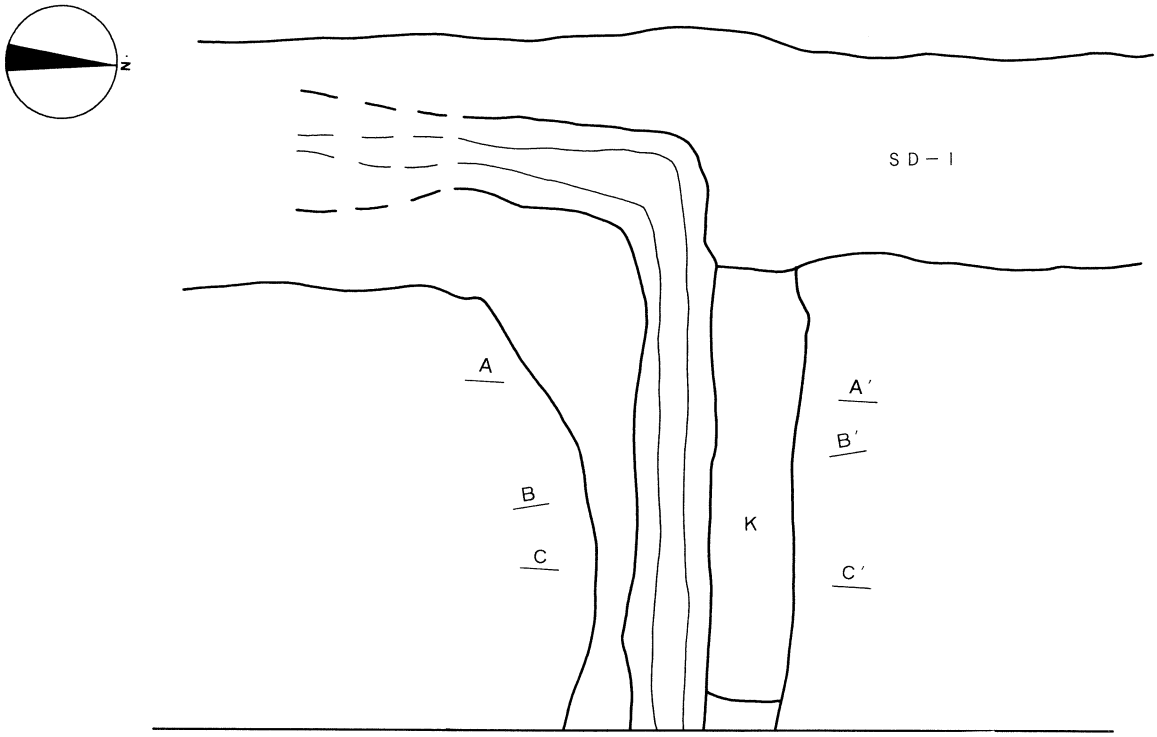
覆土　始めにロームの多い5・6層が人為的に埋め戻され、以後上面まで褐色相の土が堆積していったものと思われる。

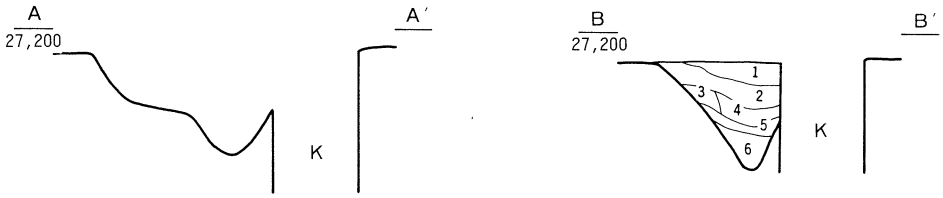
遺物　須恵器片（1）が覆土中から出土しているが、出土高からみて当遺構と関連性は乏しい。

所見　本跡は、更に東方に延長するものと思われる。溝の時代や性格は不明である。

5号溝出土遺物観察表

No.	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	須恵器 壺甕類	C (5.2)	覆土中 5%	普通	雲母微量	にぶい黄褐色 暗灰黄色	外面に条線群からなる叩き目痕。内面ナデ。	奈良・平安時代





5号溝

1　7.5YR5/4　にぶい褐色　ローム大微、ローム小中、ローム粒少、黒色土粒中、締り強

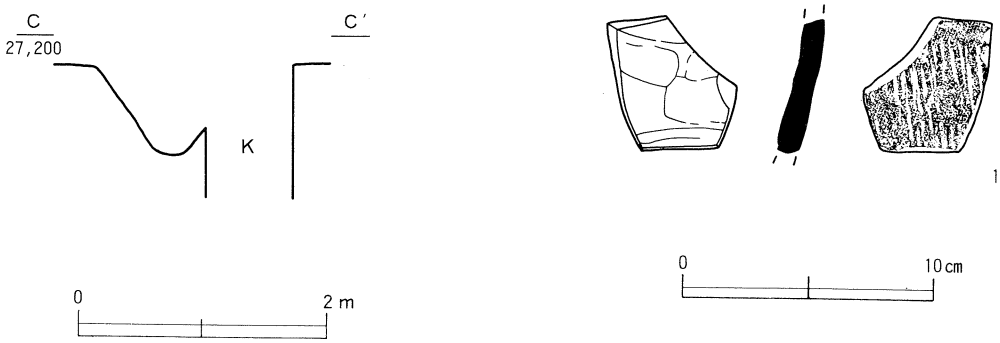
2　7.5YR3/4　暗褐色　ローム粒微、黒色土粒少、締り強

3　7.5YR5/6　明褐色　ローム中・小中、黒色土粒少、締り強

4　7.5YR5/4　にぶい褐色　ローム大微、ローム小・粒中、黒色土粒多、締り強

5　7.5YR6/8　橙色　ローム大・中・小・粒多

6　7.5YR4/6　褐色　ローム大・中多、ローム小少、ローム粒微、黒色土粒多



第32図　5号溝検出状況・出土遺物

6号溝　〔第33図〕

位置　調査区中央部　3V～4B－8、4A～4C－9区

方向　ほぼ東西に延びる。

重複関係　精査時の観察所見からは、7号溝と7号土坑よりも本跡の方が新しいが、東端で交わる1号溝との新旧関係は不明である。

規模と形状　全長29.2m、上幅90～25cm、下幅50～10cm、深さ15～6cmである。底面は後世の攪乱による複数のピットがあり、断面形は皿形である。西端で溝が切れているのは、溝の深度が浅く、表土除去時に溝の下面まで削り取られたためと考えられる。

覆土　水平方向に主として堆積することから自然堆積と思われる。

遺物　覆土中から近世の肥前系染付（1）が1点出土した。

所見　本跡の営まれた時期と役割は不明である。

6号溝出土遺物観察表

No.	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	染付 皿	A〔18.0〕 C（1.7）	覆土中 10%	良好	精良	明緑灰色 灰白色	緩やかに立ち上がる口縁部片。外面に1条の沈線、内面に文様（花？）が描かれる。	肥前系 近世

7号溝　〔第34図〕

位置　調査区東南　4B－7～4C－16、4D－16区　1号溝に並行する。

方向　調査区東南からゆるやかにS字状に南に向かい、調査区外に延びる。

重複関係　本跡と、6・9号溝との切り合い関係は、6号溝より本跡の方が古く、9号溝よりは新しい。

規模と形状　全長40m、上幅100～45cm、下幅80～25cm、深さ20～2cmである。断面形は、北側では皿形で、南側においては逆台形を呈する。6号溝と交差する辺りから北側は、深度は浅くなり端部で途切れる。

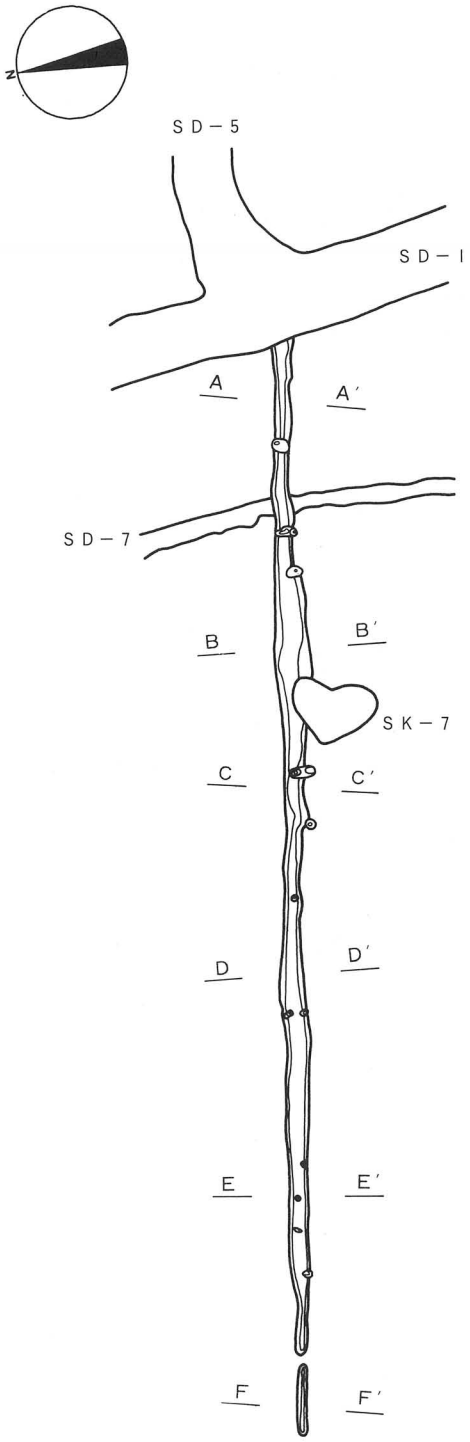
覆土　暗褐色相を主体とし、単一相が多い。自然堆積と思われる。

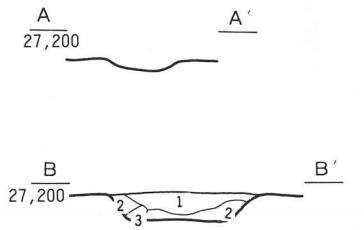
遺物　覆土中から、土師器片（1）、陶器片（2）が出土しているが、本跡に確実に伴うものではない。

所見　本跡の時期・役割は不明である。

7号溝出土遺物観察表

No.	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師器 内黒杯	A〔13.5〕 C（2.2）	覆土中 5%	普通	長石微量	にぶい橙色 黒色	外反する口縁部片。外面ナデ。内面黒色処理の上、横位ヘラミガキ。	奈良・平安時代
2	陶器 碗皿類	C（1.4）	覆土中 5%	良好	良土	暗赤褐色 にぶい黄橙色	肥厚し、丸みを帯びる口縁部片。釉は厚い。	瀬戸美濃系 近世





6号溝　B－B′

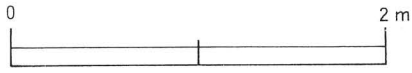
1　7.5YR3/4　暗褐色　ローム大微、ローム中・粒少
2　7.5YR4/6　褐色　ローム粒中
3　7.5YR4/4　褐色　ローム小少、ローム粒中、黒色土粒少

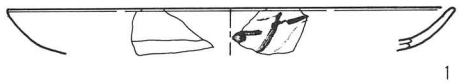
6号溝　D－D′

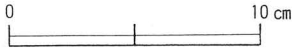
1　7.5YR4/6　褐色　ローム小・粒少

6号溝　E－E′

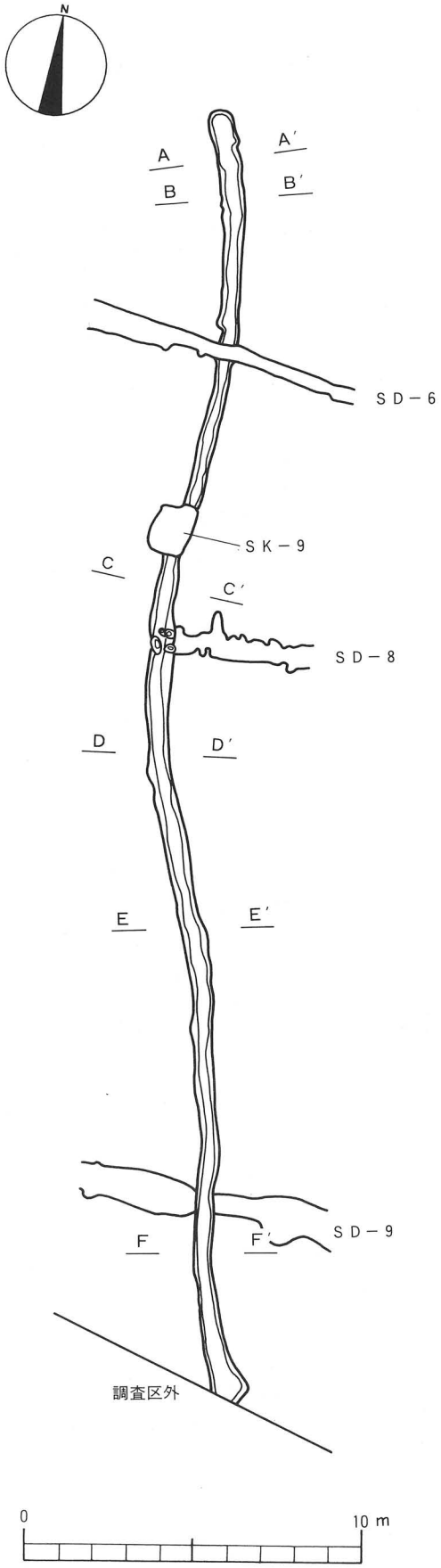
1　7.5YR3/4　暗褐色　ローム中中、ローム小・粒少
2　7.5YR4/6　褐色　ローム大・中・小・粒多

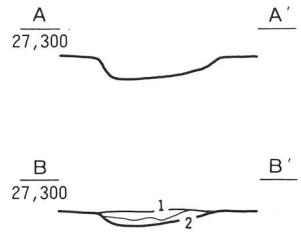






第33図　6号溝検出状況・出土遺物

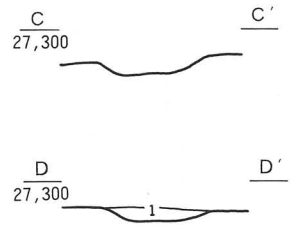




7号溝　B－B′

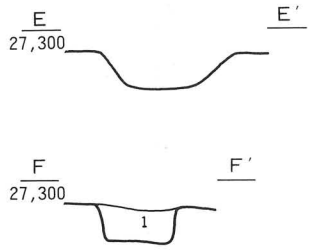
1　7.5YR3/3　暗褐色　ローム中・粒少

2　7.5YR4/6　褐色　ローム粒多



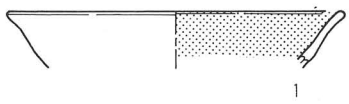
7号溝　D－D′

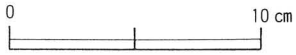
1　7.5YR3/3　暗褐色　ローム大・粒少、ローム中・小中、黒色土粒少



7号溝　F－F′

1　7.5YR3/3　暗褐色　ローム大少、ローム中・粒中、ローム小多、締り強





第34図　7号溝検出状況・出土遺物

8号溝　〔第35図〕

位置　調査区北東側に確認でき、6・9号溝と並行する。　4B・4C－11区

方向　ほぼ東西に延びる。

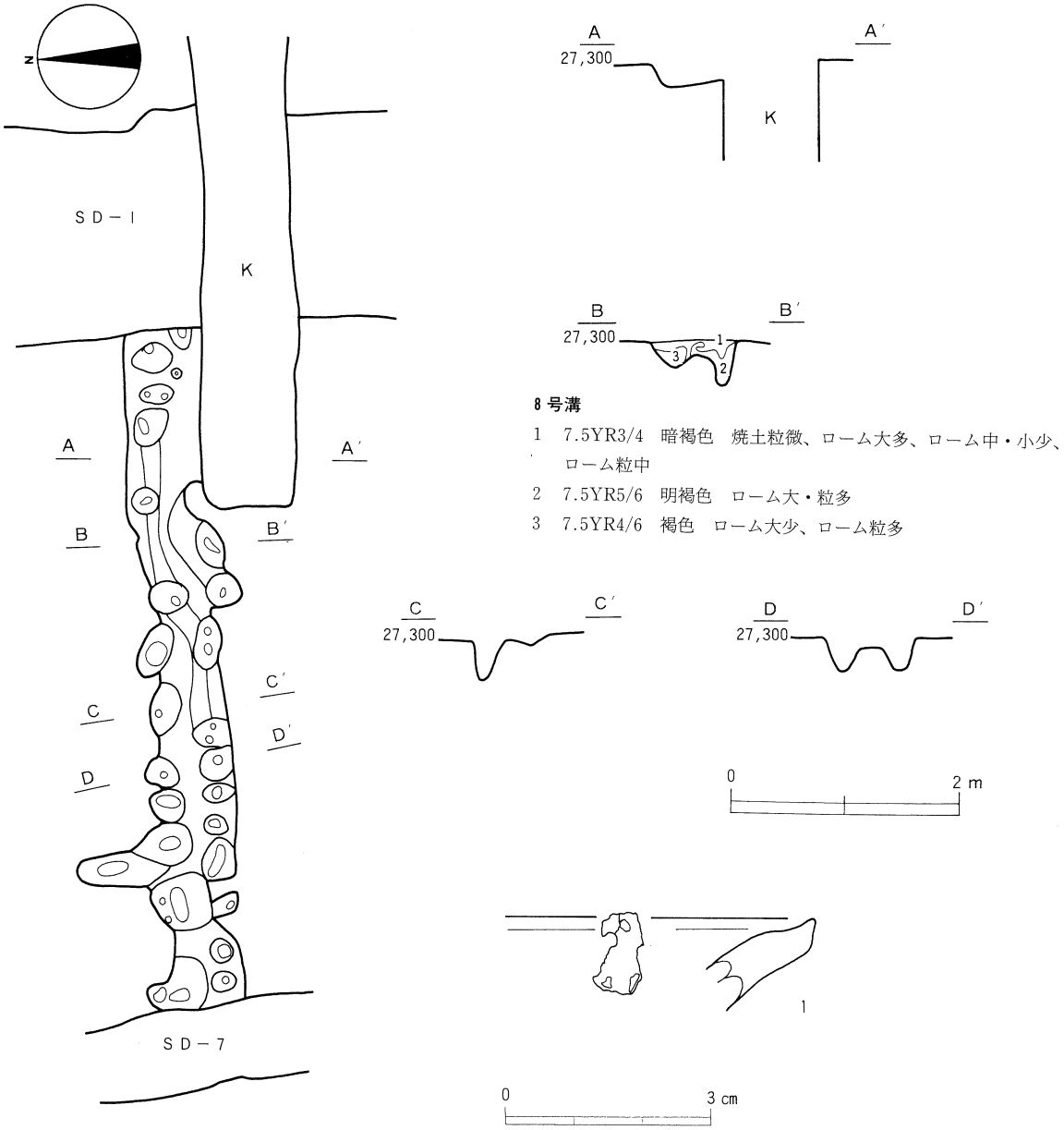
重複関係　本跡は、1号溝と7号溝と切り合い関係にあるが、新旧関係は不明である。

規模と形状　全長5.8m、上幅60cm、下幅8～4cmである。溝全体に後世の攪乱と思われる複数のピットがあり、旧状を留めていない。

覆土　攪乱が多く、正確に層位を把握できなかった。

遺物　覆土中から常滑細片（1）が1点出土しているが、本跡に確実に伴うものではない。

所見　本跡の時期・機能は不明である。



第35図　8号溝検出状況・出土遺物

8号溝出土遺物観察表

No.	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	陶器 壺甕類	C (1.3)	覆土中 5%	良好	黒色粒微量	オリーブ黄色 灰黄色	外反し、面取られる口縁部片。外面には焼成時の付着物（自然降灰？）あり。	常滑窯産 中世

9号溝　〔第37図〕

位置　調査区域南端　4A－15区

方向　ほぼ東西に延びる。

重複関係　本跡は、1・7号溝と切り合い関係にある。7号溝は本跡より新しいが、1号溝との関係は不明である。

規模と形状　全長11.6m、上幅48～116cm、下幅16～28cmである。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈している。溝の西端に攪乱があり、不明確なまま途切れる。

覆土　始めにロームを主体とした土が堆積し、以後ロームを含む褐色土が均一に堆積する。

遺物　出土していない。

所見　本跡の時期・機能は不明である。

1号掘立柱建物址　〔第36図〕

位置　調査区中央部　3W－8・9、3X～3Z－7・9、4A－7区

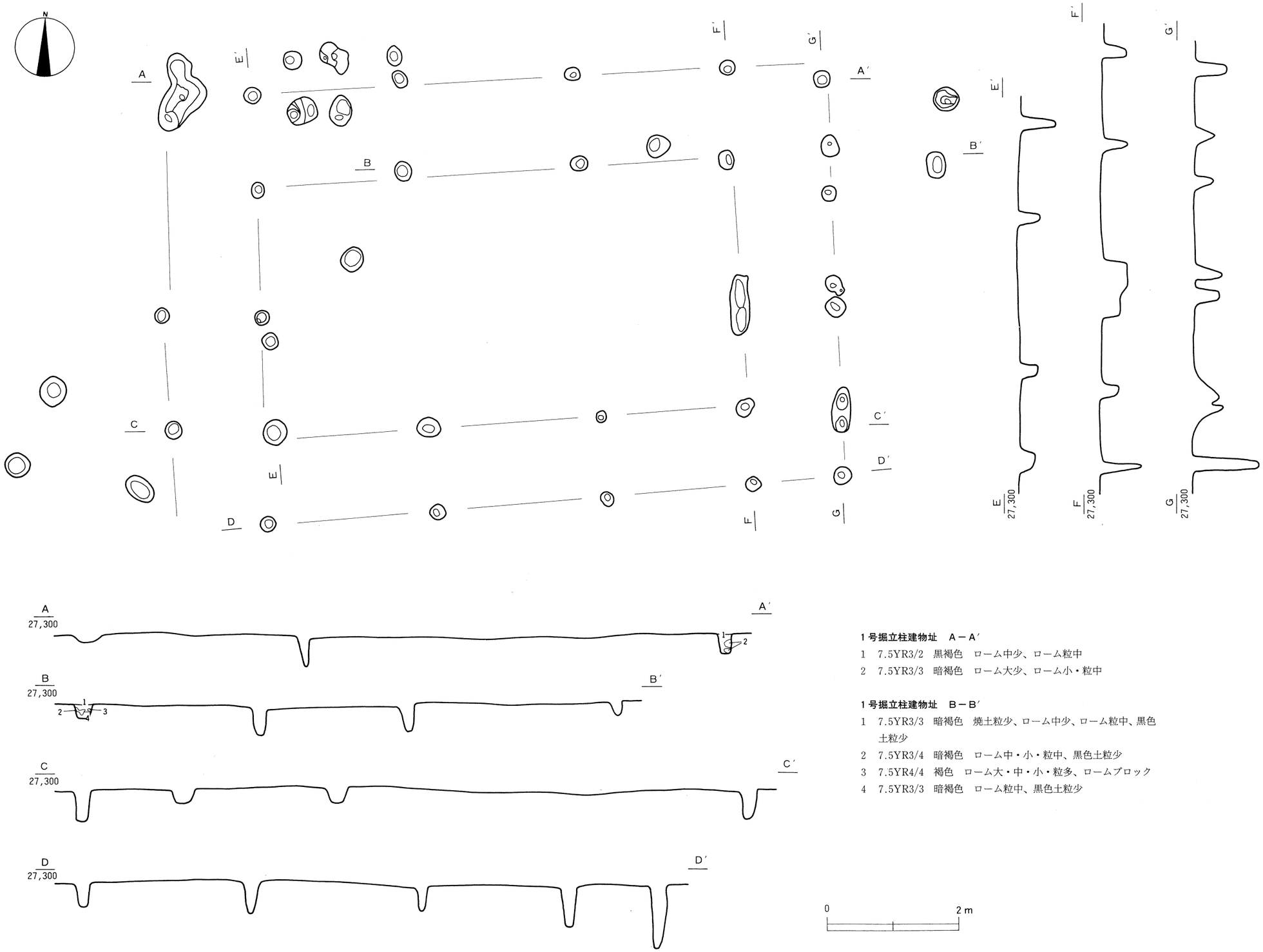
主軸方位　N－5°－W

規模と形状　柱穴数は、約27ケ所を数え、東西5間（約10.1m）、南北4間（約6.4m）の建物である。柱穴の掘り方は径20～36cmの円形で、深さは9～64cmである。その他の柱穴は径20～36cmの楕円形で、深さは8～38cmで本跡に伴う可能性がある。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。

覆土　褐色を基調とする土でロームを含む。柱痕や抜き取り痕は確認できない。

遺物　柱穴内からは出土していない。

所見　柱穴内の出土遺物が無いため、遺構の正確な帰属時期は不明である。表採遺物の中に近世以降の陶磁器が散見されることから、消極的な根拠だが近世・近代の建物の可能性が指摘できる。



1号掘立柱建物址　A－A′

1　7.5YR3/2　黒褐色　ローム中少、ローム粒中

2　7.5YR3/3　暗褐色　ローム大少、ローム小・粒中

1号掘立柱建物址　B－B′

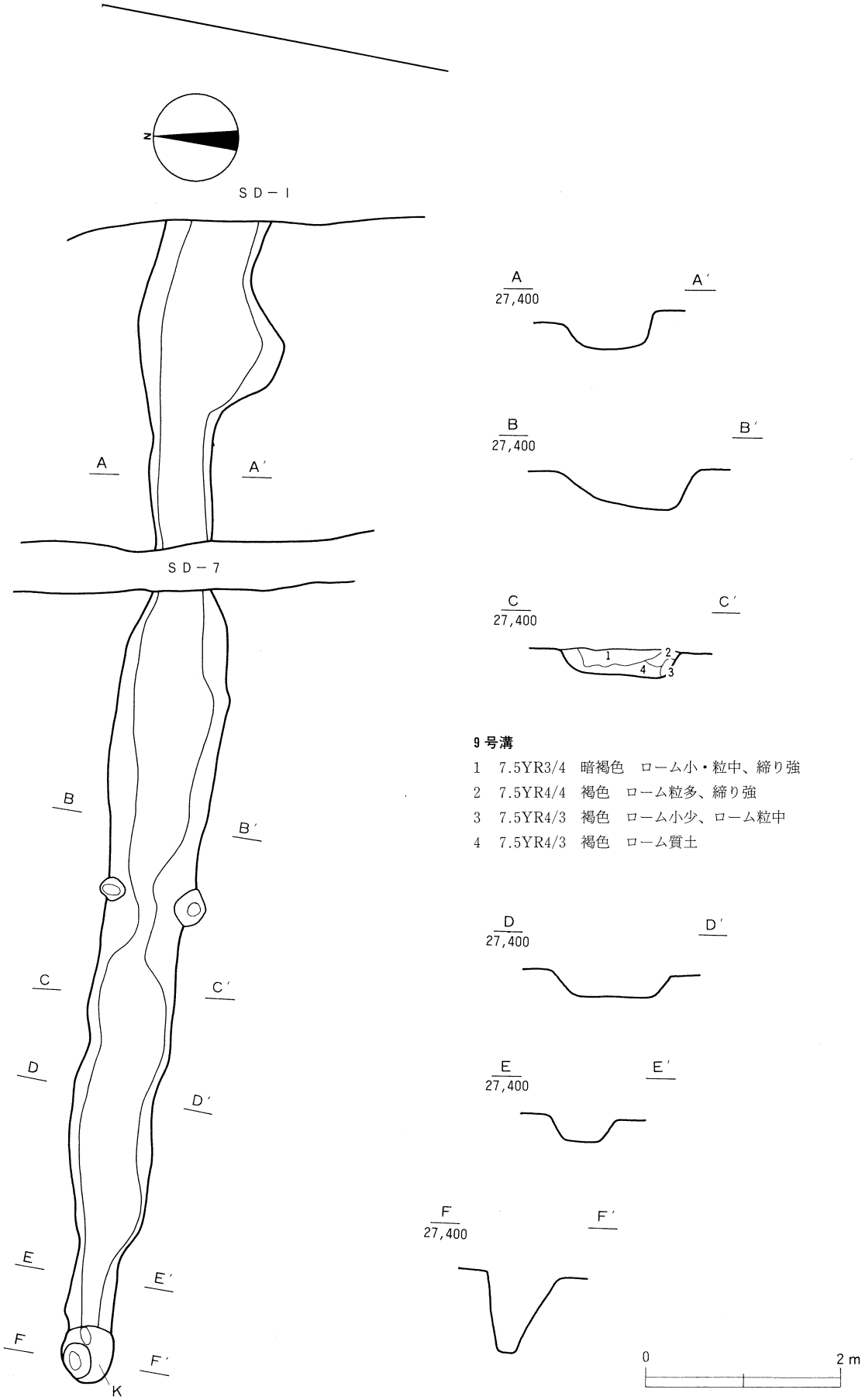
1　7.5YR3/3　暗褐色　焼土粒少、ローム中少、ローム粒中、黒色土粒少

2　7.5YR3/4　暗褐色　ローム中・小・粒中、黒色土粒少

3　7.5YR4/4　褐色　ローム大・中・小・粒多、ロームブロック

4　7.5YR3/3　暗褐色　ローム粒中、黒色土粒少

第36図　1号掘立柱建物址検出状況



9号溝

1　7.5YR3/4　暗褐色　ローム小・粒中、締り強
2　7.5YR4/4　褐色　ローム粒多、締り強
3　7.5YR4/3　褐色　ローム小少、ローム粒中
4　7.5YR4/3　褐色　ローム質土

第37図　9号溝検出状況

第２節　第２次調査区の遺構と遺物

第２次調査区では、土坑６基、溝３条、古墳１基が発見された。以下遺構ごとに所見を述べる。

10号土坑　〔第38図〕

位置　３Ｎ－（－11）区を中心とする。

長軸方向　Ｎ－38°－Ｗ

重複関係　遺構確認面からは重複関係はみられなかったが、土層断面から本跡の覆土を10号溝が掘り込んでいるため、本跡の方が古い。

規模と形状　長径2.3ｍ、短径1.1ｍの長方形を呈し、深さ72～87cmである。

壁面　緩やかに外傾して立ち上がっている。西壁はやや内傾して立ち上がり、やや外反する。

底面　不定形を呈し、ほぼ平坦である。

覆土　自然堆積である。

遺物　土師器片（１）が１点、覆土中から出土した。

所見　本坑は、古墳時代以降の土坑であるが、具体的な時期・性格は不明である。

10号土坑出土遺物観察表

No.	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師器 壺甕類	C(4.3)	覆土中 ５％	普通	石英微量	明赤褐色	体部片。外面はハケメをナデ消す。内面はヘラナデ。	古墳時代

11号土坑　〔第38図〕

位置　調査区西側　３Ｅ・３Ｆ－（－８）区

長軸方向　Ｎ－71°－Ｗ

重複関係　遺構確認時には13号溝と重複関係は不明だったが、出土遺物から本跡の方が古い。

規模と形状　平面形は長径1.5ｍ、短径1.1ｍの楕円形を呈し、深さ75～77cmの円筒形の土坑である。

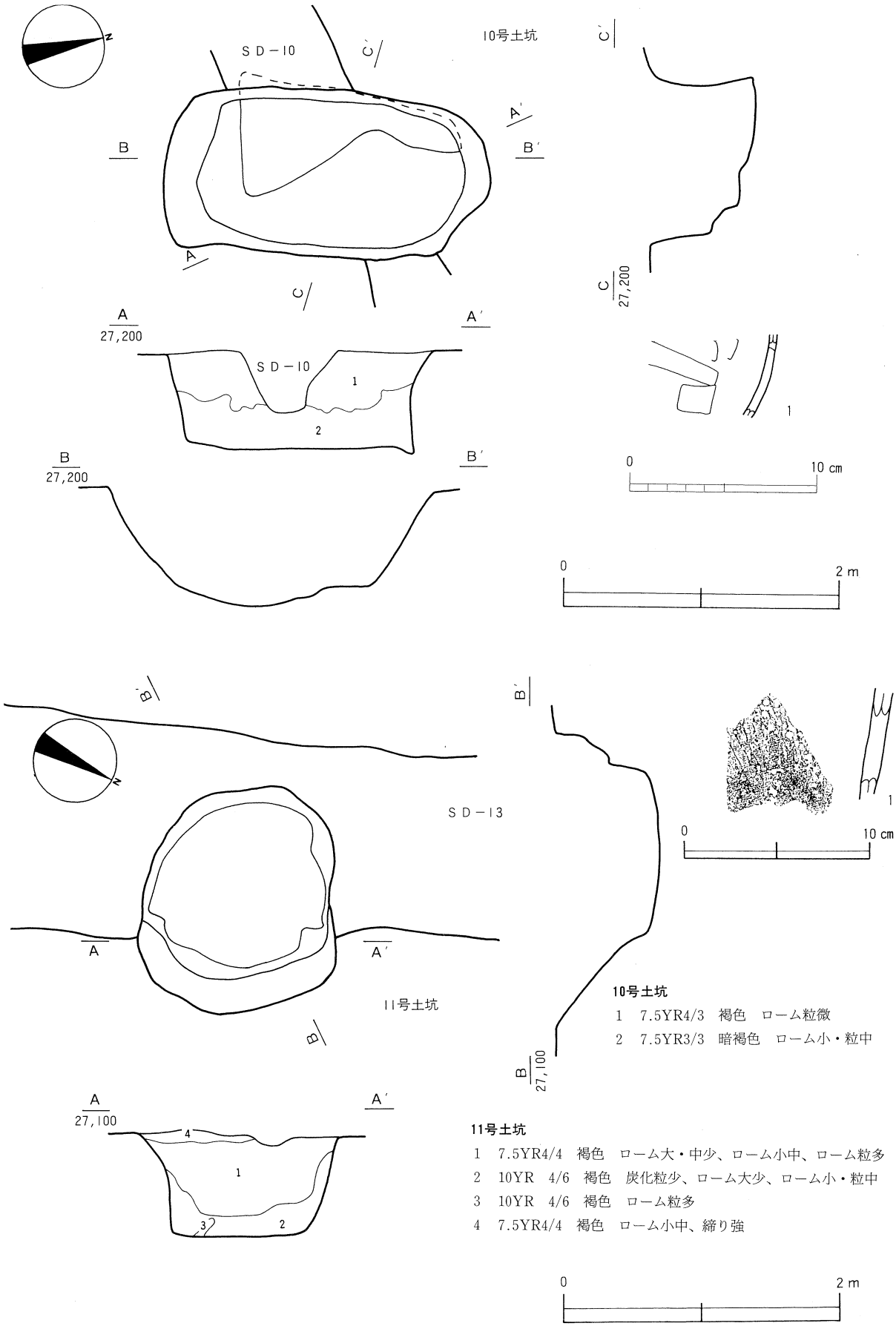
壁面　西壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、13号溝に掘り込まれているため、本来の壁面が失われている。東壁はほぼ垂直に立ち上がり、中位で段をなしている。

底面　楕円形を呈し、平坦である。

覆土　褐色相の自然堆積である。

遺物　覆土中から縄文土器（１）が１点出土している。器面が荒れており判然としないが地文単節ＲＬで、数条の沈線が垂下し、下半は無文となる。内面に炭化物が付着していた。加曽利ＥⅢ式に相当しよう。

所見　本坑は、縄文時代中期後半の可能性がある。性格は不明。



第38図　10号・11号土坑検出状況

12号土坑　〔第39図〕

位置　調査区北端　3H－（－21）区

長軸方向　N－23°－W

重複関係　遺構確認面からは重複関係はみられなかったが、土層断面から2層を主体とする穴と、焼土（1層）が散って、水平堆積（3層）を含む穴の2つに分かれる可能性がある。

規模と形状　長径2.5m、短径1.3mで、深さは66～90cmである。底面は2ケ所の落ち込みをもつ。

壁面　西壁は外傾して、東壁は垂直に立ち上がっている。

底面　2ケ所とも楕円形を呈する。

覆土　上層で焼土（1層）がみられるが、本跡に直接伴うものではない。

遺物　出土していない。

所見　本跡に伴う出土遺物がなく、時期・性格は不明である。

13号土坑　〔第39図〕

位置　調査区東端　3L－（－19）区を中心とする。

規模と形状　長径1.5m、短径1.3mの不定形を呈し、深さ77～94cmである。

壁面　ほぼ垂直に立ち上がり、中位で段をなしている。

底面　やや傾斜をもち、不定形である。

遺物　出土していない。

所見　本跡は遺構に伴う出土遺物がなく、時期・性格は不明である。

14号土坑　〔第41図〕

位置　調査区南端　3D－（－6）区

長軸方向　N－61°－E

規模と形状　長径2.3m、短径1.4mの長楕円形で、深さ1.16～1.23cmである。

壁面　垂直に立ち上がり、中位で大きく外傾する。

底面　長楕円形を呈し、ほぼ平坦である。

遺物　出土していない。

所見　本跡に伴う出土遺物がなく、確実な時期は不明である。土坑の形態から類推して、縄文時代の陥し穴の可能性がある。

15号土坑　〔第40・41図〕

位置　2号墳の内区に掘り込まれる。　3E－（－26）・（－27）区

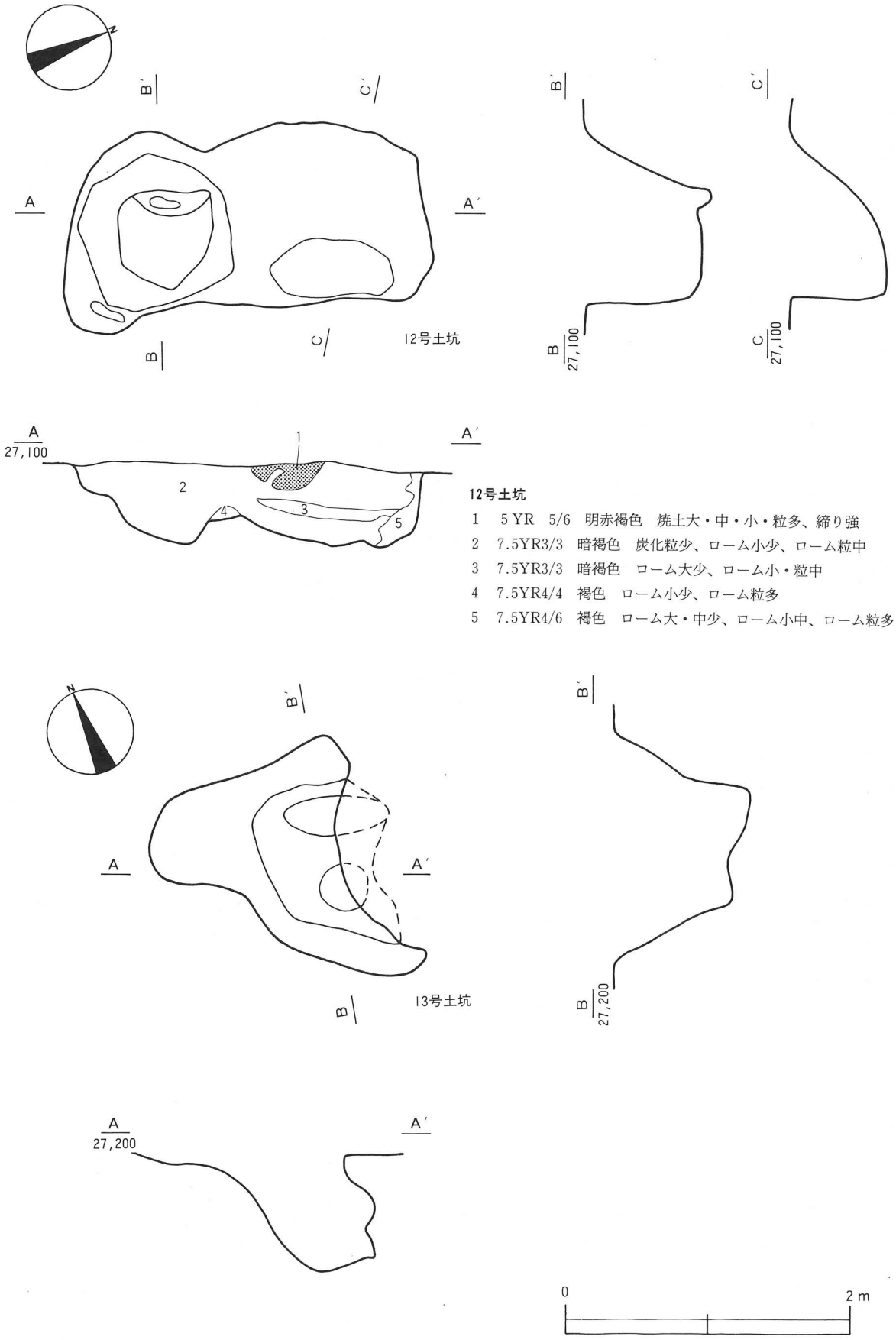
長軸方向　N－96.5°－E

規模と形状　長径98cm、短径74cm、深さ44～20cmの楕円形を呈している。

壁面　壁の上面は北壁を除いて後世の攪乱を受ける。やや外傾して立ち上がる。

底面　楕円形を呈し、平坦である。

遺物　覆土中から1～4の寛永通宝が4枚出土した。1・3・4はいわゆる新寛永で、1697～1747年



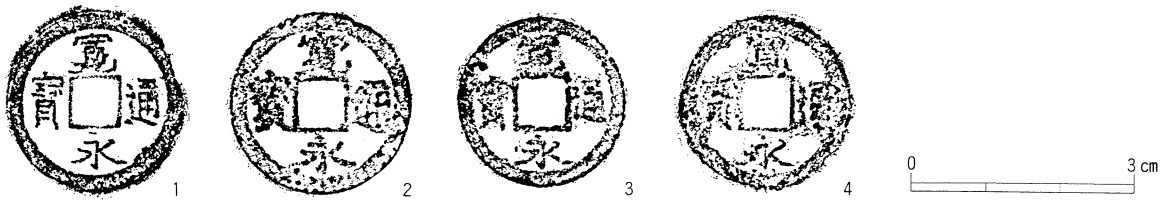
第39図　12号・13号土坑検出状況

と1767～1781年の間鋳造された。２は「寶」の字体から古寛永と判ぜられる。1636～1659年の間鋳造された。この他に骨粉などはみられなかった。

所見　寛永通宝は、恐らく六道銭として供えられたものと思われる。土坑の形状が円筒形で、銭貨が複数枚出土したことから、当遺構は近世の墓壙と考えられる。時期的には、17世紀末～18世紀代に営まれたものだろう。

15号土坑出土遺物観察表

No.	銭貨銘	分　類	外径（cm）	内径（cm）	量目（g）	備　　考
1	寛永通寶	新寛永	2.45	0.6	2.9	鋳造期間1697～1747、1767～1781年
2	寛永通寶	古寛永	2.42	0.61	3.5	鋳造期間1636～1659年
3	寛永通寶	新寛永	2.28	0.63	2.2	鋳造期間1697～1747、1767～1781年
4	寛永通寶	新寛永	2.29	0.6	3.7	鋳造期間1697～1747、1767～1781年



第40図　15号土坑出土遺物

10号溝　〔第42～44図〕

位置　調査区中央　３Ｆ・３Ｇ－（－13）～(－18)、３Ｈ～３Ｐ－（－12)、３Ｈ・３Ｉ－（－13)、３Ｏ～３Ｒ－（－11）区

方向　調査区東側からほぼ西方向に進み、３Ｇ－（－13）区で北へ直角に曲がり直線的に延びる。

重複関係　遺構確認面からは重複関係はみられなかったが、土層断面から10号土坑の覆土を掘り込んで構築されているため、本跡の方が新しい。３Ｐ－（－11）区で11号溝を掘り込んでいる。

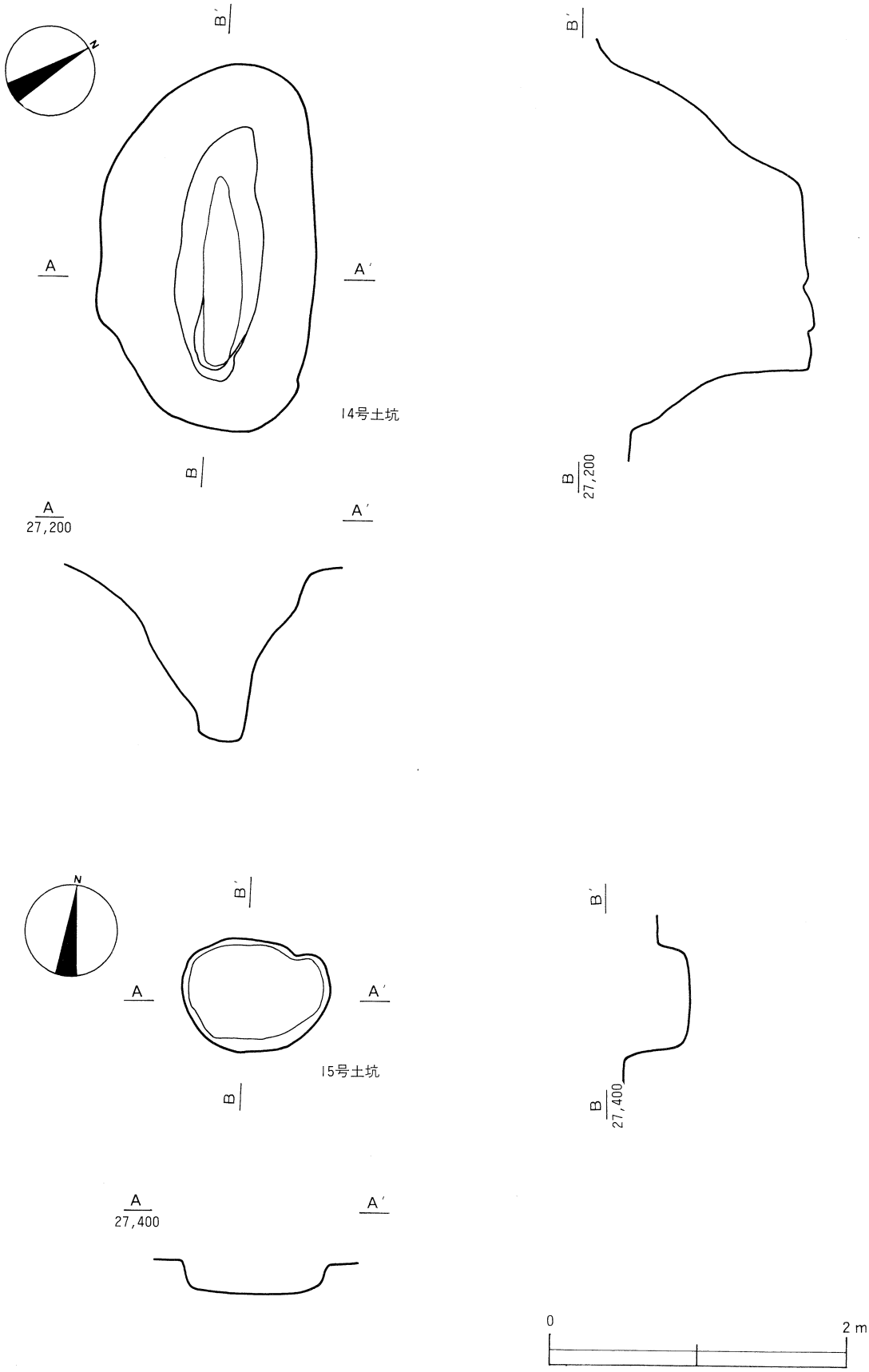
規模と形状　全長約67ｍでＬ字状を呈している。掘り方は上幅60～120cm、下幅16～46cm、深さ8～49cmで、断面観は東側でＵ字形、西側で箱掘形を示す。

覆土　下層はロームを多く含んでおり、人為的な埋土の可能性があるが、黒・暗褐色を主体とする上層は自然堆積であろう。

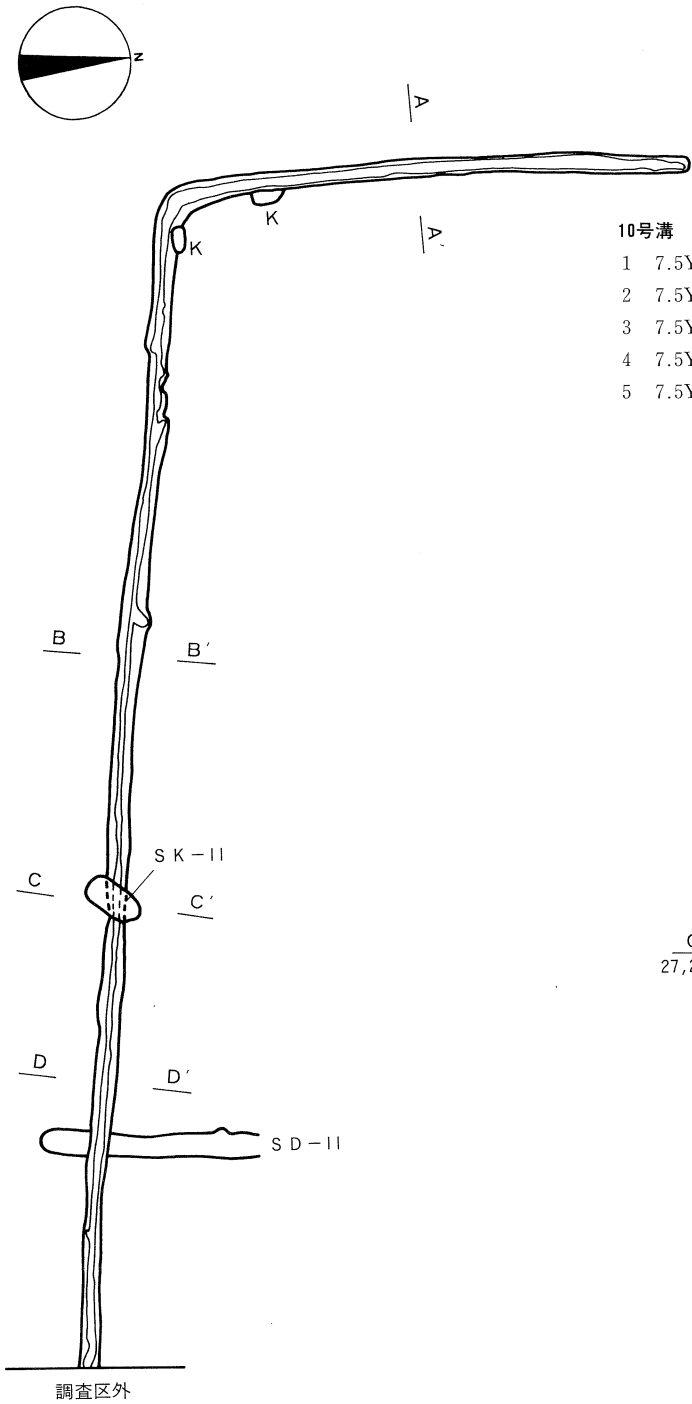
遺物　土師器（古墳時代）から、染付（近世）までの土器・陶磁器が出土したが、細片で中～上層からの出土であり、本跡と直接の関わりをもたない。また、溝の東側では馬の臼歯が数点出土した。

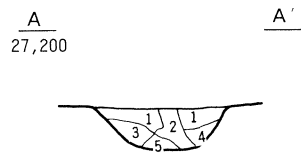
また、覆土中からは砥石片２点が出土した。14は流紋岩質軽石を使用したもので、一端に穿孔を施している。表面側は凸面状で、裏面は平坦になり、更に樋状砥面が３条連続している。下端面にも凸面状砥面と樋状砥面１条が複合している。穿孔部分で折損している。15は棒状砥石で、４面を砥面として使用している。両端は折損している。

所見　本跡の正確な時期は不明だが、少なくとも近世・近代以降のものであろう。馬の臼歯の残り具合から遡っても100～200年程度と考える。溝の具体的な機能については不明である。



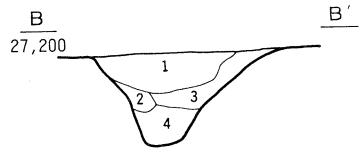
第41図　14号・15号土坑検出状況





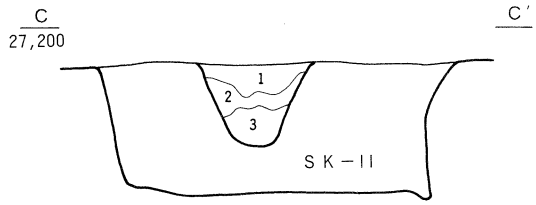
10号溝　A－A′

1　7.5YR3/3　暗褐色　ローム小・粒少
2　7.5YR3/4　暗褐色　ローム小少、ローム粒中
3　7.5YR3/4　暗褐色　ローム大微、ローム中少
4　7.5YR4/4　褐色　ローム中中
5　7.5YR5/6　明褐色　ローム大・中・小・粒多、ローム質土



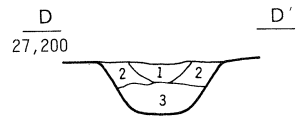
10号溝　B－B′

1　7.5YR3/2　黒褐色　ローム小・粒微
2　7.5YR4/3　褐色　ローム粒少
3　7.5YR3/4　暗褐色　ローム小少、ローム粒中
4　7.5YR4/4　褐色　ローム中少、ローム小・粒中



10号溝　C－C′

1　7.5YR3/2　黒褐色　ローム粒微
2　7.5YR4/6　褐色　ローム小少
3　7.5YR4/4　褐色　ローム中多、ローム小中

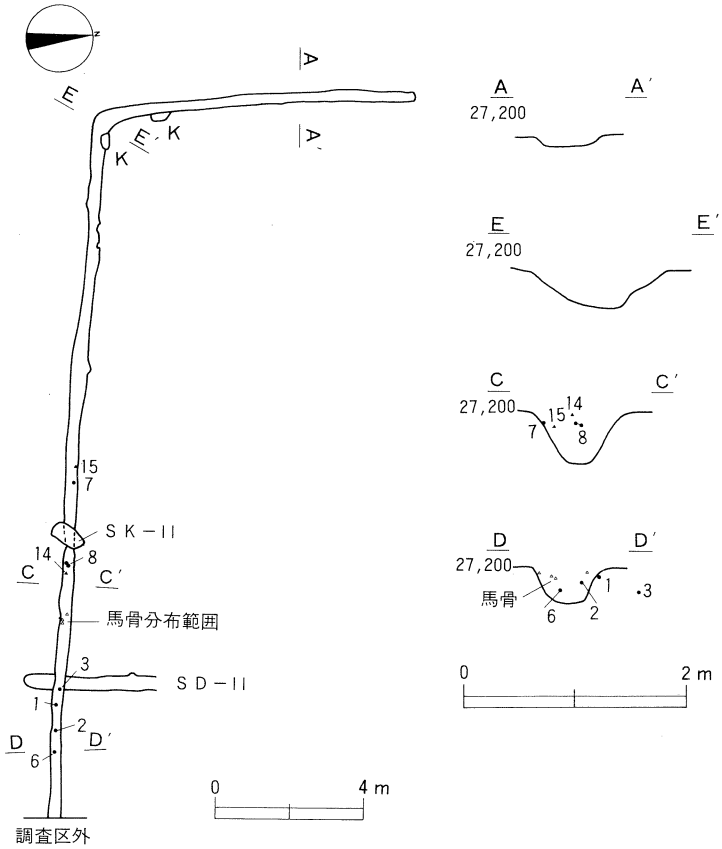


10号溝　D－D′

1　7.5YR2/3　極暗褐色
2　7.5YR4/4　褐色　ローム粒微
3　7.5YR3/4　暗褐色　ローム中中、ローム小少

0　2 m

第42図　10号溝検出状況

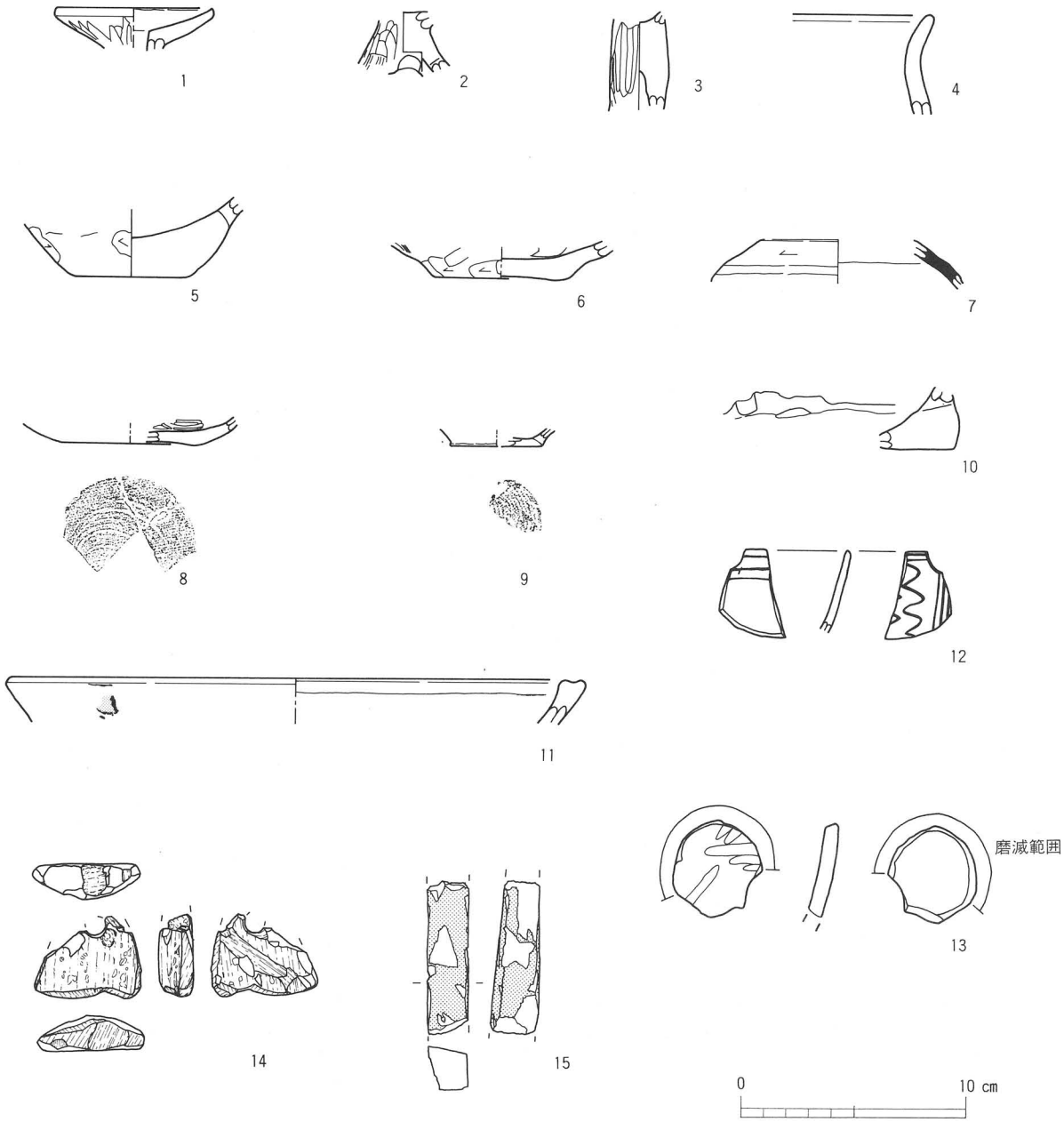


第43図　10号溝遺物出土状況

10号溝出土遺物観察表

No.	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師器 器台	A〔7.1〕 C (1.8)	覆土上層 50%	良好	長石・石英 微量	橙色	内底面中央に穿孔された受部片。緩やかに立上り、端部は直立。内外面ヘラミガキ。	古墳時代
2	土師器 高杯	C (1.8)	覆土上層 80%	普通	石英少量	にぶい橙色	裾部片。3ケ所穿孔。外面は縦位のヘラミガキ。	古墳時代
3	土師器 高杯	C (4.2)	覆土上層 80%	普通	石英少量	にぶい黄橙色	直立する裾部片。外面は縦位のヘラミガキ。	古墳時代
4	土師器 壺甕類	C (3.0)	覆土中 5%	普通	長石・雲母 微量	にぶい黄褐色	くの字に外反する口縁部片。外面赤彩。内外面ナデ調整。	古墳時代
5	土師器 壺甕類	B 3.8 C (2.0)	覆土中 80%	普通	長石少量 雲母微量	にぶい褐色	斜位に立ち上がる平底の底部片。内底面ヘラナデ。体部ナデ。	古墳時代
6	土師器 壺甕類	B〔6.0〕 C (1.4)	覆土中層 50%	普通	長石微量	橙色	平底の底部片。内外底面はヘラナデ調整。体部底面よりは横位のナデが連続する。	古墳時代
7	須恵器 蓋	C (1.85)	覆土上層 10%	良好	長石少量	黄灰色	ロクロ成形の体部。体部外面はヘラケズリ。内面はナデ。	
8	土師器 内黒杯	B〔6.2〕 C (1.3)	覆土上層 60%	良好	良土	にぶい黄橙色	底部は回転糸切り後に軽微なナデ。内底面はヘラミガキの上、黒色処理。	奈良・平安時代
9	土師質土器　小皿	B〔4.1〕 C (0.75)	覆土中 10%	普通	雲母少量 赤色粒微量	にぶい赤褐色	底部回転糸切り痕。	中近世
10	土師質 土器 火舎？	C (1.6)	覆土中 5%	普通	長石・雲母・石英・赤色粒多量	にぶい赤褐色	平底で直立気味に立ち上がる底部片。体部に1ケ所穿孔あり。	中近世
11	土師質 土器 内耳鍋	A〔26.0〕 C (2.95)	覆土中 5%	普通	長石・石英 微量	にぶい褐色	口唇部上端面に1条沈線をもつ口縁部片。外面に煤付着。体部側は内側にすぼまる。	中世

12	染付 碗	C (3.7)	覆土中 5％	良好	精良	灰白色	外面は条線の区画内に縦位の波状文を、内面は口唇部寄りに３条の条線を配する。	肥前系 近世
13	土製品	長さ4.0 幅 3.8 厚さ0.6	覆土中	普通	石英多量 長石少量	にぶい黄橙色	片面にヘラミガキ痕あり。破面が円周状に磨滅し、円盤状を呈する。	土師器の転用か



第44図　10号溝出土遺物

10号溝出土石器観察表

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　材	備　　考
14	砥　石	3.76	4.65	1.53	(3.7)	流紋岩質軽石	穿孔痕１ケ所、断面U字状溝３ケ所が残る。
15	砥　石	(6.72)	1.87	2.09	(42.0)	凝灰岩	使用面４ケ所。両端を折損。一面に刀傷あり。

11号溝　〔第45・46図〕

位置　調査区東側　３Ｐ－（－11）～(－15）区

方向　３Ｐ－（－11）区から北に延び、調査区外に続く。

重複関係　３Ｐ－（－11）区で10号溝に掘り込まれているので、本跡の方が古い。

規模と形状　全長約15ｍで、掘り方は上幅88～108cm、下幅60～70cm、深さ16～20cmで箱掘形である。

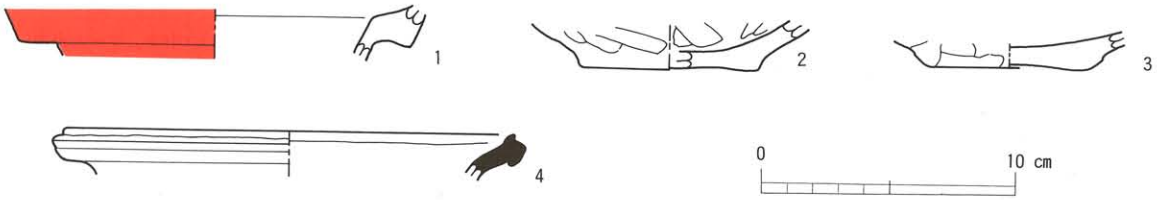
覆土　褐色または暗褐色相の土だが、ロームの含度が南北で異なり自然堆積とは断じえない。

遺物　土師器（古墳）や須恵器（奈良・平安）が下層から出土しているが、少量で細片でもあり、確実に本跡と伴うかは不明である。

所見　本跡の時代・機能については不明である。但しながら方向から判断して、本跡は北西原遺跡３次調査（平成７年度調査）の10号溝と連なるものである。

11号溝出土遺物観察表

No.	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師器 壺	C（1.8）	覆土上層 15%	普通	長石・石英 多量	明赤褐色 にぶい褐色	段を生じ、斜め上方に開きながら減厚する口縁部片。内外面ナデ調整。外面赤彩。	古墳時代
2	土師器 壺甕類	B〔7.0〕 C（1.7）	覆土下層 30%	普通	長石多量 石英微量	にぶい黄橙色	ヘラ調整の平底底部片。内底面・体部はヘラナデ。	古墳時代
3	土師器 壺甕類	B〔6.6〕 C（1.0）	覆土上層 15%	普通	長石多量 石英少量	にぶい赤褐色	ナデ調整の平底底部片。体部ヘラ調整。	古墳時代
4	須恵器 甕または甑	A〔18.0〕 C（1.8）	覆土下層 ５%	良好	長石少量 雲母・石英 微量	灰黄色 灰黄褐色	口唇部上端と下端に突起を有する口縁部片。ヨコナデ成形。	奈良・平安時代



第45図　11号溝出土遺物

13号溝　〔第47図〕

位置　調査区西側　３Ｆ－（－６）～(－８)、３Ｄ－（－11）～(－14)、３Ｃ－（－14）～(－17)、３Ｅ－（－７）～(－12）区

方向　調査区南側の３Ｆ－（－６）区の落ち込みから北北西方向に直線的に延びている。

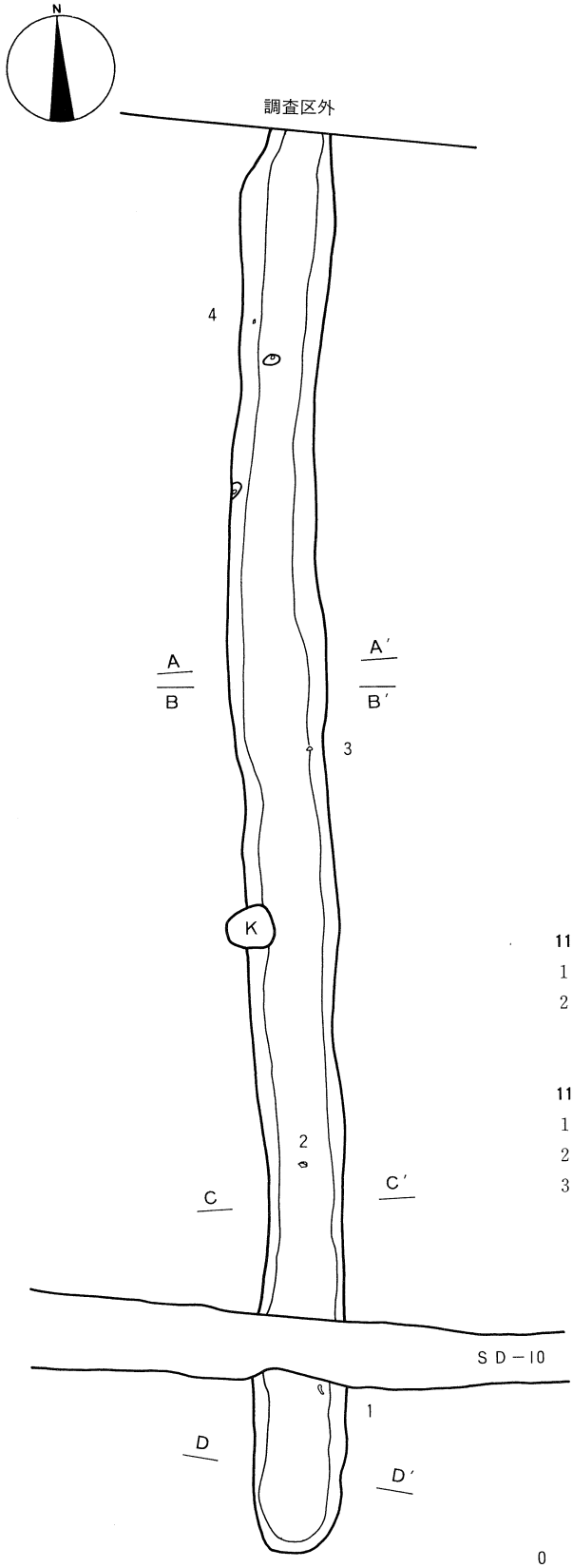
重複関係　遺構確認面からは重複関係はみられなかったが、11号土坑の出土遺物との比較から本跡の方が新しい。

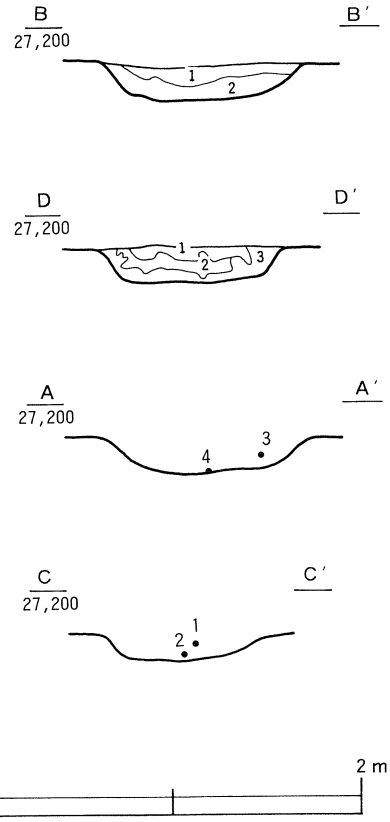
規模と形状　全長約44ｍで、掘り方断面は上幅101～120cm、下幅55～64cm、深さ18～33cmで逆台形である。南端に径1.2ｍ、深さ45cmの円形の落ち込みがある。

覆土　ローム粒を多く含む暗褐色相の埋土を中心とする自然堆積。

遺物　出土していない。

所見　溝の時期、具体的な役割は不明である。





11号溝　B－B′

1　7.5YR3/3　暗褐色　ローム粒中

2　7.5YR4/4　褐色　焼土粒少、ローム大・中少、ローム小多、ローム粒中

11号溝　D－D′

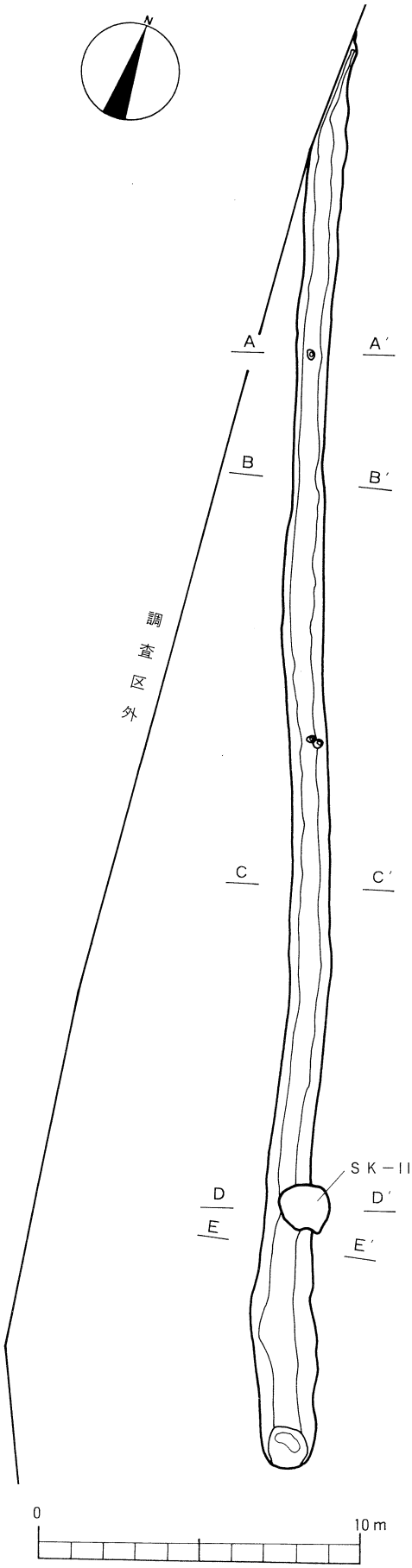
1　7.5YR3/2　黒褐色

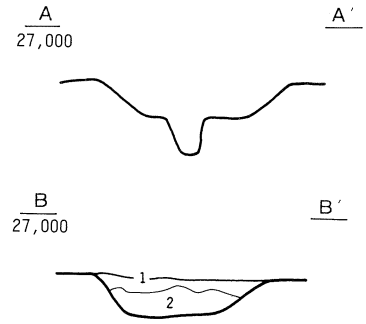
2　7.5YR3/4　暗褐色　ローム質土

3　7.5YR4/3　褐色

0　4 m

第46図　11号溝検出状況

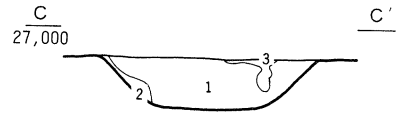




13号溝　B－B′

1　7.5YR3/4　暗褐色　ローム中少、ローム小中

2　7.5YR4/4　褐色　ローム中・小少、ローム粒多

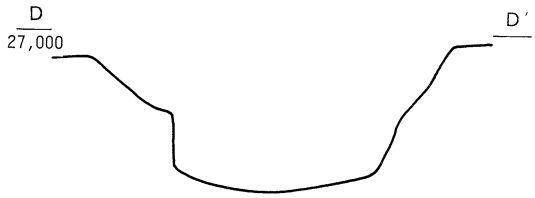


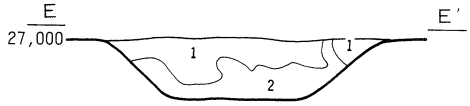
13号溝　C－C′

1　7.5YR3/3　暗褐色　ローム大・中少、ローム小中、ローム粒多

2　7.5YR5/6　明褐色　ローム大・中・小・粒多

3　7.5YR4/6　褐色　ローム大・中・小・粒多、ローム質土





13号溝　E－E′

1　7.5YR3/3　暗褐色　ローム大・粒少、ローム中・小中

2　7.5YR3/4　暗褐色　ローム中中、ローム小・粒多

第47図　13号溝検出状況

2号墳　〔第48・49図〕

位置　本墳は、調査区域北側の３Ｄ－（－26）区を中心に確認された。その占地は、標高約27ｍの台地中央部に位置している。北側は北西原遺跡と接しており、本墳の北側は、北西原遺跡２次調査時の２号墳として既に調査済である。

主軸方位　Ｎ－18°－Ｗ

重複関係　15号土坑が本墳を掘り込んでおり、本墳の方が古い。

墳丘　調査時において当区域の現況は平坦な畑であり、墳丘は削平されていた。

周溝　重機による表土除去で遺構確認面が明らかになる過程で、本墳の周溝及び主体部の掘り方は、耕作と覚しき攪乱を受けていた。特に周溝の西側と東側は、底面まで攪乱を受けていたため、遺存状況は劣悪であった。

以上の状況のため一部推定値を含むが、周溝の形状は浅い隅丸の逆台形状であり、調査済の北側を含めると方形に廻っている。規模は外法で長辺（14.9）ｍ、短辺（5.7）ｍ～7.5ｍ、下幅85cm、上幅175cm、深さ13cm～26cmである。断面形は周溝東側で皿形、南側では不明瞭な逆台形を呈している。周溝底面は、南側と西側は特に攪乱と思われる小孔が多く、凹凸している。

埋葬施設　埋葬施設も北側３分の１程の調査が既に終了している。規模は、周溝同様攪乱が著しいため推定だが、上端で長さ（5.7）ｍ、幅2.05ｍである。なお、この数値は調査済の区域を含む。

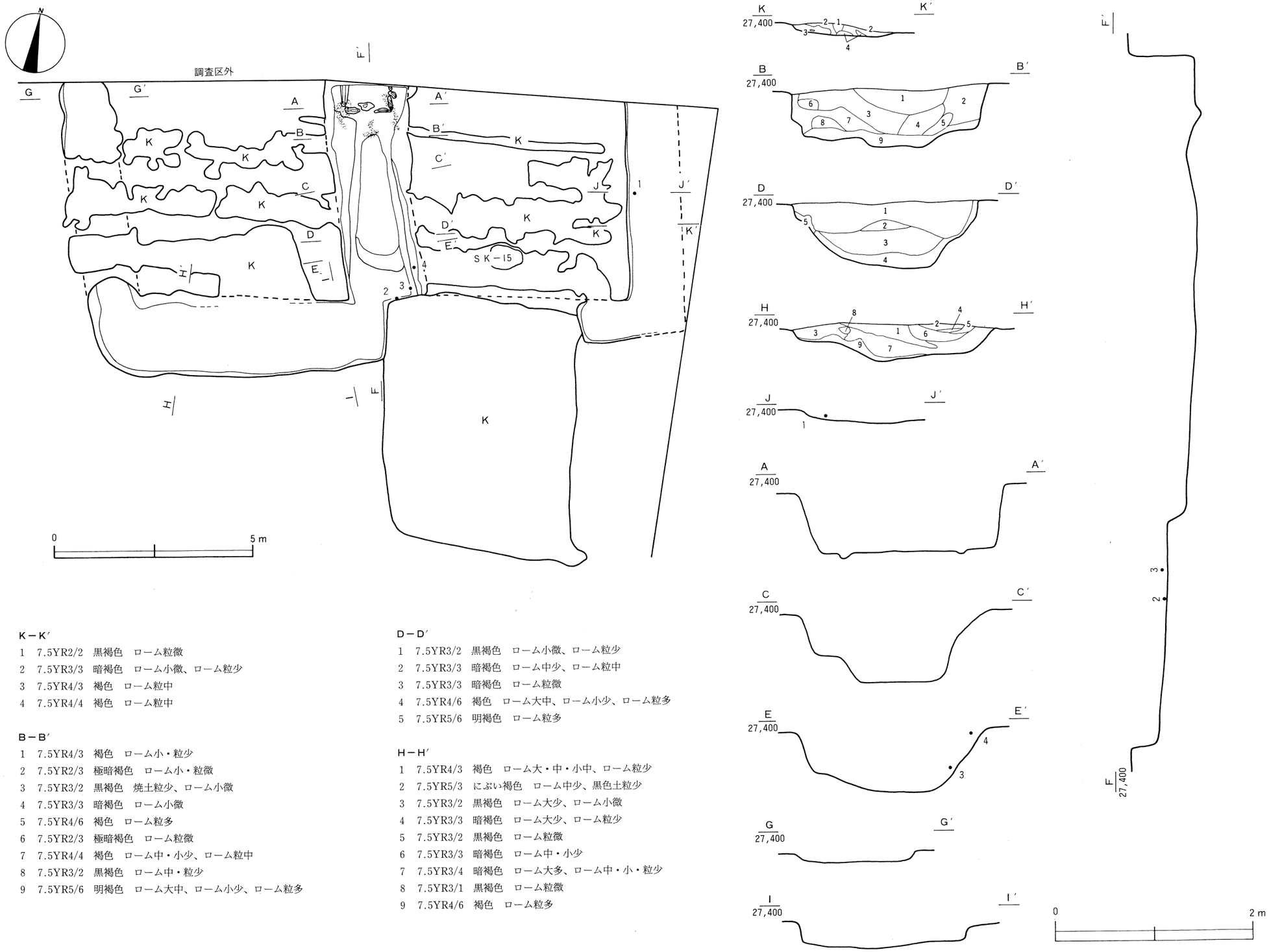
覆土　周溝・墓道とも、不均一な堆積状況で攪乱・破壊が著しい。

遺物　周溝・墓道内の覆土から若干の土師器・須恵器片が出土した。墓道の土師器（１・２）は底面寄りから出土しているが、古墳時代前期の遺物であり明らかに攪乱などによる混入遺物である。須恵器片（５・６）は奈良・平安期のものだが、墓に伴う可能性は低い。

所見　周溝・墓道の形状から、当遺構は終末期（７～８世紀代）の方墳であると判じられる。墓道・周溝は攪乱・破壊が著しい。

2号墳出土遺物観察表

No.	器種 器形	法　量	出土位置 残存率	焼成	胎　土	色　調	器形・技法の特徴	備　　考
1	土師器 甕	A〔18.7〕 C（2.65）	覆土下層 ５％	普通	長石少量 石英微量	灰褐色	直立気味に立ち上がる口縁部片。外面は縦位、内面は横位のハケメ。口唇部ヨコナデ。	古墳時代前期
2	土師器 甕	C（2.4）	覆土中層 ５％	普通	長石少量 石英微量	橙色	くの字状に屈曲する頸部片。外面の口縁部寄りはハケメ、体部寄りはヨコナデ。内面体部はハケメ。口縁部寄りはヨコナデ。	古墳時代前期
3	土師器 杯	A〔13.2〕 C（1.8）	覆土中層 ５％	普通	良土	にぶい橙色	斜位から直立気味に立ち上がる口縁部片。体部外面はミガキ。口縁部内面はヨコナデ。	古墳時代
4	土師器 壺甕類	B　5.9 C（1.6）	覆土中層 90％	普通	長石・雲母・石英微量	にぶい橙色	中央がやや窪む平底の底部片。外面はヘラによるヨコナデ。内面はヘラミガキ。	
5	須恵器 壺甕類	C（3.6）	覆土中 ５％	良好	長石・雲母微量	暗灰黄色	外面に条線の叩き目をもつ胴部片。	奈良・平安時代
6	須恵器 杯	B〔6.3〕 C　0.9	覆土中 ５％	良好	雲母少量 石英・長石微量	黄灰色	平底の底部片。調整不明瞭。	奈良・平安時代



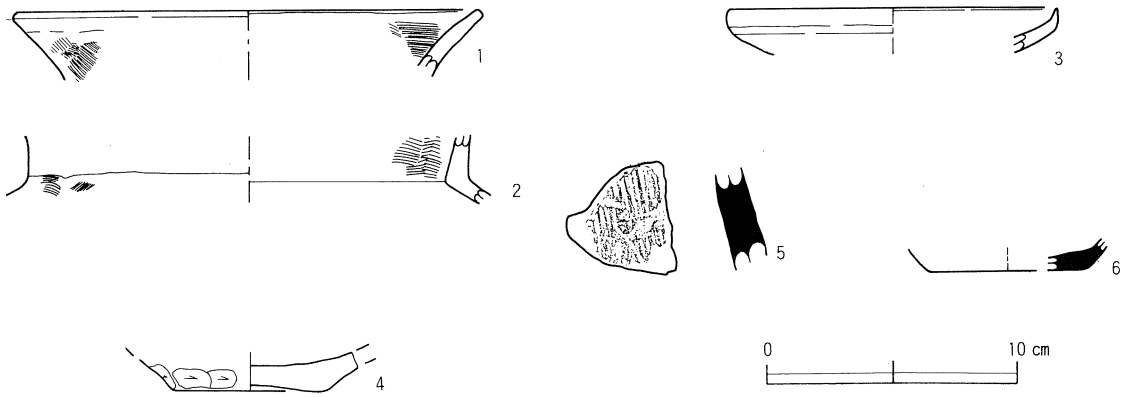
K－K′
1　7.5YR2/2　黒褐色　ローム粒微
2　7.5YR3/3　暗褐色　ローム小微、ローム粒少
3　7.5YR4/3　褐色　ローム粒中
4　7.5YR4/4　褐色　ローム粒中

B－B′
1　7.5YR4/3　褐色　ローム小・粒少
2　7.5YR2/3　極暗褐色　ローム小・粒微
3　7.5YR3/2　黒褐色　焼土粒少、ローム小微
4　7.5YR3/3　暗褐色　ローム小微
5　7.5YR4/6　褐色　ローム粒多
6　7.5YR2/3　極暗褐色　ローム粒微
7　7.5YR4/4　褐色　ローム中・小少、ローム粒中
8　7.5YR3/2　黒褐色　ローム中・粒少
9　7.5YR5/6　明褐色　ローム大中、ローム小少、ローム粒多

D－D′
1　7.5YR3/2　黒褐色　ローム小微、ローム粒少
2　7.5YR3/3　暗褐色　ローム中少、ローム粒中
3　7.5YR3/3　暗褐色　ローム粒微
4　7.5YR4/6　褐色　ローム大中、ローム小少、ローム粒多
5　7.5YR5/6　明褐色　ローム粒多

H－H′
1　7.5YR4/3　褐色　ローム大・中・小中、ローム粒少
2　7.5YR5/3　にぶい褐色　ローム中少、黒色土粒少
3　7.5YR3/2　黒褐色　ローム大少、ローム小微
4　7.5YR3/3　暗褐色　ローム大少、ローム粒少
5　7.5YR3/2　黒褐色　ローム粒微
6　7.5YR3/3　暗褐色　ローム中・小少
7　7.5YR3/4　暗褐色　ローム大多、ローム中・小・粒少
8　7.5YR3/1　黒褐色　ローム粒微
9　7.5YR4/6　褐色　ローム粒多

第48図　2号墳検出状況



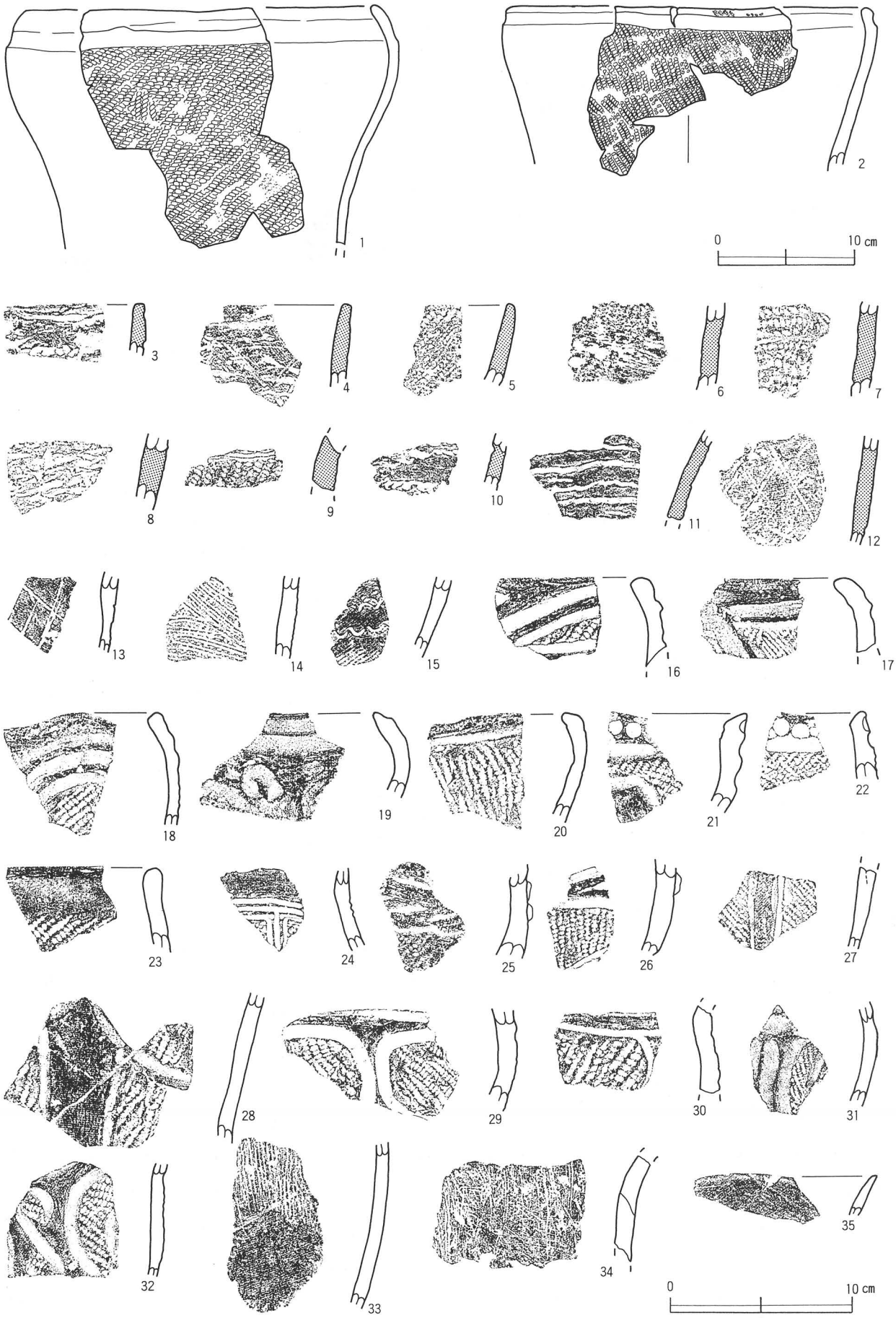
第49図　2号墳出土遺物

第3節　遺構外出土遺物

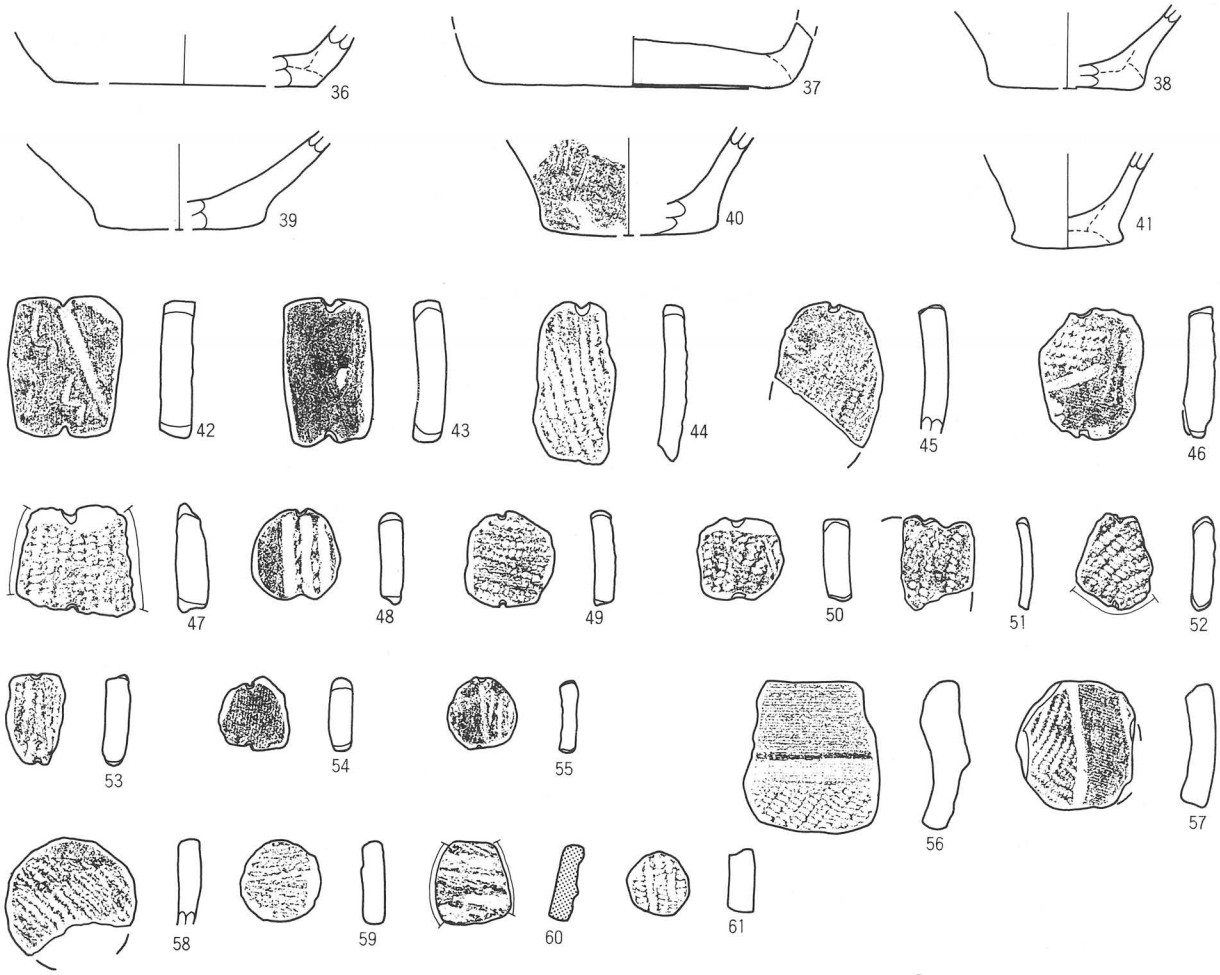
神明遺跡第1次・第2次の両調査では、プラスチック製コンテナ箱にして約23箱分の遺物が出土した。当節ではこのうち、遺構に伴わない出土遺物を、調査区毎に、縄文土器・石器・その他の遺物に分けて報告する。

①第1次調査区出土の縄文土器　〔第50・51図〕

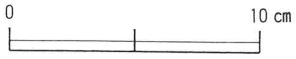
ここでは表採、グリッド中及び他時期の遺構覆土中より出土した縄文土器をまとめて遺構外遺物として扱うこととする。29・30を除き全て深鉢である。1は平縁で推定径26.0cm、口縁下に最大径を有する。口縁に沿って沈線状に浅く凹ませ微隆起線文を作り出している。下半は単節ＲＬが施文されていた。2は平縁で推定径26.4cm、あまりくびれない器形である。地文0段多条ＲＬ、口縁に沿って沈線が1条巡り、この上を磨いて狭い無文帯とするが、一部縄文が残っている。ともに中期後半加曽利ＥⅣ式に相当しよう。3～12は胎土に繊維の混入が見られる一群である。3・4は波状縁で3は口縁に沿い一部途切れる沈線が巡り、下半は押引沈線が見られた。4は不規則な押引沈線・コンパス文が描かれる。5は平縁で単節ＬＲと異節縄文か。6は器面が荒れ判全としないが単節ＬＲか。7は単節ＬＲ、8は無節Ｒℓが押圧されていた。9は0段多条ＬＲで上方に弧のゆるいコンパス文、10は幅の狭いコンパス文が描かれている。11は地文無文、多段の押引沈線文が横位に巡り、一部弧状を呈している。12・13は斜沈線による格子目文でいずれも左上・右下→右上・左下方向へと施文される。これらは前期前半広義の黒浜式に相当しよう。14は地文単節ＬＲか、この上から半截竹管状工具による曲線文が空白部なく描かれる。前期後半諸磯ｂ式に相当しよう。15は単節ＬＲの結節縄文が2段見られる。前期末葉から中期初頭に相当しよう。16は平縁で隆帯文とこれに沿う沈線により区画文が描かれ、区画内は単節ＬＲが充填される。外面に炭化物が付着していた。17は平縁で両側が沈線状に凹む微隆起線文により曲線文が描かれる。縄文は単節ＬＲと0段多条ＬＲの二種が用いられていた。18は波状縁で2条の微隆起線文による曲線文、曲線文内は0段多条ＲＬである。19は平縁で口縁に沿い両側がなでられる微隆起線文が1条巡っている。縄文はなく、下半は「∩」状の単位文と曲線的沈線文が描かれていた。20は波状縁で、水平に沈線が1条巡っている。下半は0段多条ＲＬが施文されていた。



第50図　第１次調査遺構外出土遺物①



第51図　第１次調査遺構外出土遺物②



21・22は波状縁である。ともに口縁部に水平に幅の広い沈線文が巡り、沈線上方には円形刺突が連続していた。０段多条ＬＲが施文され、21は沈線による曲線文と無文部が見られた。23は平縁で口縁沿いをなでて無文帯とし、下半は０段多条ＬＲが施文されていた。24は上半無文で下半は沈線による直線的な区画文が描かれる。地文は単節ＲＬで内面に炭化物が付着していた。25・26は隆帯による区画文で25は下半単節ＲＬか。26は地文単節ＲＬで曲線的な沈線文が描かれている。27は垂下沈線文で単節ＬＲと無文帯が交互に施文されている。28は沈線による連弧状文と垂下文が描かれ、０段多条ＲＬと無文帯が交互に見られる。29・30は壺もしくは鉢形土器。29は上端に沈線が１条巡り、下半は０段多条ＬＲが充塡される楕円形区画文が描かれる。30は屈曲部に沈線が２条巡り、下半は区画文か、単節ＲＬ。31は両側が幅広くなでられる微隆起線文による曲線文で、０段多条ＬＲが充塡されていた。32は沈線による曲線文で一部厥手状となる。０段多条ＬＲが充塡される。33・34は条線文である。33は４～５条１単位で垂下し、下半は無文となる。34は垂下させた後、一部横位に施文していた。16・24～26は加曽利ＥII式、27～30はIII式、その他はIV式に相当しよう。35は平縁で無文、斜方向に磨かれており、器壁は薄手である。後期と思われる。

36～41は底部である。40を除き全て無文であった。36は推定径10.5cm、37は径12.4cmで上げ底、底面と外面は磨かれていた。38は推定径6.2cm、底面と底部直上は磨かれている。39は径6.5cm、40は推定径7.0cm、41は径4.5cmでともに底面が凸レンズ状を呈している。39は外面横なで、40は４条１単位

の条線文が垂下し、下半は無文、41は底面が磨かれていた。40は中期後半加曽利ＥⅢ～Ⅳ式に相当しよう。

42～61は土製品である。42～55は土錘で完形が多い。形状も方形・楕円形・円形とさまざま見られた。56～61は土製円盤である。56・60は隅丸方形、他は円形である。

第１次調査遺構外出土土製品観察表

No.	名称	残存	大きさ（cm）	重量（g）	整形	文様・その他	時期
42	土錘	完形	5.5×4.5	43.2	全周磨り	垂下・蛇行沈線文、深い切り目１対、方形	加曽利ＥⅢ式
43	土錘	完形	5.8×3.6	31.5	全周磨り	口縁部、沈線文、切り目１対、方形	中期後半
44	土錘	一部欠	6.2×3.1	(22.6)	全周磨り	０段多条ＬＲ、切り目１対	不明
45	土錘	2/3	(5.7)×4.4	(27.8)	全周磨り	附加条？切り目１ケ	不明
46	土錘	一部欠	5.2×4.1	(25.5)	全周磨り	０段多条ＲＬ、磨消沈線文、切り目１対	加曽利ＥⅢ式
47	土錘	完形	4.4×4.8	31.2	一部磨り	０段多条ＲＬ、切り目１対、方形	不明
48	土錘	完形	3.6×3.6	16.0	全周磨り	地文縄文、３条の沈線文、切り目１対、円形	中期後半
49	土錘	完形	3.7×3.6	14.7	全周磨り	単節ＲＬ、切り目１対	不明
50	土錘	完形	3.2×3.4	13.9	全周磨り	地文単節ＬＲ、沈線文、切り目１対	加曽利ＥⅢ式
51	土錘	1/4	(3.7)×2.9	(6.1)	全周磨り	単節ＬＲ、切り目１ケ、薄手	不明
52	土錘	完形	3.8×3.1	10.4	一部磨り	単節ＲＬ、切り目１対	不明
53	土錘	完形	3.6×2.2	10.3	全周磨り	単節ＲＬ、切り目１対	不明
54	土錘	完形	3.0×2.8	9.5	全周磨り	浅い条線文、切り目１対	中期後半
55	土錘	完形	2.8×2.8	6.8	全周磨り	条線文、切り目１対、円形	中期後半
56	土製円盤	完形	6.0×5.3	58.3	全周磨り	口縁部、微隆起線文、０段多条ＲＬ、方形	加曽利ＥⅣ式
57	土製円盤	一部欠	5.1×(4.7)	(29.4)	全周磨り	０段多条ＲＬ、羽状、磨消沈線文	加曽利ＥⅣ式
58	土製円盤	3/4	(4.6)×5.2	(22.4)	全周磨り	丁寧な磨り、０段多条ＬＲ、沈線文	加曽利ＥⅣ式
59	土製円盤	完形	3.3×3.1	12.0	全周磨り	条線文	中期後半
60	土製円盤	完形	3.2×2.8	10.0	一部磨り	縄文押圧？繊維混入	前期前半
61	土製円盤	完形	2.5×2.5	7.8	全周磨り	０段多条ＬＲ	不明

②第１次調査区出土の石器　〔第52図〕

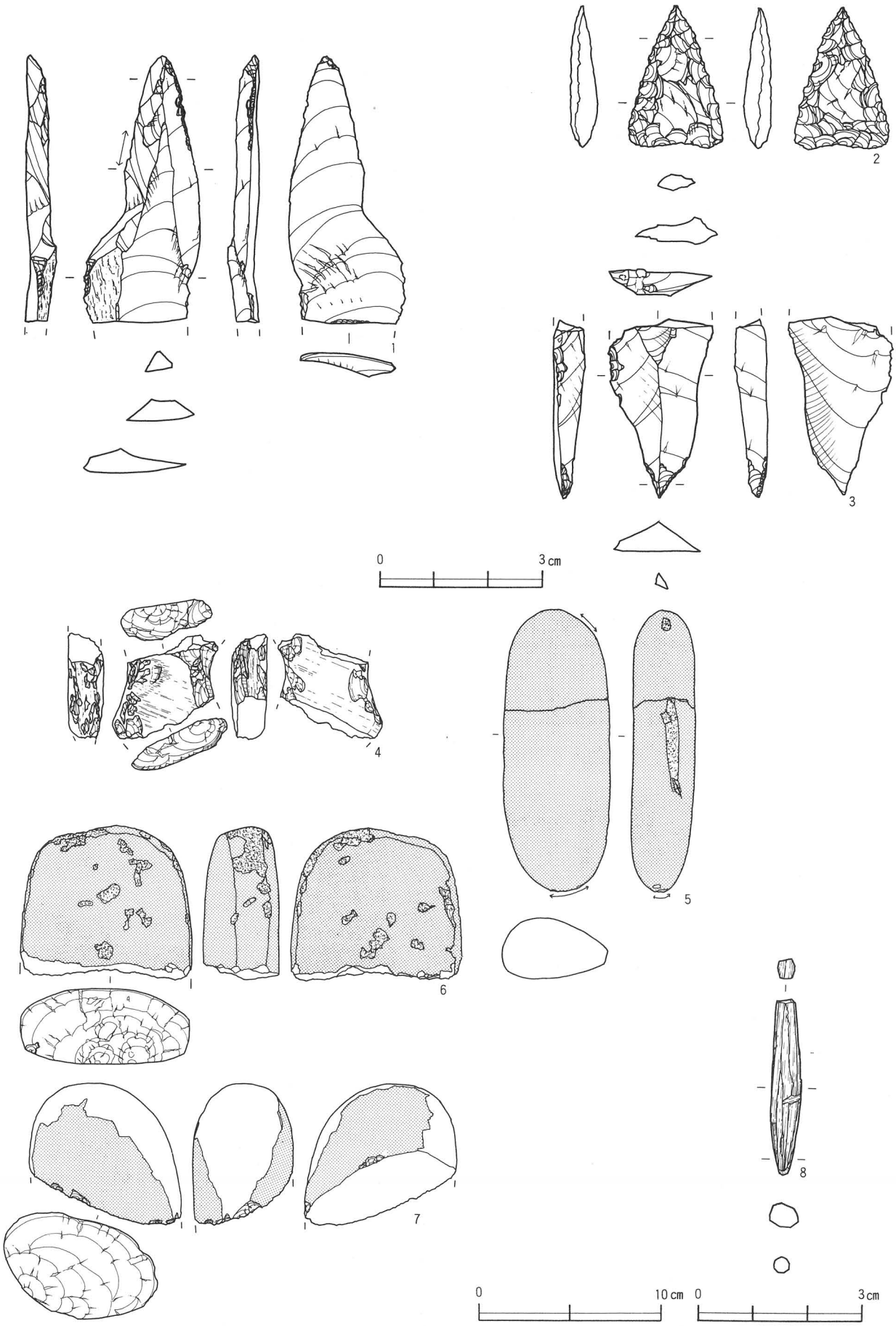
表採・グリッド・攪乱中より出土した石器・石製品を遺構外として扱う。総数23点で器種構成はナイフ形石器－１点、石鏃－１点、石錐－１点、打製石斧－１点、磨石類－６点、砥石－３点、剥片－９点、石製品－１点でうち８点を図示した。

１はナイフ形石器である。褐色の硬質頁岩製で縦長剥片を素材とする。両側縁の一部に短い範囲で急斜度剥離による調整加工を施してはいるが、全体に素材形状保持型の成形となっている。刃部の一部に微細剥離が点在している。打面を基部側に用いたが、その基部側は背面側からの力により折損している。

２は石鏃である。器体中央の両面に旧素材剥離面を残す程度に周縁部に調整加工を施している。基部内側の抉り加工は浅く、全体として二等辺三角形の形状である。旧素材剥離面の剥離方向からみると、打面は固定していない。

３は石錐である。180°の打面転移を経過した石核から生じた縦長剥片を素材とする。末端部に調整加工を施し錐部を形成している。右側縁の一部に調整剥離を施し、方珪石の結晶部から折損している。

４は打製石斧である。両側縁から抉り加工を施し、分銅形とする。両面とも線状痕を残す研磨面により平坦化し、抉り部を中心として調整剥離面の「研ぎ残し」が認められる。上下刃部は折損。



第52図　第１次調査遺構外出土遺物③

5～7は磨石類である。5は異なる溝から出土した接合資料で扁平な棒状礫を使用している。両端部に敲打痕を有し、側縁の一部には線状痕と敲打痕が重複する細長い範囲が認められた。6は表面が山形、裏面は扁平となり、両面とも研磨されている。側縁全体は敲打され、両面にも集中敲打が認められる。器体中央付近でネガティブバルブを生じる折損を起こしている。7は両面を研磨に使用、側縁は大半が剝落している。

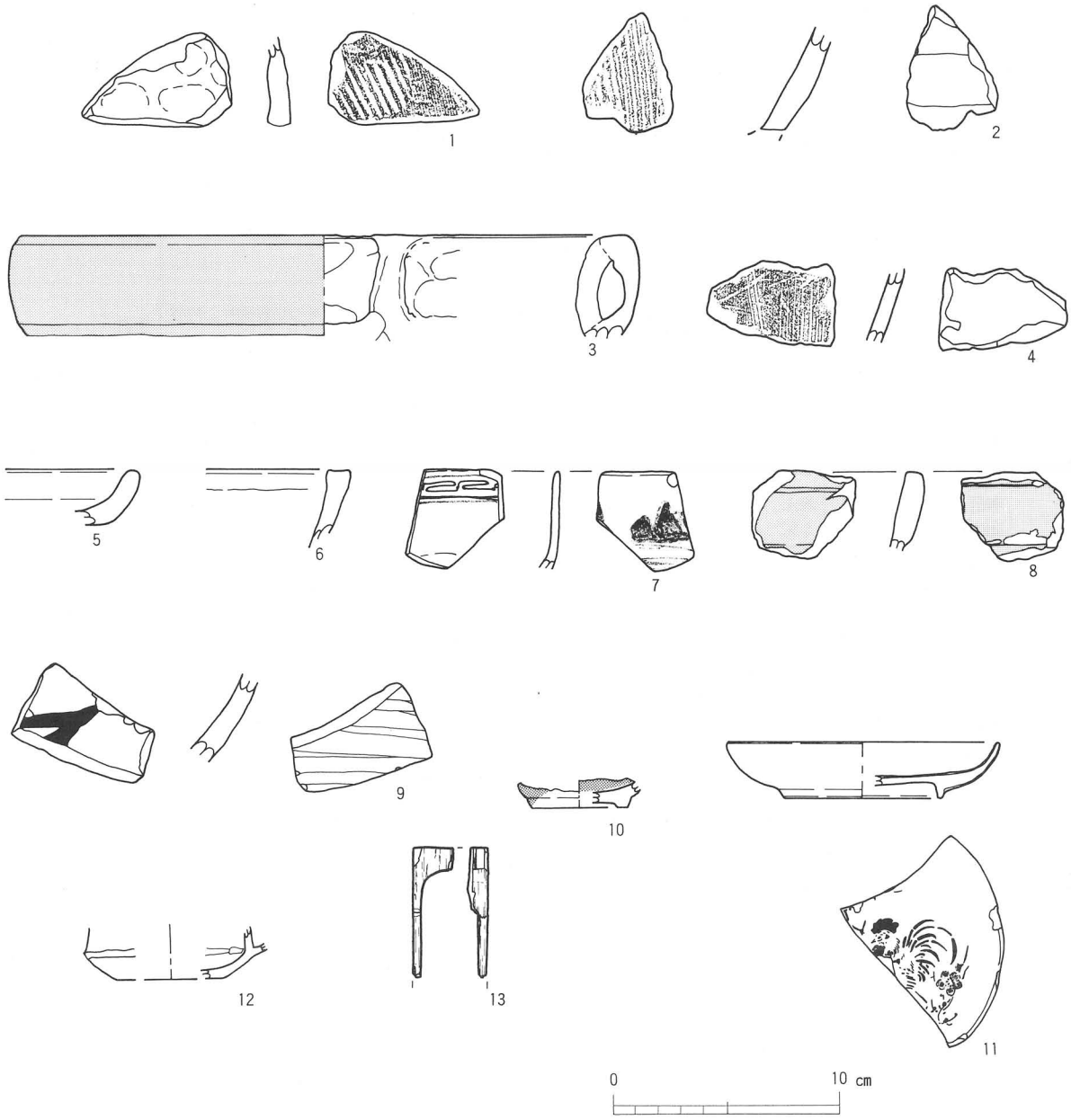
8は針状石製品である。全体を長軸方向に平行する研磨面で覆い、一端をさらに細く、もう一端は平坦に研磨している。「石筆」に類似する。灰白色の蛇紋岩製。

第1次調査遺構外出土石器観察表

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備　　考
1	ナイフ形石器	(4.88)	2.09	0.46	(3.6)	珪質頁岩	2ケ所にリタッチ。打面側を折損（背→腹)。
2	石鏃	2.62	1.74	0.49	1.9	黒色安山岩	無茎。鋸歯縁。
3	石錐	(3.27)	1.90	0.59	(2.3)	黒曜石	打面側は同時割れ。
4	打製石斧	(6.48)	(5.35)	(1.92)	(69.0)	角閃石安山岩	分銅形。扁平礫を素材に周縁に二次加工。刃部折損。
5	磨石類	15.47	5.85	3.38	503.0	角閃石安山岩	接合資料。片側縁に平坦面。
6	磨石類	(7.94)	(9.36)	(4.20)	(540.0)	角閃石安山岩	両面研磨。側縁敲打。一部赤化。
7	磨石類	(8.31)	(8.29)	(5.48)	(392.0)	砂岩	両面研磨。側縁剝落。
8	針状石製品	3.24	0.55	0.47	1.3	蛇紋岩	長軸方向に研磨。稜が残る。片側尖る。

③第１次調査区出土のその他の遺物　〔第53図〕

表土中または攪乱中で出土した遺物のうち、主なものを図・観察表化して以下に挙げる。時代的には江戸時代以降の陶磁器が散出する。



第53図　第１次調査遺構外出土遺物④

第１次調査遺構外出土遺物観察表

No.	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	陶器 甕	C (3.9)	攪乱中 5％	良好	石英微量	極暗赤褐色 灰白色	肩部寄りの体部片。外面に条線群の叩き目をもつ。内面指頭痕。	常滑窯産 中世
2	陶器 すり鉢	C (3.8)	攪乱中 5％	良好	長石・石英 少量	明赤褐色	底部との接合部に当たる体部片。５条以上を１単位とする御目を内面にもつ。	近世
3	土師質 土器 内耳鍋	A〔27.0〕 C (4.4)	攪乱中 5％	良好	長石多量 石英少量 雲母微量	橙色	耳をもつ口縁部片。外面煤付着。耳は５～7°右に傾く。接合部は、指頭痕が重複する。	中世
4	土師質 土器 すり鉢	C (3.2)	表土 5％	良好	長石・石英 少量　赤色 粒微量	橙色	体部片。内面に７条以上を１単位にした御目。外面ナデ。	中世
5	土師質 土器 焙烙	C (2.4)	攪乱中 5％	良好	長石・赤色 粒少量	にぶい赤褐色	ゆるやかに立ち上がる口縁部片。内外面ナデ。	近世
6	土師質 土器 内耳鍋	C (2.8)	攪乱中 5％	良好	長石・雲母 微量	にぶい赤褐色	口唇上端にへこみをもつ口縁部片。内外面ナデ。	中世
7	染付 碗	C (4.3)	表土 20％	良好	精良	明緑灰色 白色	腰高形碗。外面に山状の文様、内面口縁寄りに雷文を施す。	肥前系 近世
8	陶器 すり鉢	C (3.5)	表土 5％	良好	良土	にぶい赤褐色	内外面に錆釉を施した口縁部片。内外面口唇部寄りに１条の沈線を持つ。	瀬戸美濃系
9	陶器 碗皿類	C (3.6)	表土 5％	良好	褐色粒微量	灰白色 浅黄色	ロクロ成形。内外面施釉。内面に褐鉄顔料による文様（不明）あり。	瀬戸美濃系
10	陶器 天目	B〔4.5〕 C (0.8)	攪乱中 30％	良好	良土	黒褐色 淡黄色	輪高台をもつ底部片。釉は内面と外面、一部高台にも付着。体部と高台間に沈線。	瀬戸美濃系
11	磁器 高台付皿	A〔12.2〕 B　2.4 C〔7.2〕	表土 30％	精良	良土	緑色 灰白色	口縁部は緩やかに立ち上がる。内面見込みにニワトリと梅がプリント印刷される。	肥前系 明治以降
12	陶器 灯明皿	B〔4.8〕 C (2.3)	表土 10％	良好	良土	暗赤色 灰褐色	平底の底部から低く立上り、張出し部から直立する。内面と外面張出し部に褐色釉。	

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
13	硯	(5.67)	(8.1)	(17.7)	(5.4)	粘板岩	攪乱中から出土。１号溝出土の破片と接合。

④第２次調査区出土の縄文土器　〔第54図〕

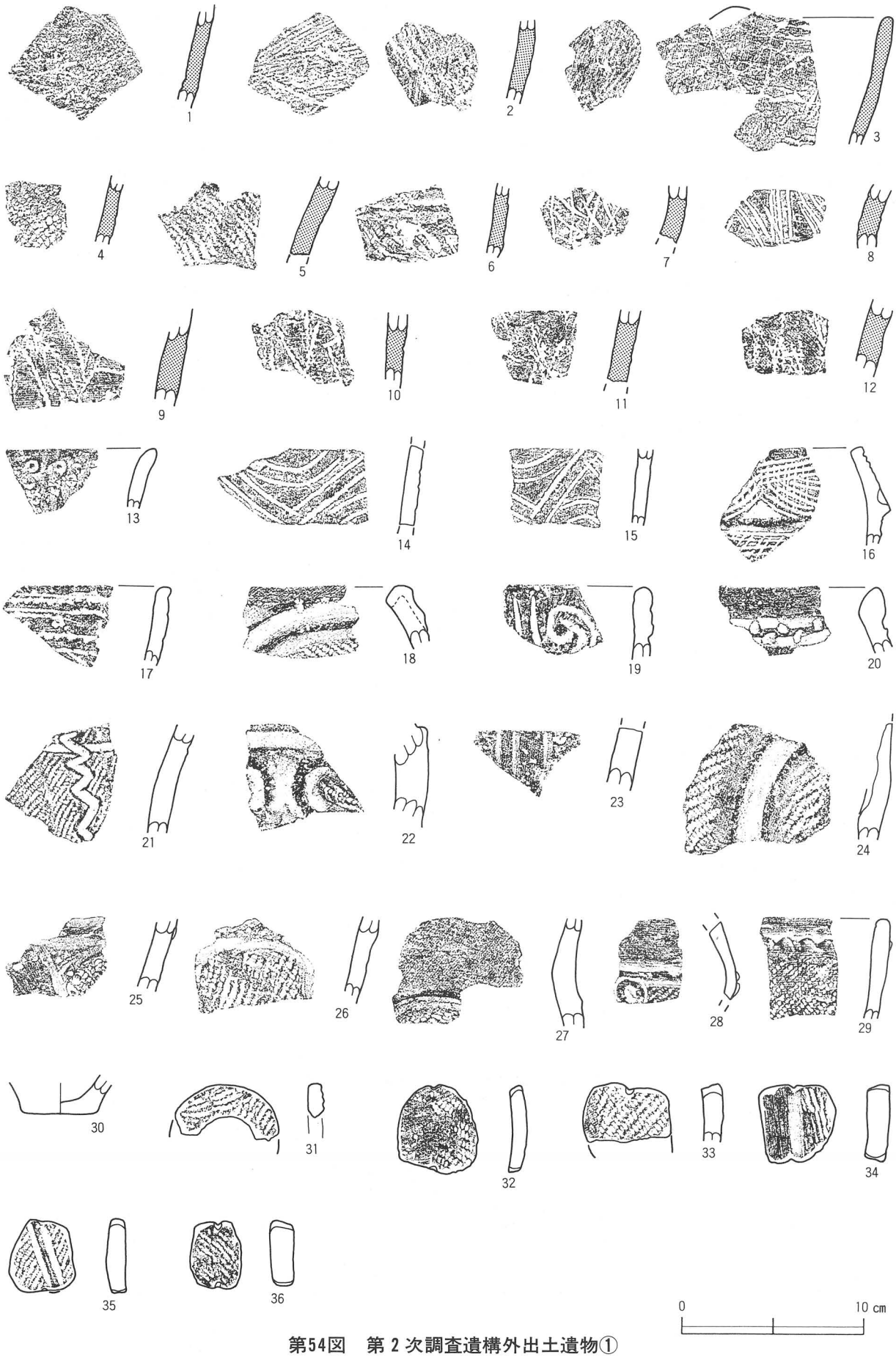
ここでは表採、グリッド中及び他時期の遺構覆土中より出土した縄文土器をまとめて遺構外遺物として扱うこととする。27・28を除き全て深鉢であった。１・２は内外面ともに斜位条痕文が施文される。胎土中には繊維を混入し、１は石英も多量に見られた。早期後半に相当しよう。３～12は胎土中に繊維の混入が見られる。３は波状縁で波頂部は欠損している。無節Ｌｒを一部回転、格子目状に押圧している。４は異節縄文か。５・６は０段多条ＲＬと思われる。７はｒの押圧か。不規則な格子目状を呈している。８は半截竹管状工具による垂下・斜位沈線文。９～12はアナダラ属系貝類腹縁による波状文。これらは前期前半広義の黒浜式に相当しよう。13は平縁で巻き貝の押圧か。14・15は半截竹管状工具による斜行文と弧線文が描かれている。いずれも前期後半浮島Ⅰ式に相当しよう。16は波状縁で集合沈線による横線・弧線文が描かれ、縦位の集合沈線により細かな格子目状区画が作られている。屈曲部下も同様で、屈曲上部は弧線文間に三角形彫刻文が見られる。前期末葉十三菩堤式に相当しよう。17は平縁でおそらく区画となる平行沈線文間に刺突が連続し、一部押引沈線文が描かれる。中期前半阿玉台Ⅰａ式に相当しよう。18は平縁で微隆起線文とこれに沿う沈線文で曲線文が描かれ、単節ＲＬが充填されていた。19は平縁で器面が荒れているが地文は無文、垂下沈線文と渦巻文が描かれる。20は波状縁で口縁に沿い沈線が２条巡り、沈線上には楕円形の交互刺突が連続する。21は地文０段多条ＬＲで横位沈線文の後、蛇行する沈線文を垂下させる。22は上方横位沈線文が巡り、隆帯文による楕円形区画内に単節ＲＬを充填している。23は数条の平行沈線文が垂下し、縄文の磨消を交互に行なうが、器面が荒れており原体不明。24は２条の微隆起線文による曲線文、０段多条ＲＬである。25は上半両側がなでられる微隆起線文で下半は沈線による曲線文内に単節ＲＬが施文されている。26は対向する「Ｕ」状沈線文か。区画内に０段多条ＬＲが施文される。27・28は壺もしくは鉢形土器で27は上半無文、微隆起線文による楕円形区画文が描かれる。区画内は０段多条ＬＲが充填されていた。28は屈曲部上半無文、境には横位隆帯文が巡り、下半は単節ＬＲで扁平な円形貼付文が付されていた。21・22は中期後半加曽利ＥⅡ式、23はⅢ式、他はⅣ式に相当しよう。29は平縁で口縁下指頭押圧により小波状を呈する隆帯文が１条巡り、下半は単節ＬＲが施文される。口縁部裏面に沈線が１条巡っていた。後期前半の粗製土器に相当しよう。

30は底部である。径4.2cm、無文で外面は磨かれていた。時期不明。

31～36は土製品である。31は有孔円盤で両側より穿孔されていた。32～36は土錘である。34は口縁部片の再利用、いずれも周縁が磨られ、形状が整えられていた。

第２次調査遺構外出土土製品観察表

No.	名称	残存	大きさ（cm）	重量（g）	整形	文様・その他	時期
31	有孔円盤	1/3	(3.1)×(5.6)	(12.9)	全周磨り	丁寧な磨り、単節ＲＬ、孔径は残存幅の1.5倍	不明
32	土　錘	完　形	4.8×4.4	21.4	全周磨り	単節ＲＬ、切り目１対	不明
33	土　錘	1/2	(3.3)×4.9	(20.4)	全周磨り	０段多条ＬＲ、磨消、切り目１ケ	加曽利ＥⅣ式
34	土　錘	完　形	4.3×4.2	22.7	全周磨り	口縁部、沈線文、単節ＬＲ、切り目１対	加曽利ＥⅣ式
35	土　錘	一部欠	3.9×3.6	(18.1)	全周磨り	０段多条ＲＬ、磨消沈線文、切り目１対	加曽利ＥⅢ式
36	土　錘	完　形	3.7×2.8	17.9	全周磨り	０段多条ＬＲ	不明



第54図　第２次調査遺構外出土遺物①

⑤第２次調査区出土の石器　〔第55図〕

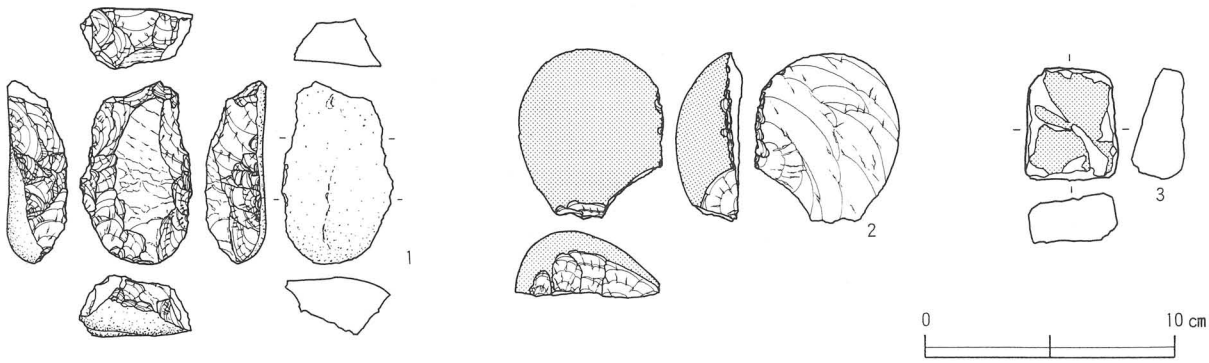
表採・攪乱中より出土した石器・石製品をここで扱う。総数14点で器種構成は二次加工石器－３点、剥片－６点、砥石－４点、硯－１点でうち３点を図示した。

１・２は二次加工石器である。１は縦長剥片を使用して片面にのみ調整加工を加えている。打製石斧の刃部に相当する位置に調整加工がなく、側縁に対して剥離角70～85°の急斜度剥離による調整加工を集中させ、「潰し」加工を施さない点から打製石斧とはしなかった。２は楕円形を呈すると思われる。正面は凸状の全面研磨面で本来は磨石類の剥片だったと考えられる。主要剥離面側の片側縁に連続する調整加工が施されるが稜線の大半は摩滅している。旧研磨面は被熱により赤化していた。

３は砥石である。砥面２面、線状痕の残る平坦面が３面認められた。

第２次調査遺構外出土石器観察表

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備　　考
1	二次加工石器	7.26	4.43	2.20	75.0	流紋岩	片面のみ周縁加工。節理面で分割した礫片素材。
2	二次加工石器	6.69	5.67	2.44	112.0	砂　岩	縁片の一部に調整加工。稜線摩滅。被熱による赤化。
3	砥　石	4.43	3.70	2.16	51.0	凝灰岩	砥面２面、折開面３面。



第55図　第２次調査遺構外出土遺物②

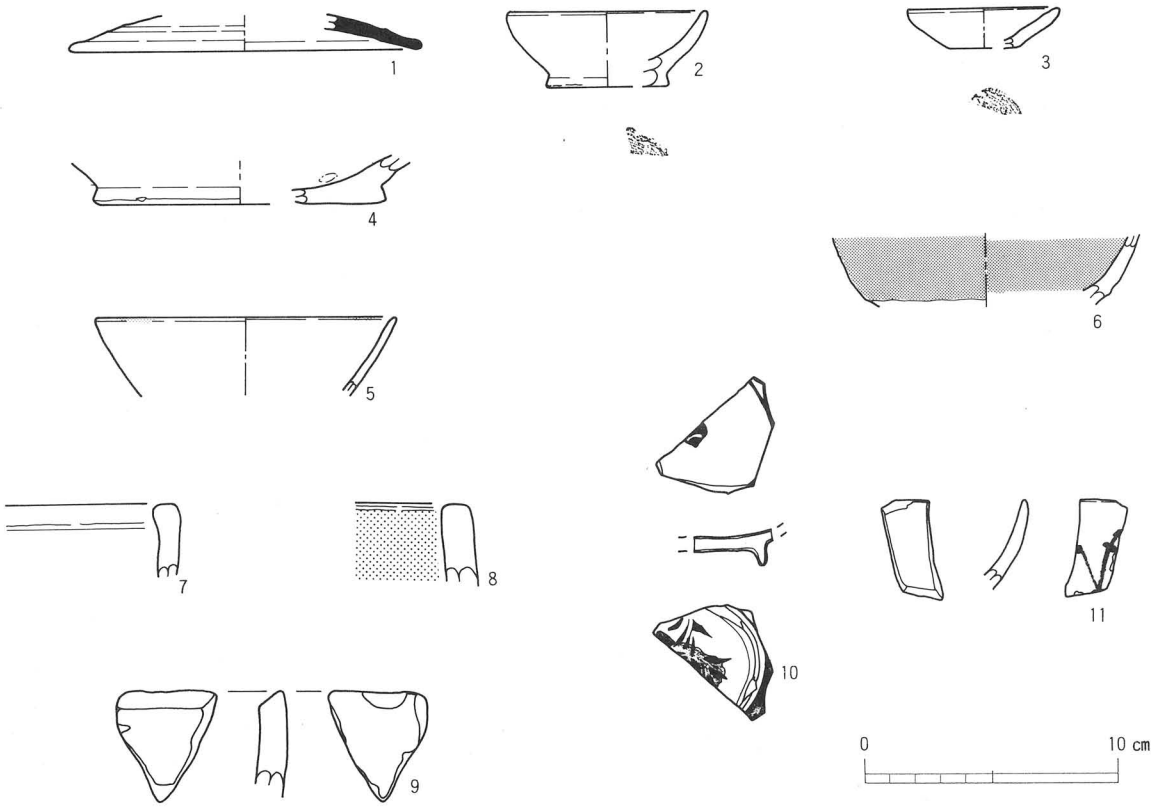
⑥第２次調査区出土のその他の遺物　〔第56図〕

表土中または攪乱中で出土した遺物のうち、主なものを図・観察表化して以下に挙げる。

第２次調査遺構外出土遺物観察表

版No.	器種 器形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎　土	色　調	器形・技法の特徴	備　　考
1	須恵器 蓋？	A〔14.0〕 C（1.4）	表土 ５％	不良	雲母多量 長石微量	にぶい褐色	ロクロ成形による口縁部。内外面ヨコナデ。端部はやや肥厚する。	技法から須恵器と判断
2	土師質 土器 小皿	A〔8.0〕 B〔4.6〕 C　3.0	表土 10％	普通	長石微量	にぶい黄橙色	底部回転糸切り痕。わずかに直立した後、漏斗状に大きく立ち上がる。	近世か
3	土師質 土器 小皿	A〔6.1〕 B〔2.8〕 C　1.55	攪乱 10％	普通	良土	にぶい橙色	底部回転糸切り痕。斜め上方に立ち上がる。破砕後に被熱して赤色変成する。	
4	磁器 碗皿類	B〔11.7〕 C（1.65）	表土 10％	良好	精良	青灰色 灰色	底部蛇ノ目凹型高台。内面に砂目痕あり。	

5	土師器 坩？	A〔12.1〕 C（3.1）	撹乱 5％	普通	長石・石英 多量	にぶい赤褐 色	立上りは直立気味の口縁部片。内外面赤彩。口唇部の一部黒色化。	
6	陶器 天目	C（2.8）	表土 10％	良好	良土	黒色　にぶ い黄橙色	底部寄りの体部片。外面の釉は腰部まで施される。	瀬戸美濃系
7	土師質 土器 焙烙？	C（3.1）	表土 5％	良好	長石微量 雲母少量	にぶい褐色	内外面ナデ。口唇部内面はやや肥厚する。	
8	瓦質土器 火舎？	C（3.3）	表土 5％	普通	長石・赤色 粒微量	黒色 にぶい褐色	表面は皆、いぶしをかけられる。直立して、端部は面取られる口縁部片。	
9	土師質 土器 火舎？	C（3.3）	表土 5％	普通	良土	にぶい黄褐 色	やや直立気味に立上り、端部は面取られる口縁部片、内外面ナデ。	
10	染付 碗皿類	C（1.4）	撹乱 25％	良好	精良	明青灰色 白色	見込みに印判文をもつ。畳付け以外は皆施釉される。外底面に花状の文様を描く。	肥前系 18世紀代
11	染付 碗	C（3.5）	表土 5％	良好	精良	灰白色	直立気味に立ち上がる口縁部片。外面に文様（不明）あり。	肥前系 18～19世紀



第56図　第２次調査遺構外出土遺物③

第４章　結語

今年度の常名台の発掘調査は、縄文時代の遺構が主体を占める。縄文時代中期後半の加曽利Ｅ式期を中心とするムラが、台地中央を中心にして営まれていたのだろう。過去の常名台全体の傾向を省みると、縄文期の遺構の検出例は少なく、主体的な位置を占めるものではない。

今回の調査では、溝が合計12条発見された。これらの溝は、そのほとんどが帰属時期と具体的な用途を明らかにしえない。溝は、水はけのよいローム層中に掘り込まれているため、排水の機能はあったかもしれないが、取水とその維持は不可能に近い。台地上では水稲栽培よりも畑作が主体であることから、用水堀的な可能性は低いと思われる。また、集落を囲う「堀」的なものである場合、５号・１号以外の溝は、毛抜き彫りのような非常に浅いものばかりで、とても防御に役立つものではない。溝の中には、途切れたり、屈曲したり、形状が一定しないものさえある。

現在、強いてこの溝群を解釈すると、何かを区画する境界的な目的で掘られたものではないかと考える。溝の深度が浅いという点からは、個人または小規模な集団の手によるものかもしれない。しかしその根拠は、他の目的や規模には該当し難いという点だけであり、消極的な理由でしかない。

土坑群も、出土遺物に乏しいため時期不明のものが大半で、用途も分からないものが多い。

遺構の密度については、北西原遺跡第１・２次調査の如く、台地の縁辺部に従って、竪穴住居の数が増加する可能性が高い。その反面では当調査のように、台地中央部にゆくに従って、土坑・溝が主体となる。遺跡全体からすると、居住的な遺構は縁辺部に多く、それ以外の用途をもつ遺構は台地中央に多い傾向が想定できるだろう。

最後に、この発掘調査と整理作業には、とても多くの方の御協力や励ましを頂きました。一人一人芳名を記すことはかないませんが、御厚意を賜った方々に衷心より御礼を申し上げます。（橋場君男）

参考文献（敬称略、50音順）

茨城大学人文学部史学第６研究室（茂木雅博）　1984『土浦の遺跡　－埋蔵文化財包蔵地－』　土浦市教育委員会

通商産業省工業技術院地質調査所　1988『特殊地質図 23-2 筑波研究学園都市及び周辺地域の環境地質図』

筑波古地域研究グループ（代表 増田精一）　1982『筑波古代地域史の研究 昭和54～56年度 文部省特定研究経費による調査研究概要』　筑波大学

土浦市遺跡調査会（黒澤春彦）　1991『土浦市八幡下遺跡発掘調査報告書』　土浦市教育委員会

土浦市史編さん委員会　1991『図説 土浦の歴史』　土浦市教育委員会

土浦市文化財保護審議会　1978『土浦市の文化財』　土浦市教育委員会

永井　久美男　1996『日本出土銭一覧』兵庫埋蔵銭調査会

増田精一・岩崎卓也ほか　1986『武者塚古墳　武者塚古墳・同2号墳・武具八幡古墳の調査』　武者塚古墳調査団　新治村教育委員会

報告書抄録

ふりがな	しん めい い せき だい1じ・だい2じちょうさ		
書名	神明遺跡 (第1次・第2次調査)		
副書名	土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		
巻次	第5集		
シリーズ名			
シリーズ番号			
編集者名	橋場君男	著者名	窪田恵一 鶴町明子 本田信之 橋場君男 福田礼子
編集機関	土浦市遺跡調査会		
発行機関	土浦市教育委員会		
所在地	〒300-0812 土浦市下高津2－7－36		
発行年月日	1998(平成10)年9月30日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
神明遺跡(しんめいいせき)	茨城県土浦市大字常名(いばらきけんつちうらしおおあざひたな)2774番地他	08203	C-57	36°6′5″	140°11′10″	1997(平成9)年7月8日～1997(平成9)年9月18日	6,978m²	市運動公園建設事業

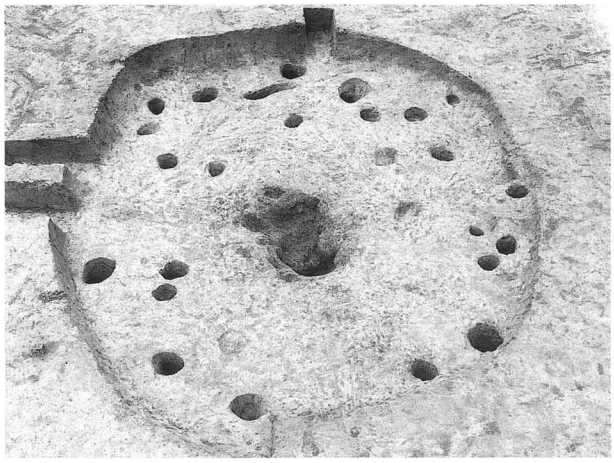
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神明遺跡 (第1次調査)	集落跡	縄文(中期)	竪穴住居址 4軒 土坑 3基	縄文土器・石器・土製品	縄文時代中期の集落遺跡。3号住居址は炉上に礫群と土器片を廃棄する。
	墓跡	不明	土壙墓(馬) 2基	馬骨	
		時代不明	土坑 6基 溝 9条 掘立柱建物址 1棟	陶器、磁器ほか	
(第2次調査)	古墳	古墳後期(終末期)	方墳 1基	須恵器細片 土師器細片	
	墓跡	近世	土壙墓 1基	寛永通寶4枚	
		時代不明	土坑 5基 溝 2条	陶器、磁器ほか	

写　真　図　版

調査区上空より

調査風景（３号住居址）

ＰＬ２　１号・２号住居址



１号住居址検出状況

１号住居址遺物出土状況

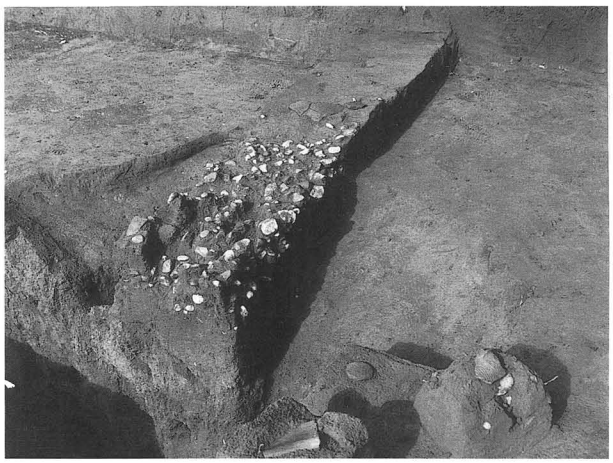
１号住居址遺物出土状況

１号住居炉址検出状況

２号住居址検出状況

２号住居炉址検出状況

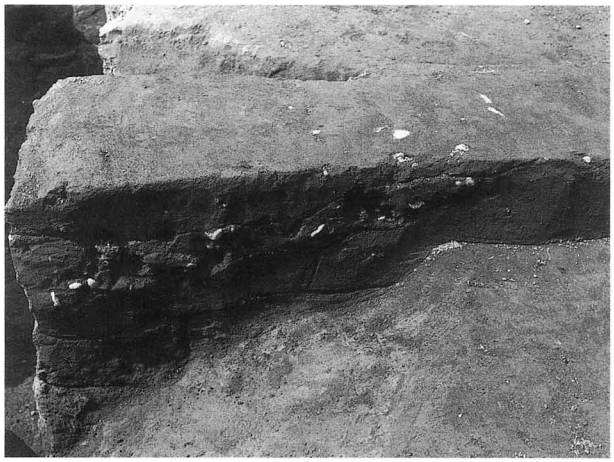
３号住居址検出状況



３号住居址礫出土状況

３号住居址礫出土状況

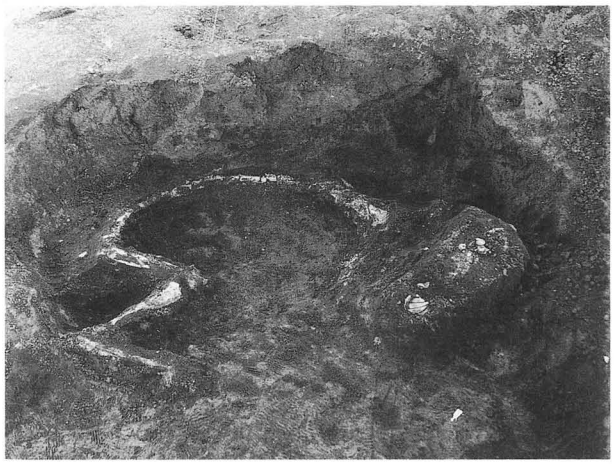
３号住居炉址検出状況



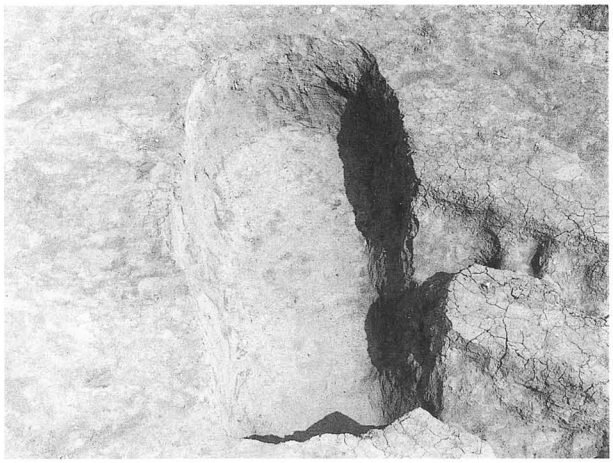
３号住居址覆土堆積状況

４号住居址検出状況

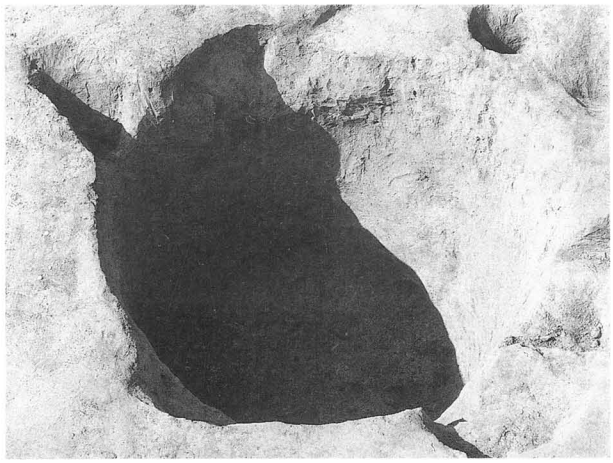
ＰＬ４　１号～５号土坑



１号土坑馬骨出土状況

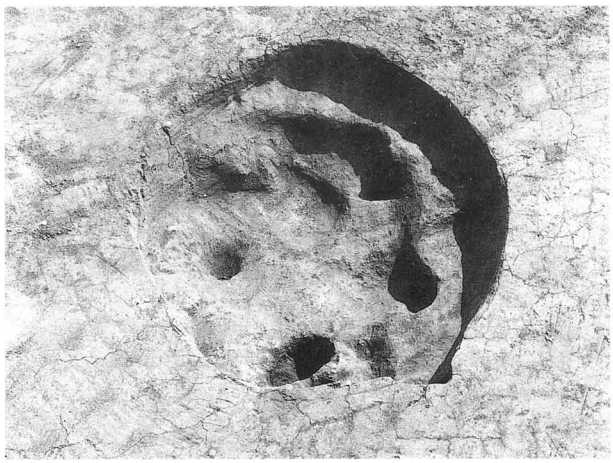


２号土坑検出状況

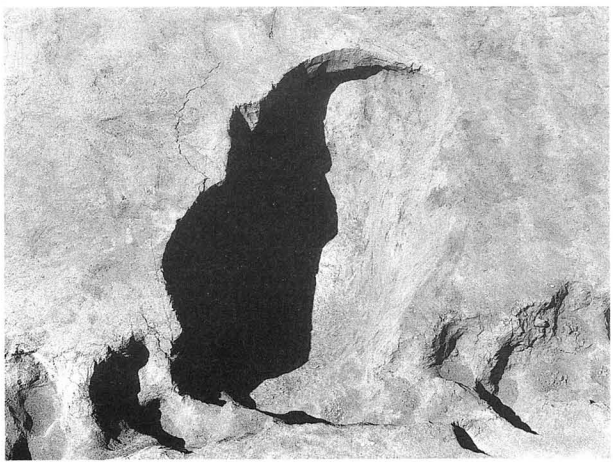


３号土坑検出状況

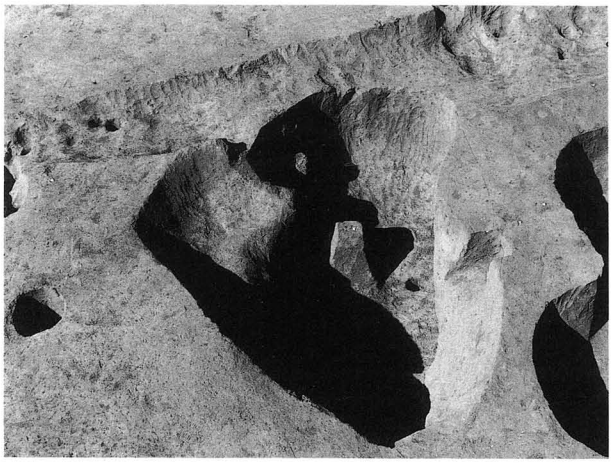
３号土坑遺物出土状況



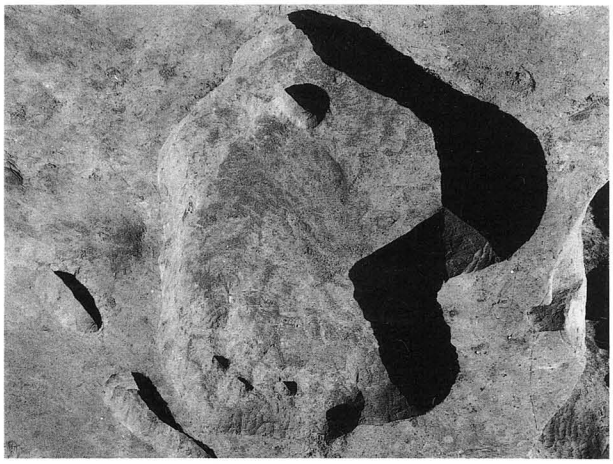
４号土坑検出状況



５号土坑検出状況

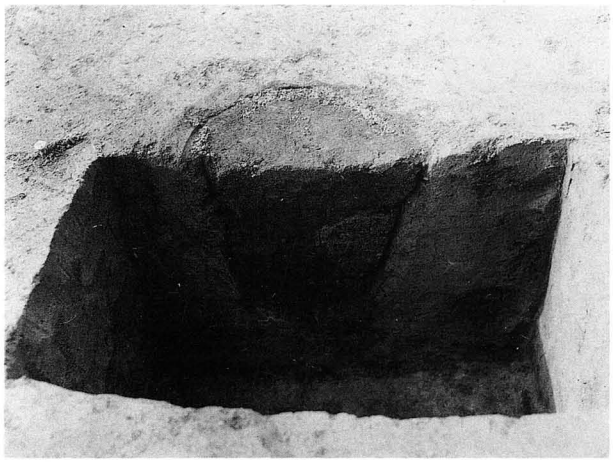


７号土坑検出状況

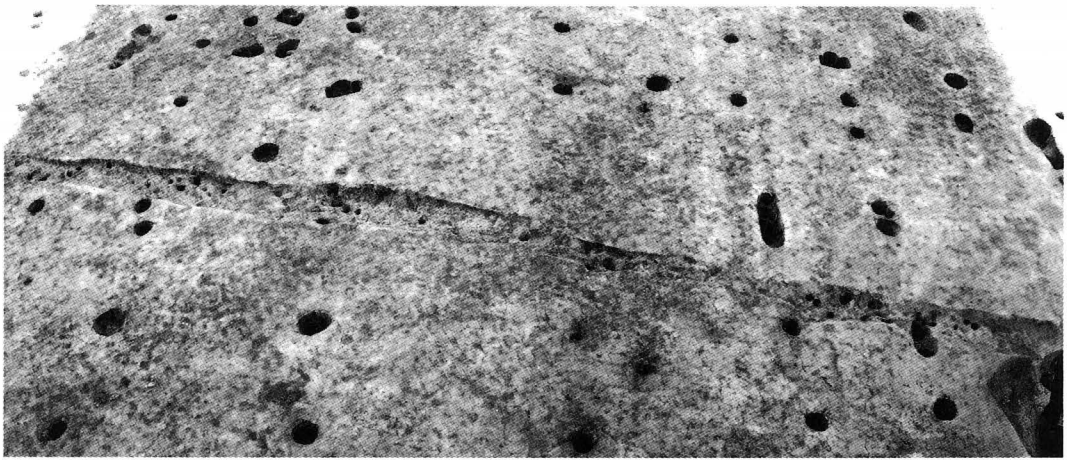


８号土坑検出状況

９号土坑検出状況



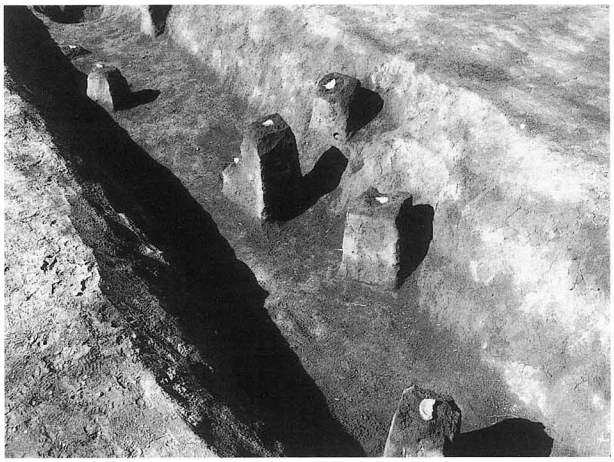
１号掘立柱建物址柱穴覆土



１号掘立柱建物址検出状況

ＰＬ６　１号～４号溝

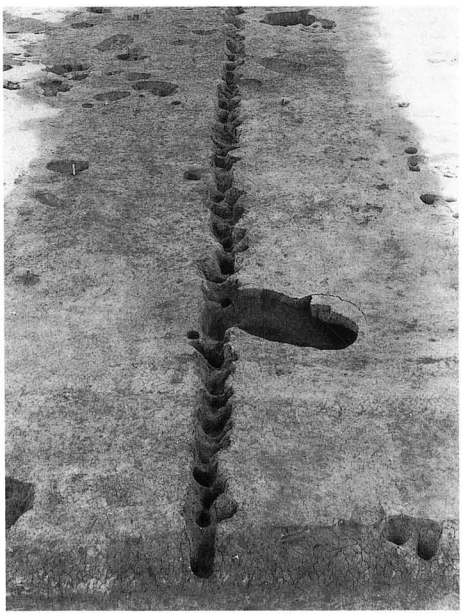
１号溝検出状況



１号溝遺物出土状況

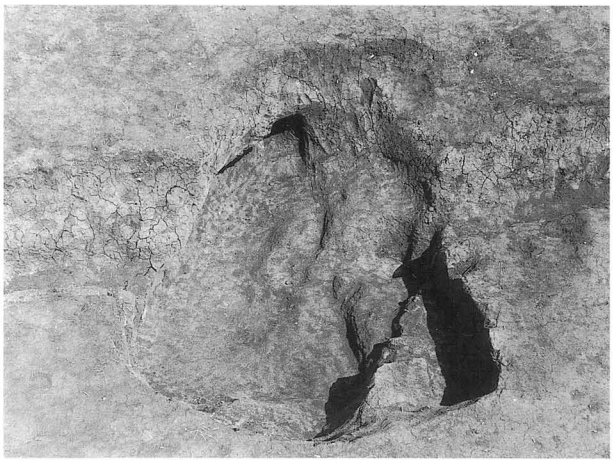
２号溝遺物出土状況

２号溝検出状況

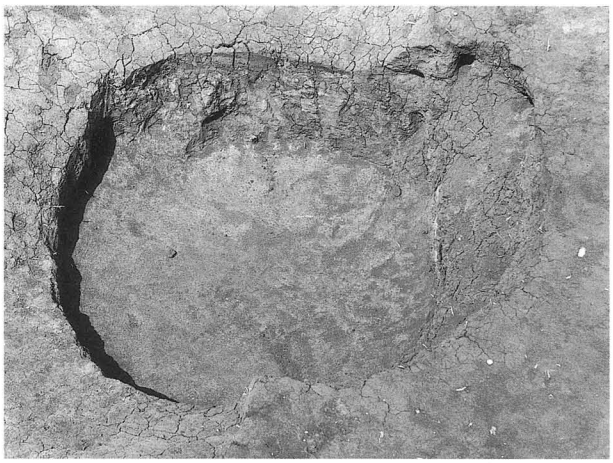


３号溝検出状況

４号溝検出状況

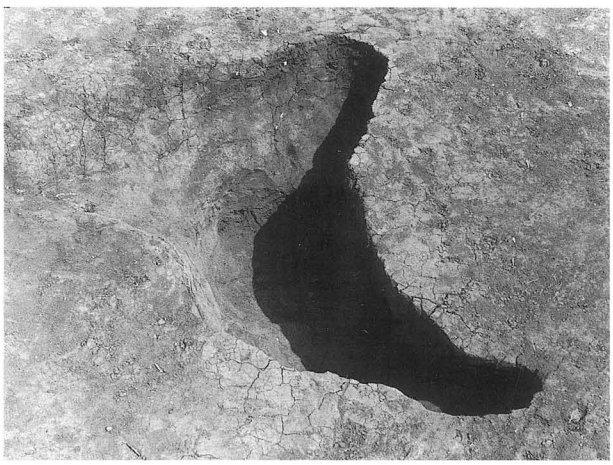


10号土坑検出状況



11号土坑検出状況

12号土坑検出状況



13号土坑検出状況

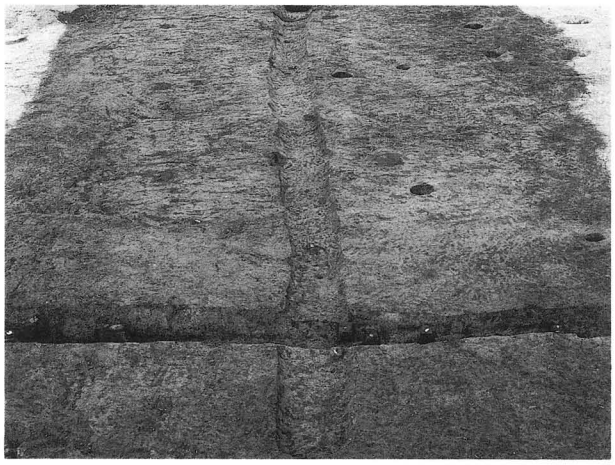
14号土坑検出状況

基本層序

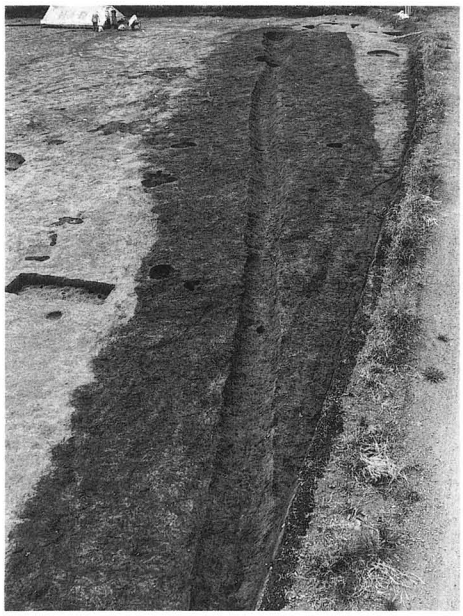
ＰＬ８　10・11・13号溝、２号墳

10号溝検出状況

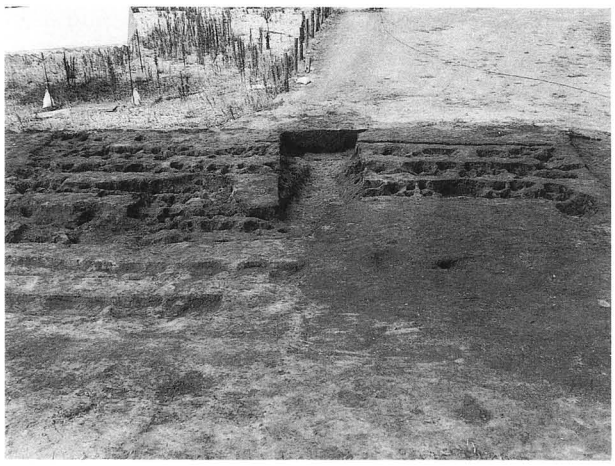
10号溝遺物出土状況



11号溝検出状況

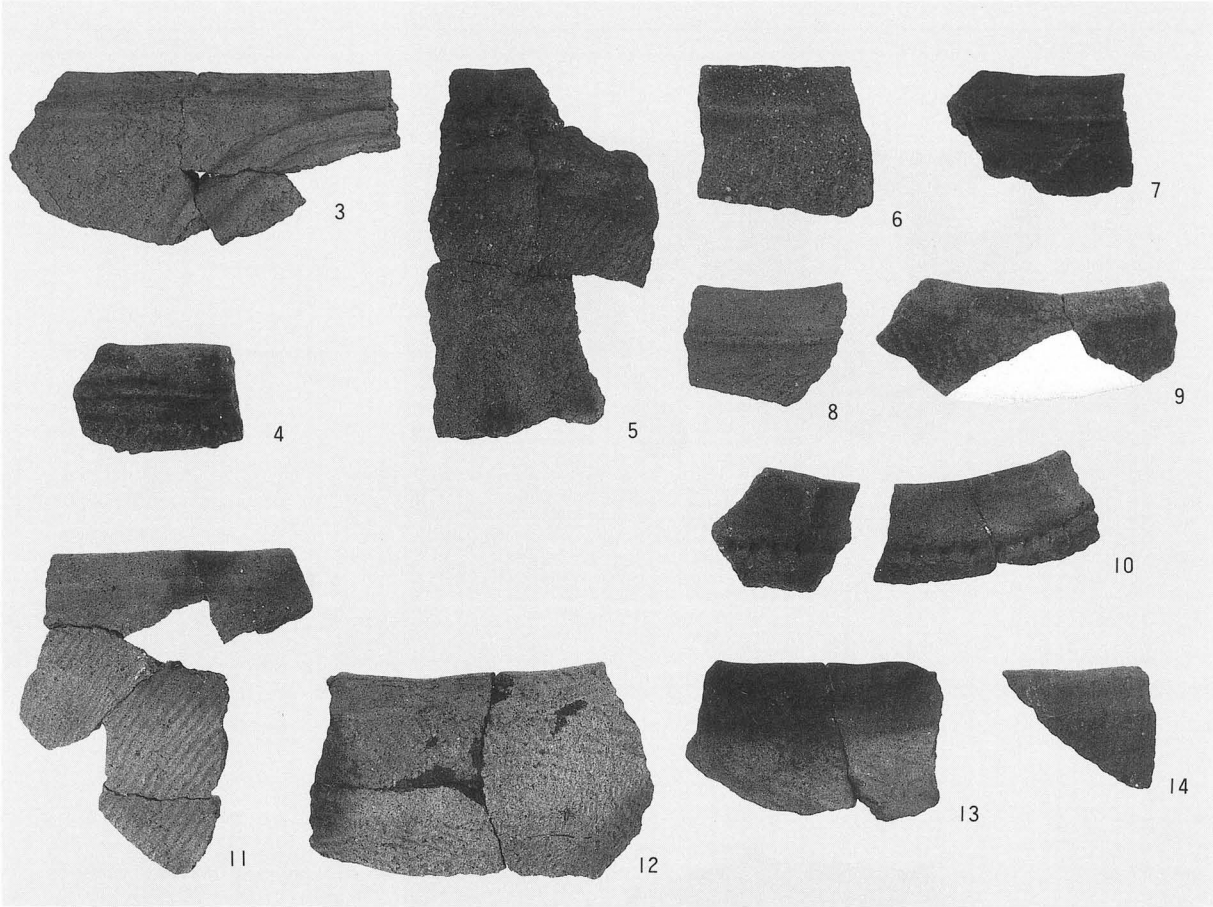


13号溝検出状況

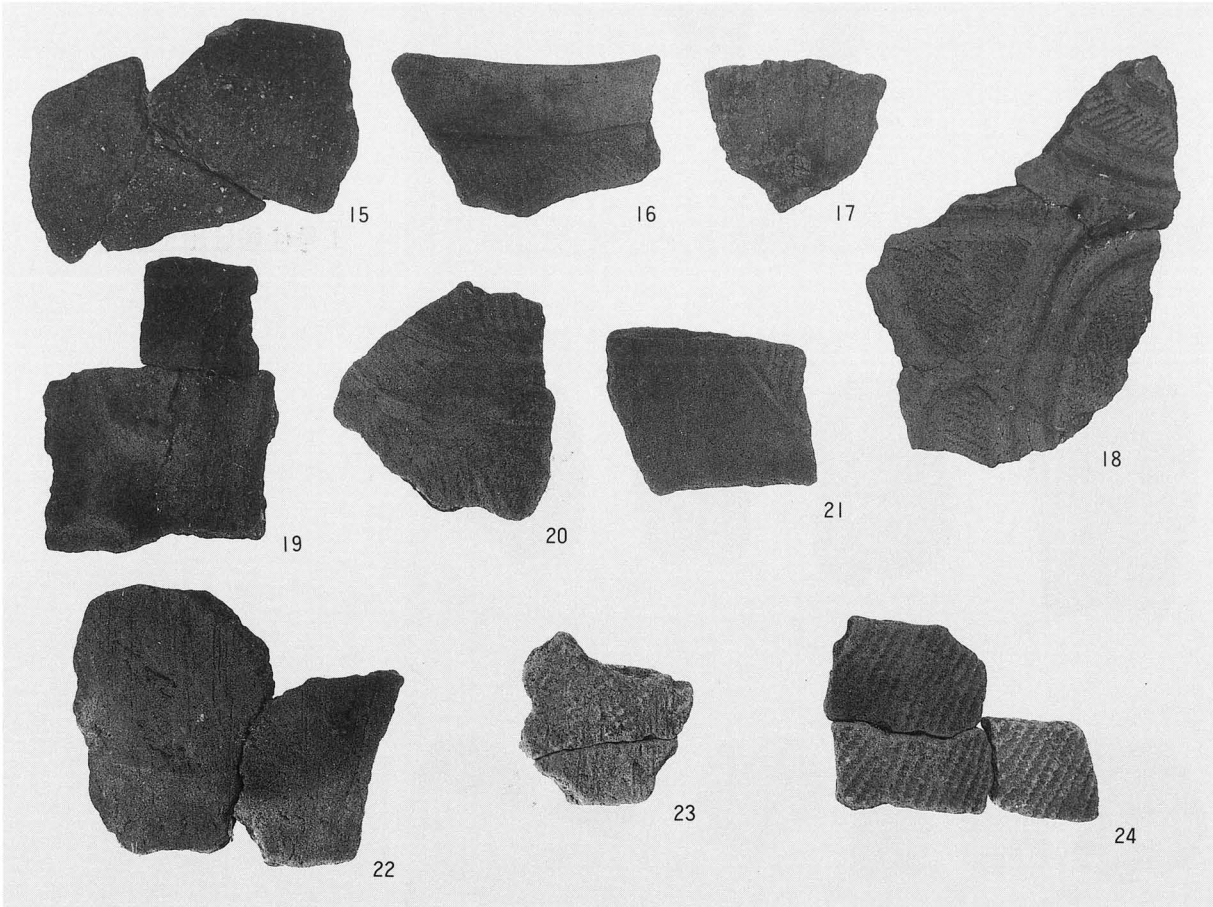


２号墳検出状況

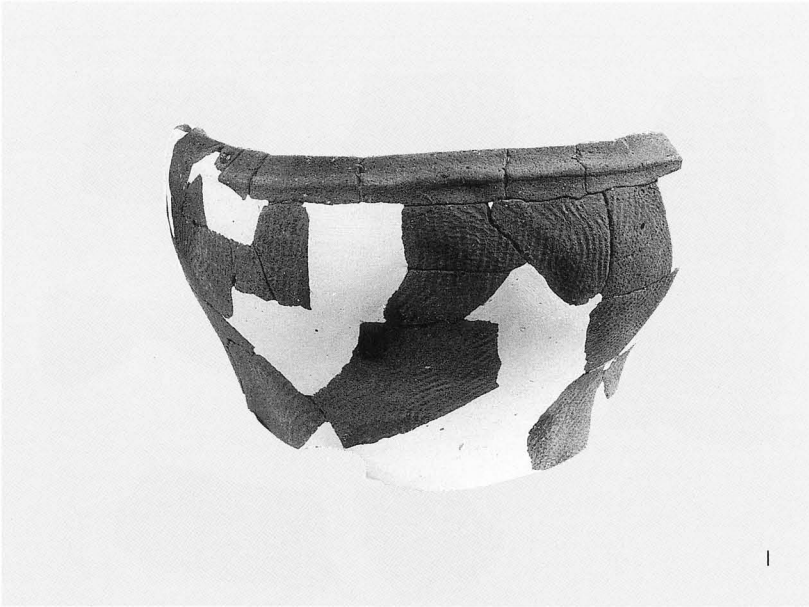
２号墳玄室部分



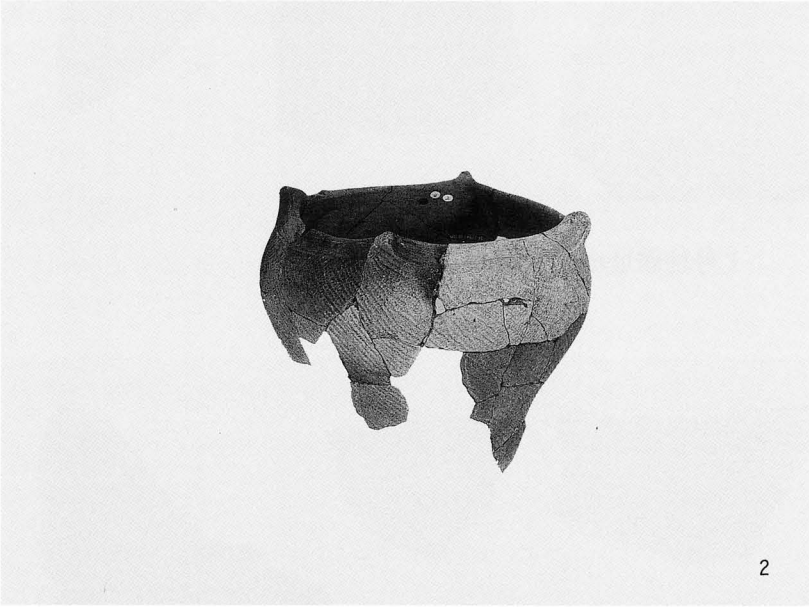
１号住居址出土土器①



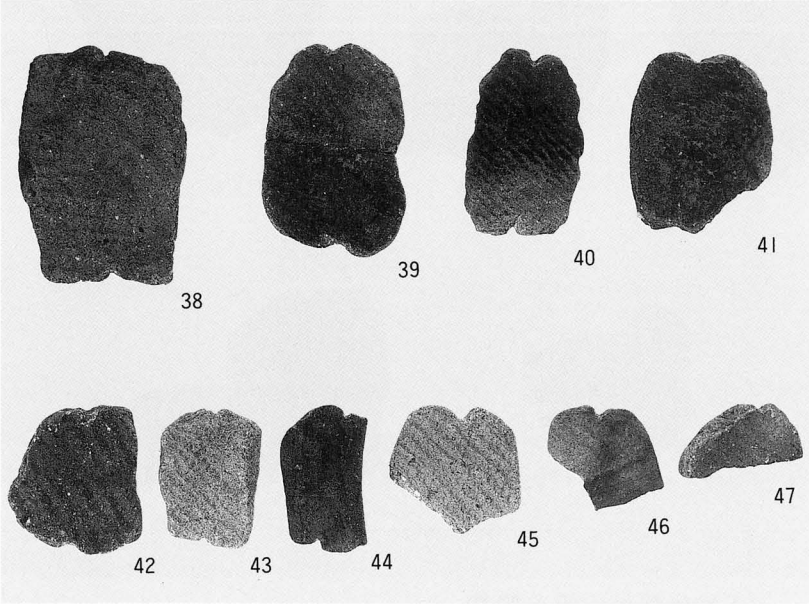
１号住居址出土土器②



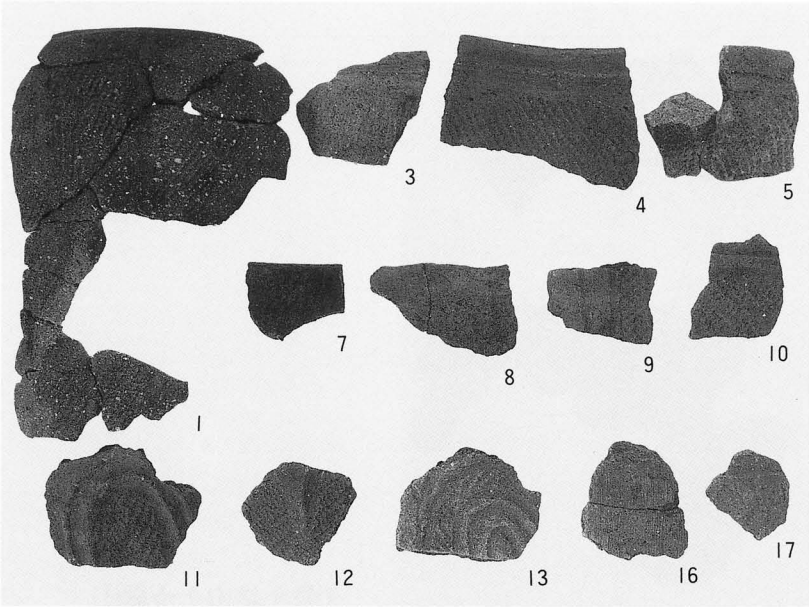
１号住居址出土土器③



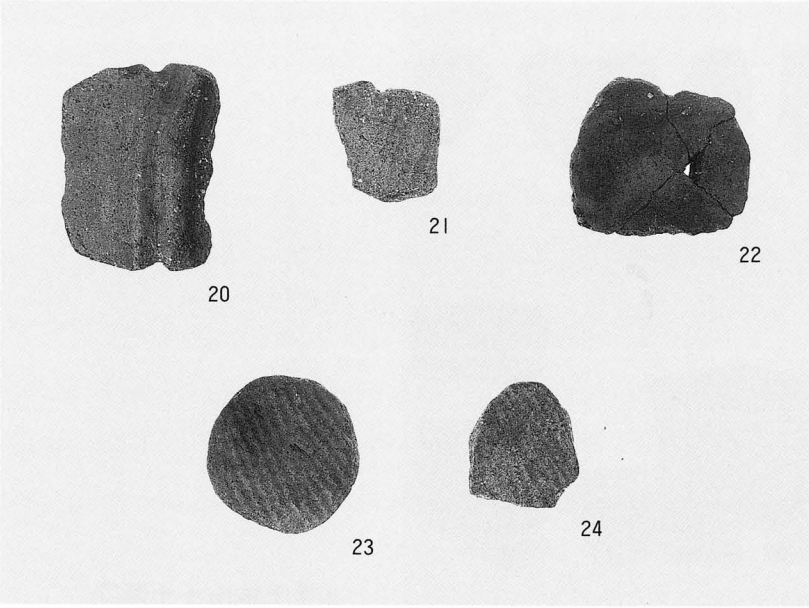
１号住居址出土土器④



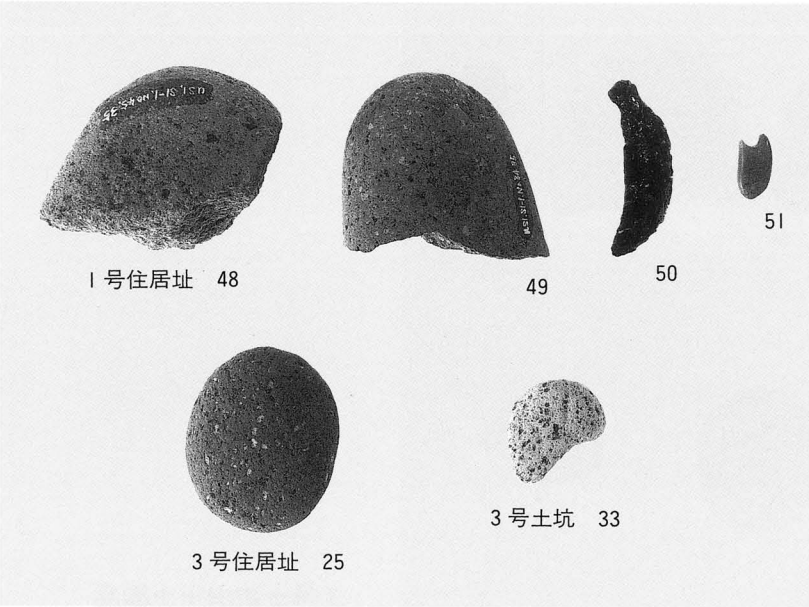
１号住居址出土土製品



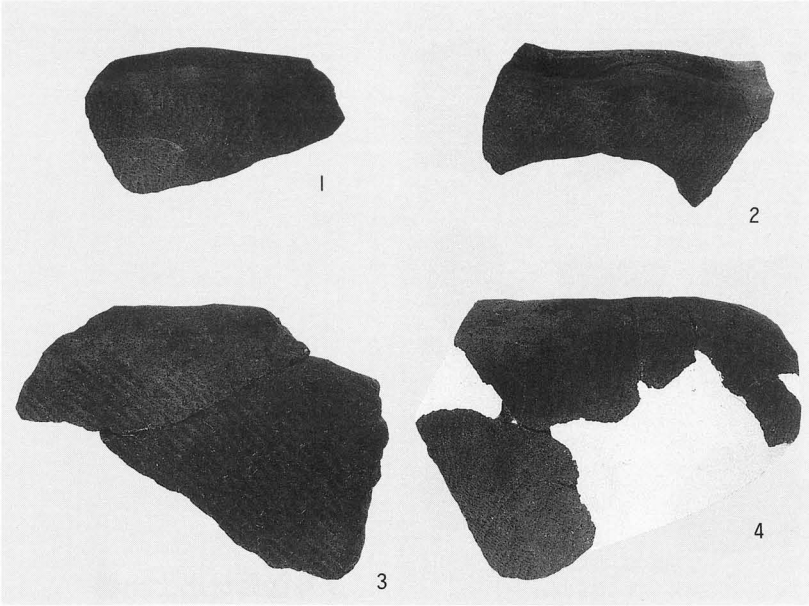
３号住居址出土土器



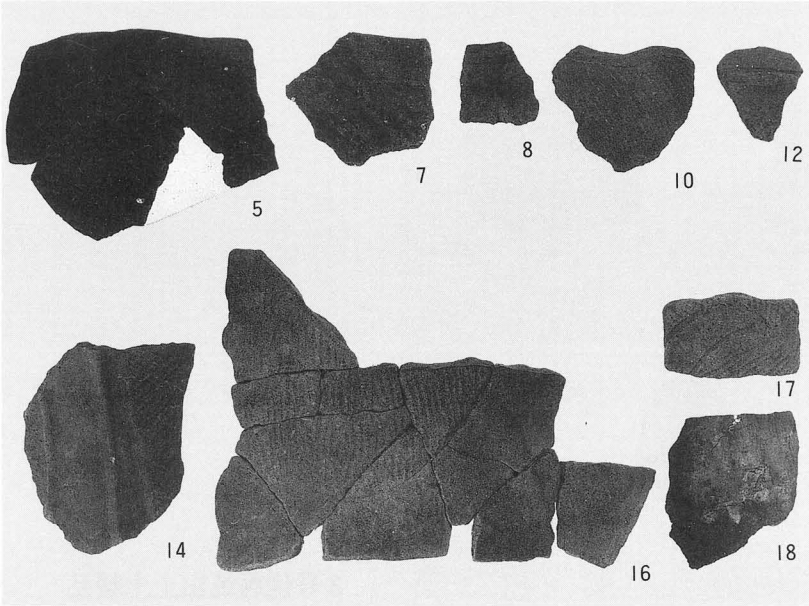
３号住居址出土土製品



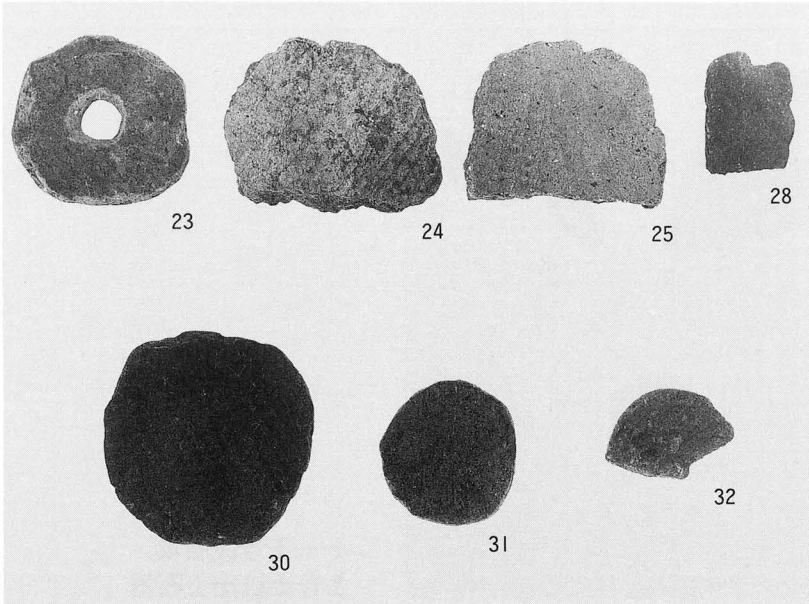
１・３号住居址、
３号土坑出土石器



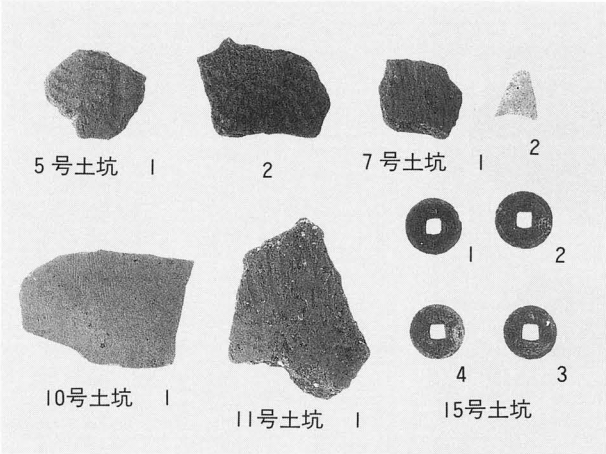
３号土坑出土土器①



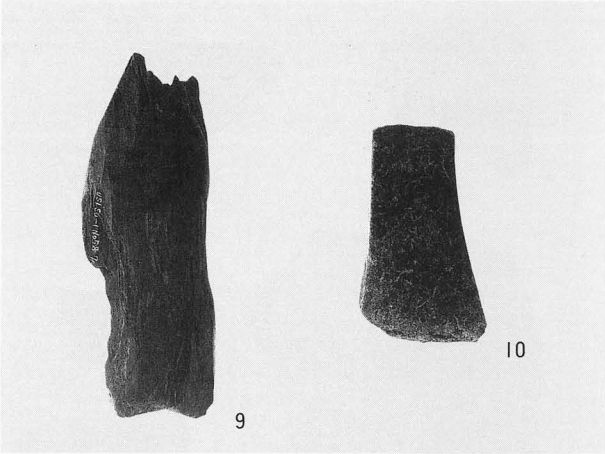
３号土坑出土土器②



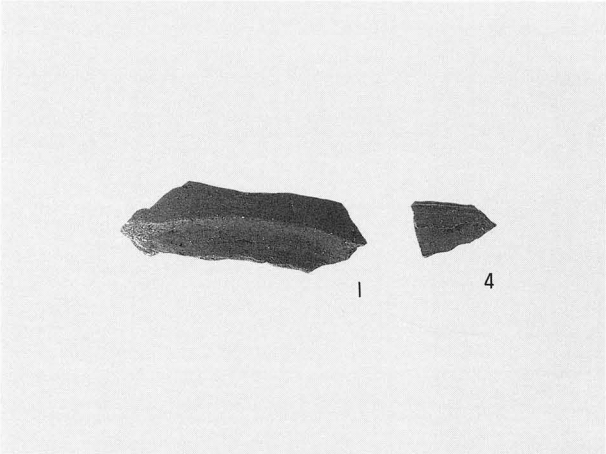
３号土坑出土土製品



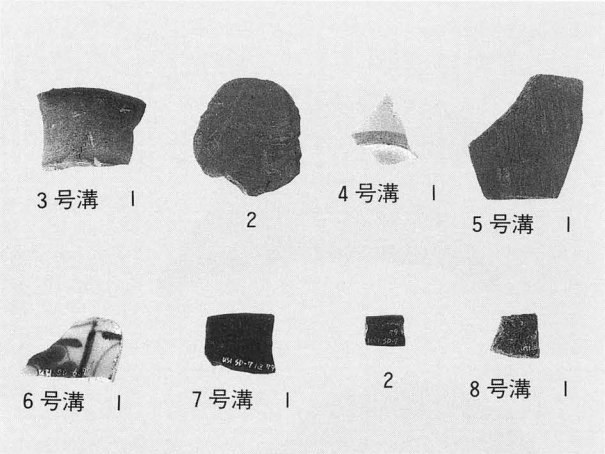
土坑出土遺物



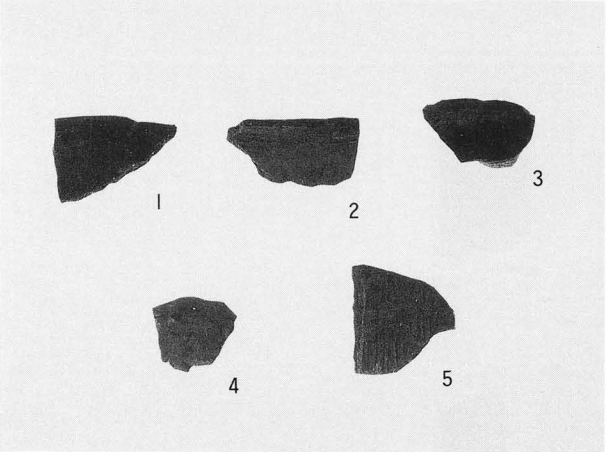
1号溝出土石器



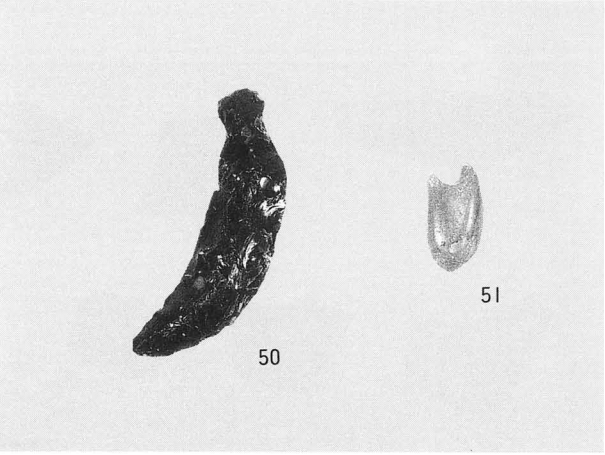
11号溝出土遺物



溝出土遺物

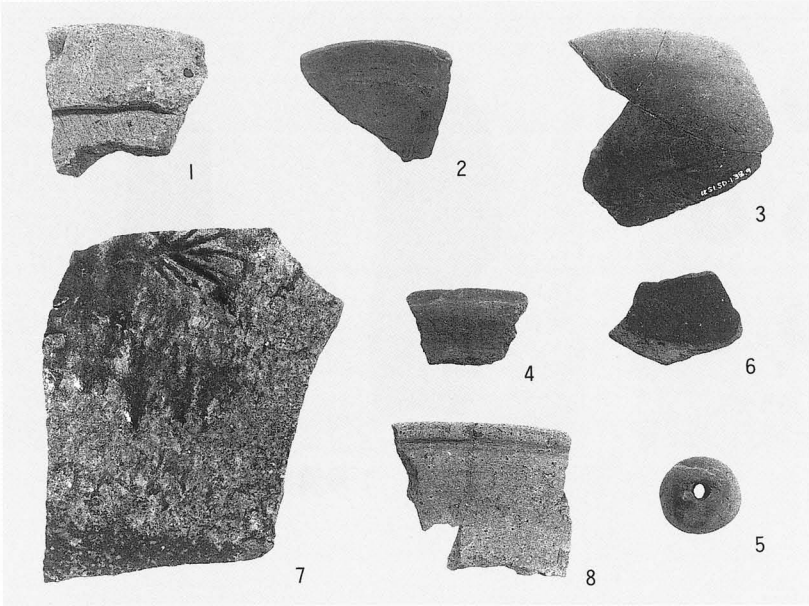


2号墳出土遺物

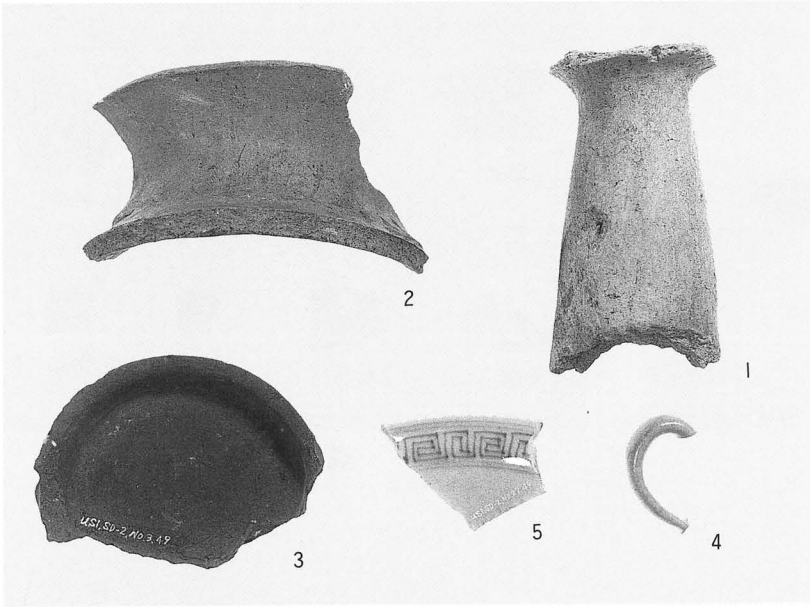


1号住居址出土石器

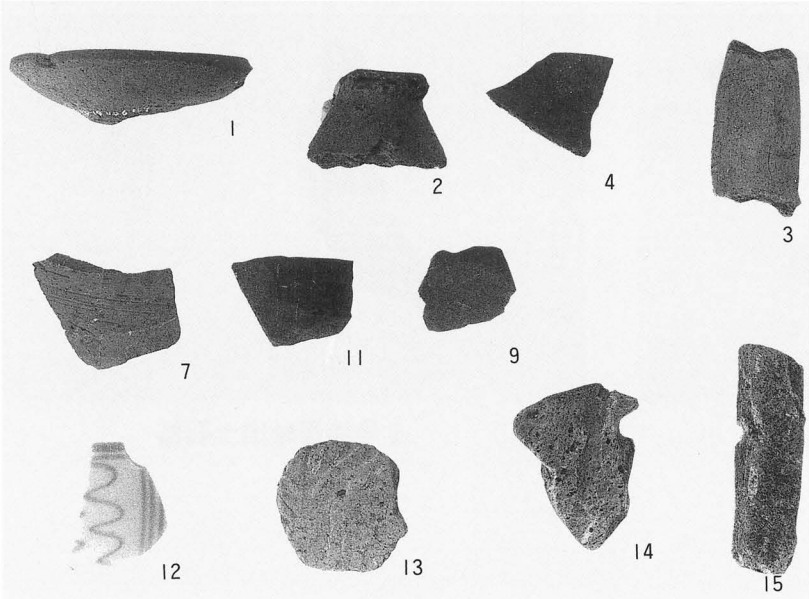
ＰＬ14　１・２・10号溝出土遺物



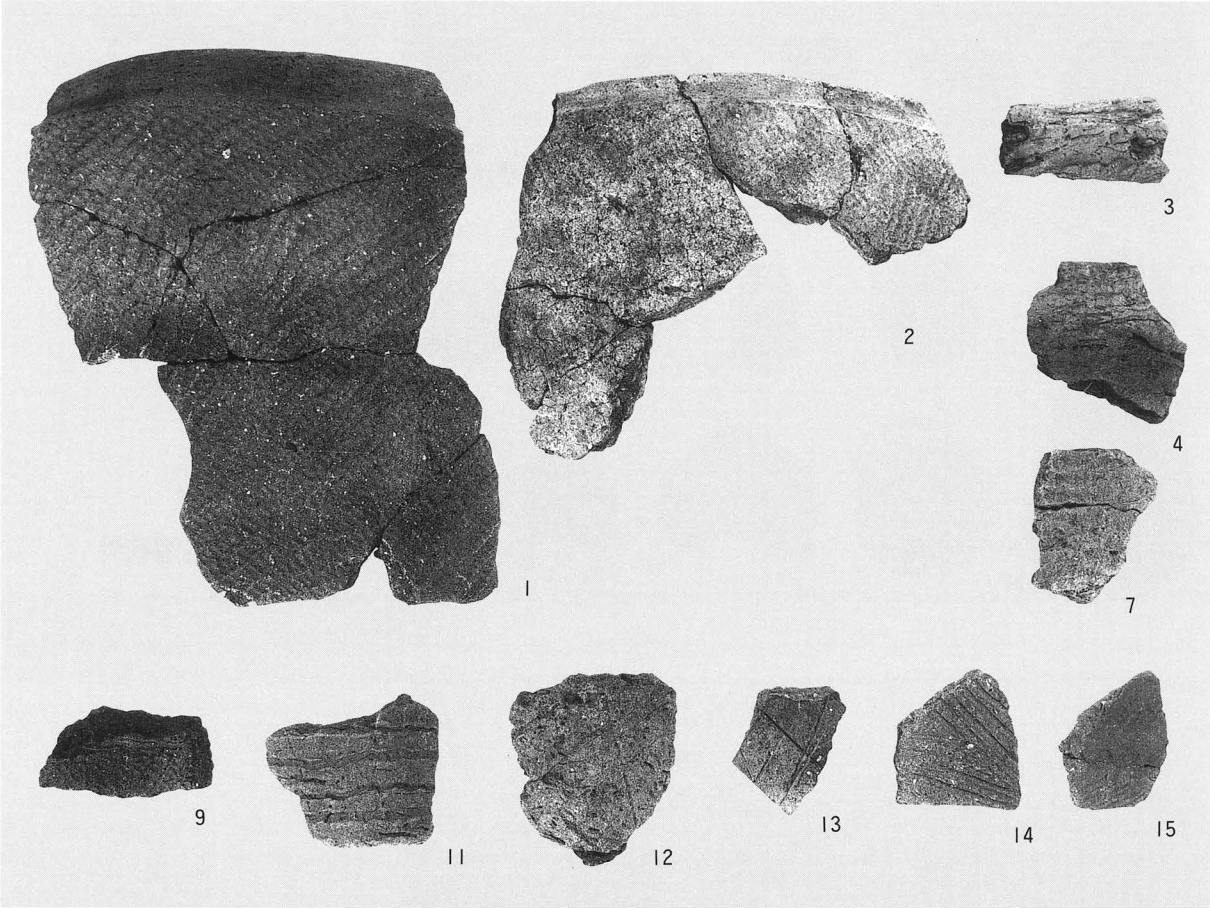
１号溝出土遺物



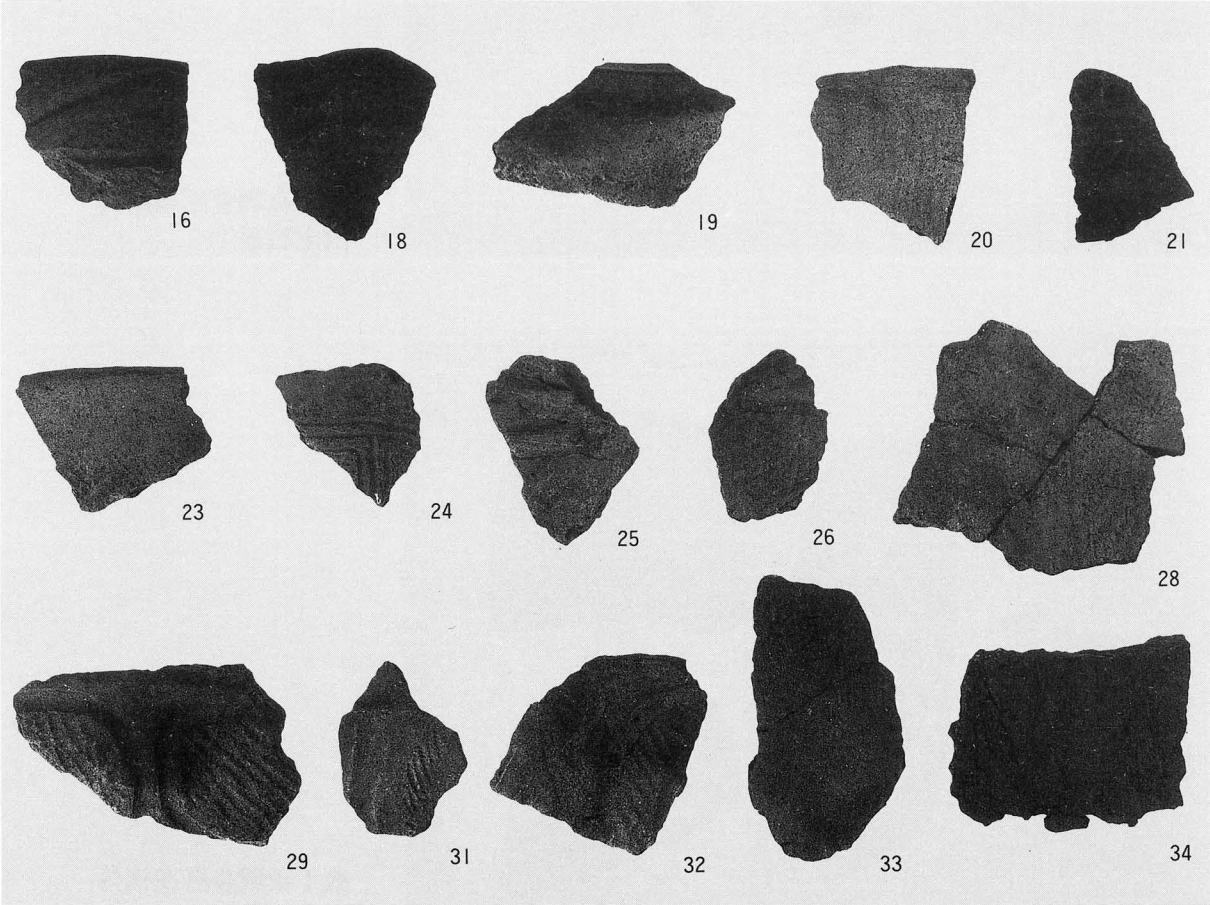
２号溝出土遺物



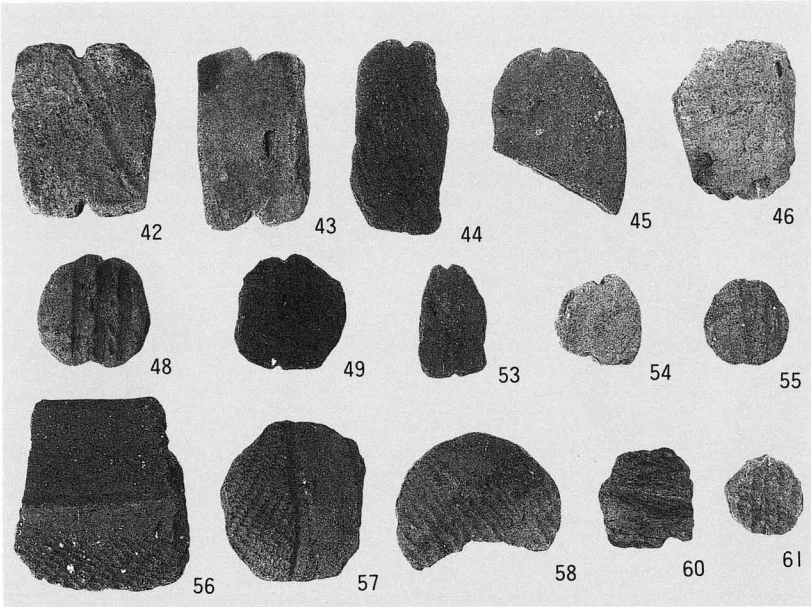
10号溝出土遺物



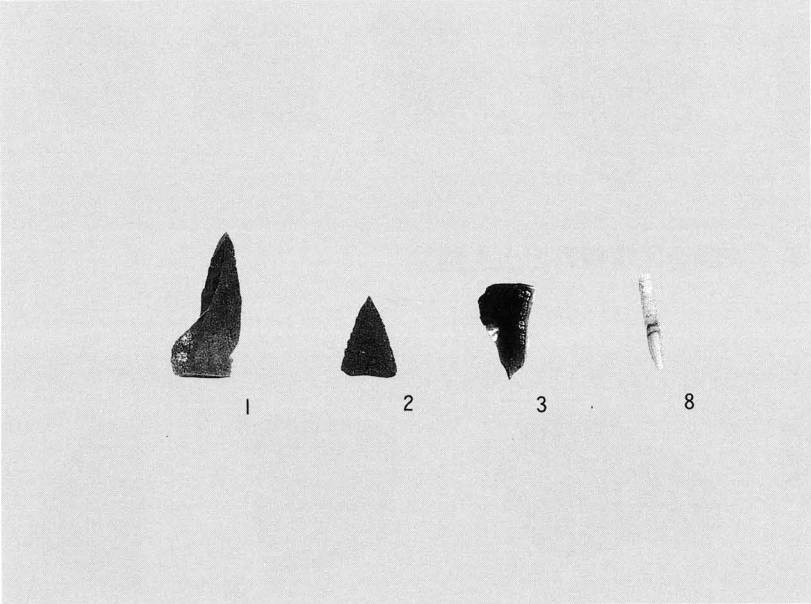
第１次調査区遺構外出土土器①



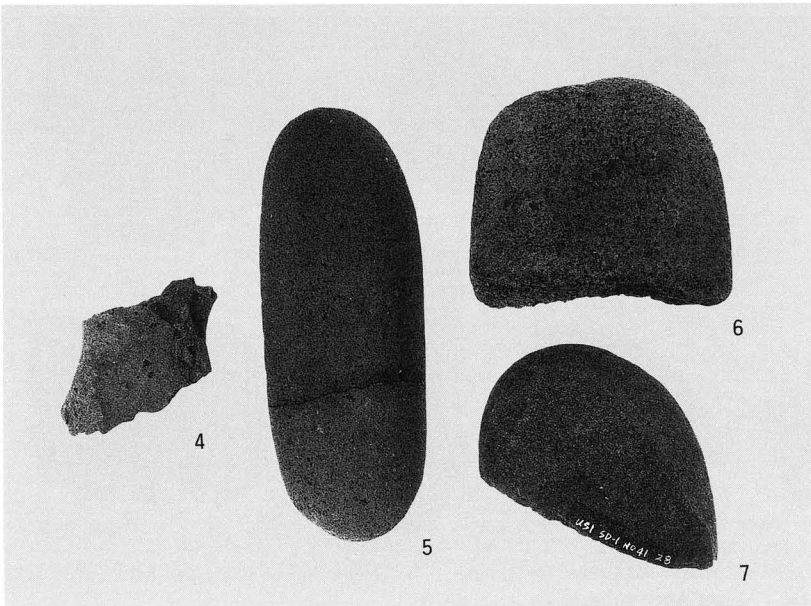
第１次調査区遺構外出土土器②



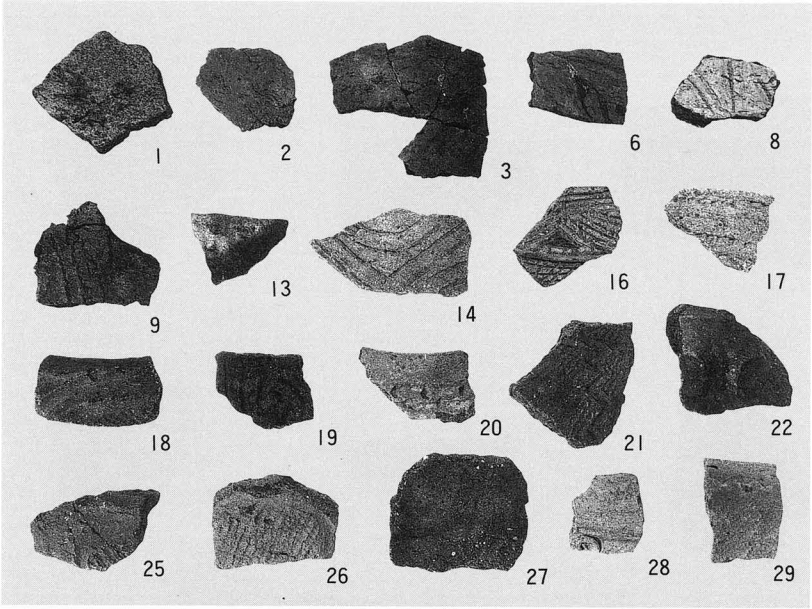
第１次調査区遺構外
出土土製品



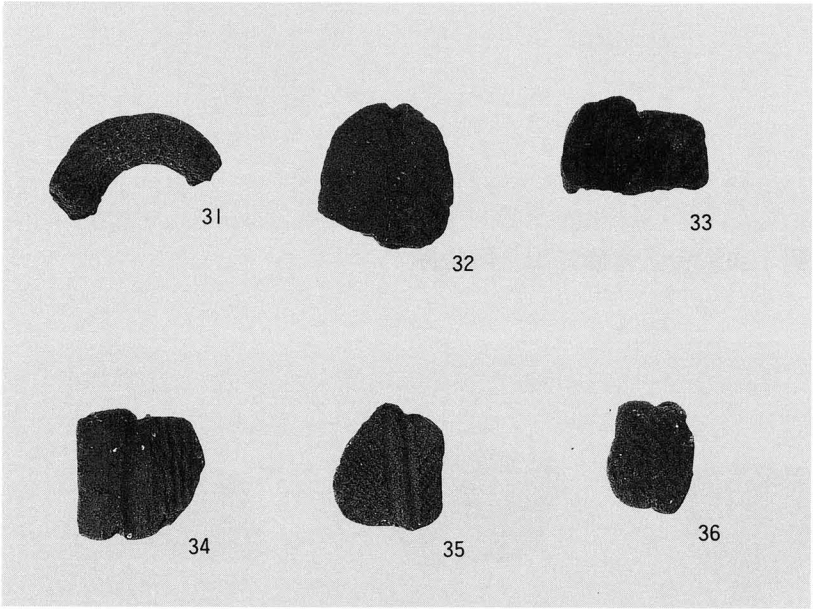
第１次調査区遺構外
出土石器①



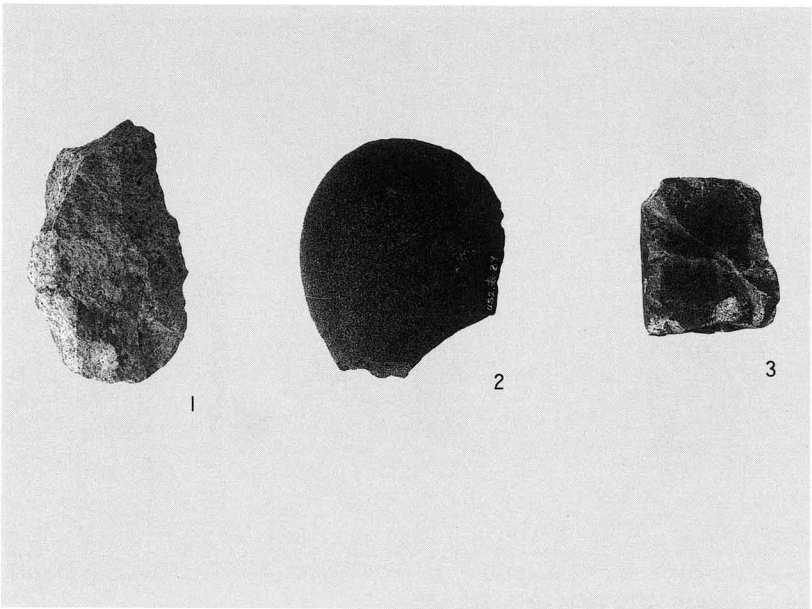
第１次調査区遺構外
出土石器②



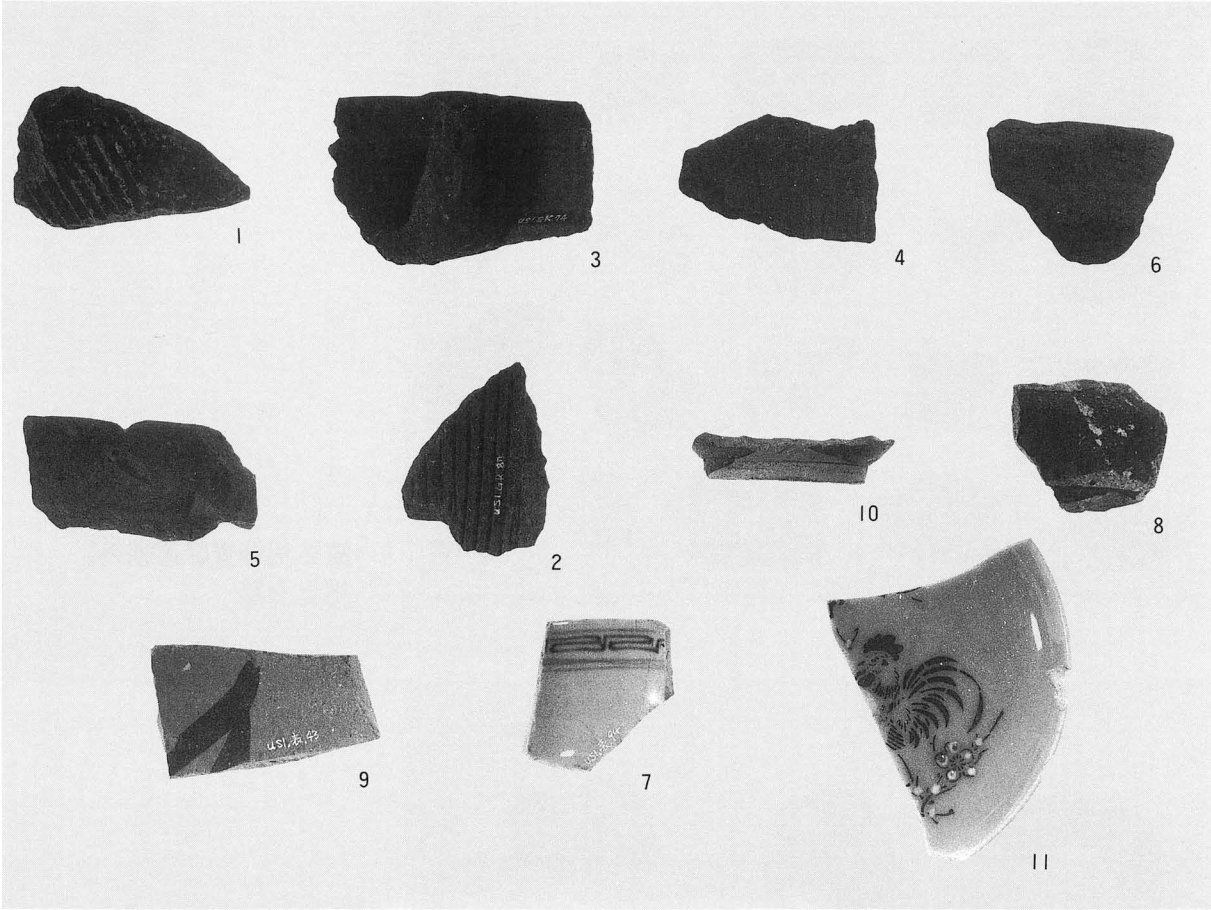
第２次調査区遺構外
出土土器



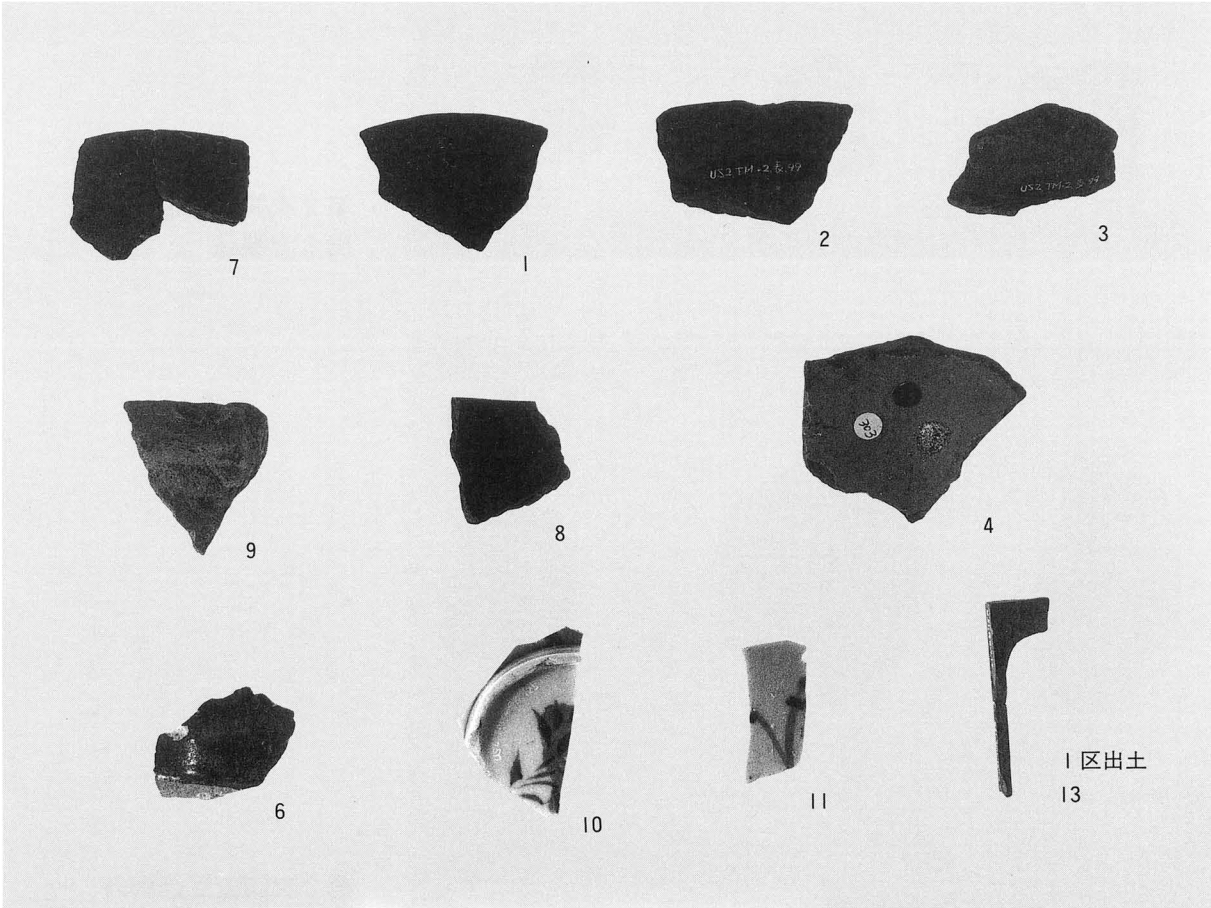
第２次調査区遺構外
出土土製品



第２次調査区遺構外
出土石器



第１次調査区遺構外出土陶磁器



第２次調査区遺構外出土陶磁器

神　明　遺　跡

（第１次・第２次調査）
土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第５集

編　　集：土浦市遺跡調査会
発　　行：土浦市教育委員会
問い合わせ先：上高津貝塚ふるさと歴史の広場
〒300-0811 土浦市上高津１８４３
TEL 0298(26)7111(代)
発 行 日：平成10年９月30日
印　　刷：(株)エリート印刷